

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 冊

買 田 岡 下 遺 跡

2004.10

香 川 県 教 育 委 員 会
国 土 交 通 省 四 国 地 方 整 備 局

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊

買田岡下遺跡 正誤表

図版目次 図版3 (1) IV区 (真上から) →VI区

図版目次 図版13 (1) S31 (北から) →SB31

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 冊

買田岡下遺跡

2004.10

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局



I・II区空中写真（北から）



調査区全景空中写真（東から）

序 文

買田岡下遺跡は、一般国道32号満濃バイパス建設に伴い発掘調査が行われた香川県仲多度郡仲南町十郷に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成4年度に用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、古墳時代前期、平安時代前半、室町時代前半の遺構が検出されました。特に平安時代前半の遺構群には大形の掘立柱建物跡が数棟検出されたほか、帯金具・緑釉陶器などの遺物が出土するなど、有力者の屋敷跡の一部である可能性が高く、この地域の古代集落の研究を進めるうえで大変貴重な資料を提供しました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年8月から平成16年3月まで実施しておりました整理事業が終了し、「一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 買田岡下遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局や関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年10月29日

香川県埋蔵文化財センター

所長 中 村 仁



例 言

1. 本報告書は、一般国道32号溝濃バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県仲多度郡仲南町十郷に所在する買田岡下遺跡（かいたおかしたいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、試掘調査を平成4年6月15日～18日の期間、香川県教育委員会事務局文化行政課が担当し、本調査を平成4年8月1日～平成5年3月31日の期間、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
調査組織は、本文中に記したとおりである。
4. 調査・整理にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
国土交通省四国地方整備局、仲南町教育委員会、買田地区連合自治会
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
編集・執筆は、同センター主任文化財専門員真鍋昌宏が担当した。
なお、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが実施した。
6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
また遺構は、下記の略号により表示している。
SB 掘立柱建物跡 SD 溝状遺構 SK 土坑
SP 柱穴跡
7. 挿図の一部に、国土地理院地形図「普通寺」(1/25,000)、国土基本図「IV-FE67」(1/5,000)を使用した。
8. 報告書の記述にあたっては、下記の二書から適宜文章を抜粋して用いた。
『埋蔵文化財試掘調査報告VI 国道バイパス・県道建設予定地及び県営は場整備事業予定内の調査』1993年3月 香川県教育委員会
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成4年度』1993年3月 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局（現国土交通省四国地方整備局）

本文目次

序文

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業	2
第4節 発掘調査及び整理作業の体制	5
第2章 立地と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	11
第1節 調査区	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構・遺物	12
1 掘立柱建物跡	19
2 柱穴	57
3 溝状遺構	63
4 土坑	102
5 包含層	121
第4章 まとめ	146
第1節 遺構の変遷	146
第2節 SD37 出土土器について	152

挿図目次

- 第1図 調査区割り図及び試掘調査トレンチ位置図
- 第2図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)
- 第3図 周辺の地形
- 第4図 I区中東壁・II区南南壁土層図 (1/40) 及び調査区内土層位置図
- 第5図 II区東北壁・II区東トレンチ北壁土層図 (1/40)
- 第6図 掘立柱建物跡配置図
- 第7図 SB01平・断面図、出土遺物実測図
- 第8図 SB02平・断面図、出土遺物実測図
- 第9図 SB03平・断面図
- 第10図 SB04平・断面図、出土遺物実測図
- 第11図 SB05平・断面図、出土遺物実測図及びSA01・02平・断面図
- 第12図 SB06平・断面図
- 第13図 SB07平・断面図、出土遺物実測図
- 第14図 SB08平・断面図、出土遺物実測図
- 第15図 SB09平・断面図、出土遺物実測図
- 第16図 SB10平・断面図、出土遺物実測図
- 第17図 SB10出土遺物実測図
- 第18図 SB11平・断面図、出土遺物実測図
- 第19図 SB12平・断面図
- 第20図 SB13平・断面図、出土遺物実測図
- 第21図 SB14平・断面図
- 第22図 SB15平・断面図、出土遺物実測図
- 第23図 SB16平・断面図、出土遺物実測図
- 第24図 SB17平・断面図
- 第25図 SB20平・断面図、出土遺物実測図
- 第26図 SB21平・断面図、出土遺物実測図
- 第27図 SB22・23平・断面図
- 第28図 SB24平・断面図、出土遺物実測図
- 第29図 SB25平・断面図、出土遺物実測図
- 第30図 SB30平・断面図、出土遺物実測図
- 第31図 SB31平・断面図
- 第32図 柱穴配置図

- 第33图 SP出土遺物実測図 (1)
第34图 SP出土遺物実測図 (2)
第35图 SP出土遺物実測図 (3)
第36图 溝状遺構配置図
第37图 SD02・05平・断面図、出土遺物実測図
第38图 SD10・12平・断面図
第39图 SD28～31平面図、出土遺物実測図 (1)
第40图 SD28～31断面図
第41图 SD28～31出土遺物実測図 (2)
第42图 SD28～31出土遺物実測図 (3)
第43图 SD37遺物出土状況
第44图 SD37平・断面図
第45图 SD37出土遺物実測図 (1)
第46图 SD37出土遺物実測図 (2)
第47图 SD37出土遺物実測図 (3)
第48图 SD37出土遺物実測図 (4)
第49图 SD48平面図、出土遺物実測図
第50图 SD40～43平・断面図
第51图 SD40・41出土遺物実測図
第52图 SD55～57平・断面図、出土遺物実測図
第53图 SD72平・断面図
第54图 SD69・70・71・73平・断面図、出土遺物実測図
第55图 SD50・58・62～68平・断面図
第56图 SD67・68出土遺物実測図
第57图 SD74～77平・断面図、SD74出土遺物実測図 (1)
第58图 SD74 (2)・SD76出土遺物実測図
第59图 SD78平面図、出土遺物実測図 (1)
第60图 SD78断面図、出土遺物実測図 (2)
第61图 SD78出土遺物実測図 (3)
第62图 SD79～83平・断面図
第63图 SD79・80・83出土遺物実測図
第64图 土坑配置図
第65图 SK01～05平・断面図、出土遺物実測図
第66图 SK07・10～12平・断面図、出土遺物実測図
第67图 SK13・14・22・25平・断面図、出土遺物実測図
第68图 SK32～35平・断面図、出土遺物実測図

- 第69图 SK37平·断面图、出土遺物実測图
第70图 SK36·38~40·44平·断面图、出土遺物実測图
第71图 SK45~47平·断面图、出土遺物実測图
第72图 SK49~52平·断面图、出土遺物実測图
第73图 SK53平·断面图、出土遺物実測图
第74图 SK41~43·54平·断面图、出土遺物実測图
第75图 SK56·58·59·61·66平·断面图
第76图 SK71·72·74平·断面图、出土遺物実測图
第77图 SK75~77平·断面图、出土遺物実測图
第78图 I区西包含層出土遺物実測图
第79图 I区中包含層出土遺物実測图 (1)
第80图 I区中包含層出土遺物実測图 (2)
第81图 I区東包含層出土遺物実測图
第82图 II区西包含層出土遺物実測图 (1)
第83图 II区西包含層出土遺物実測图 (2)
第84图 II区西包含層出土遺物実測图 (3)
第85图 II区西包含層出土遺物実測图 (4)
第86图 II区東包含層出土遺物実測图 (1)
第87图 II区東包含層出土遺物実測图 (2)
第88图 II区東包含層出土遺物実測图 (3)
第89图 II区南包含層出土遺物実測图 (1)
第90图 II区南包含層出土遺物実測图 (2)
第91图 II区南包含層出土遺物実測图 (3)
第92图 II区南包含層出土遺物実測图 (4)
第93图 II区南包含層出土遺物実測图 (5)
第94图 II区包含層出土遺物実測图
第95图 III区西包含層出土遺物実測图
第96图 VI区包含層出土遺物実測图
第97图 包含層出土遺物実測图
第98图 遺構変遷图 (1)
第99图 遺構変遷图 (2)
第100图 遺構変遷图 (3)
第101图 遺構変遷图 (4)
第102图 遺構変遷图 (5)

図版目次

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| 巻頭図版 1 I・II区空中写真(北から) | 図版16(1)SD03 断面(北から) |
| 2 調査区全景空中写真(東から) | (2)SD04 断面(北から) |
| 図版 1(1)I区西・中(真上から) | 図版17(1)SD10 断面(南から) |
| (2)I区中(東半)・東、II区西(西半)(真上から) | (2)SD12 南断面(南から) |
| 図版 2(1)II区西(東半)・東・南東・南、III区西(真上から) | 図版18(1)SD37 南半部 全景(北から) |
| (2)III区東、IV区(真上から) | (2)SD37 北断面(南から) |
| 図版 3(1)IV区(真上から) | 図版19(1)SD37 遺物出土状況(南から) |
| (2)II区南 全景(東から) | (2)SD37 遺物出土状況(北から) |
| 図版 4(1)II区南 検出遺構全景(東から) | 図版20(1)SD37 遺物出土状況(北から) |
| (2)II区東 縄文河道調査風景(西から) | (2)SD37 遺物出土状況(南から) |
| 図版 5(1)II区西 北壁西部断面(南から) | 図版21(1)SD37 遺物出土状況(南から) |
| (2)II区西 北壁東部断面(南から) | (2)SD37 遺物出土状況(北から) |
| 図版 6(1)IV区 全景(西から) | 図版22(1)SD37 遺物出土状況(細部) |
| (2)SB01・02(南から) | (2)SD37 遺物出土状況(東から) |
| 図版 7(1)SB03・04(南から) | 図版23(1)SD37 土器出土状況 |
| (2)SB05・06(北から) | (2)SD37 土器出土状況 |
| 図版 8(1)SB07~09(北から) | 図版24(1)SD37 土器出土状況 |
| (2)SP208(SB07)土器出土状況 | (2)SD40・41(南から) |
| 図版 9(1)SB10・11(北から) | 図版25(1)SD40・41(北から) |
| (2)SB13・15(北から) | (2)SD40 東北壁(南から) |
| 図版10(1)SB14(南から) | 図版26(1)SD41 北半部 土器出土状況(南から) |
| (2)SB16・17(北から) | (2)SD78 断面(南から) |
| 図版11(1)SB20(西から) | 図版27(1)SK01 断面(西から) |
| (2)SB21(北から) | (2)SK02 断面(東から) |
| 図版12(1)SB22~25(西から) | 図版28(1)SK03 遺物出土状況(北から) |
| (2)SB30(南から) | (2)SK16 断面(東から) |
| 図版13(1)S31(北から) | 図版29(1)SK18 断面(北から) |
| (2)SP144鉄器出土状況(北から) | (2)SK25 断面(北から) |
| 図版14(1)SP1518(東から) | 図版30(1)SK34 完掘(西から) |
| (2)SP1521(東から) | (2)SK34内柱穴鉄器出土状況(南から) |
| 図版15(1)SD01 断面(北から) | 図版31(1)SK37(北から) |
| (2)SD02 断面(北から) | (2)SK37 断面(南から) |

図版32(1)SK37 完掘(東から)	図版41 出土遺物(1)
(2)SK37 床面敷物(西から)	図版42 出土遺物(2)
図版33(1)SK44 鉄刀出土状況(北から)	図版43 出土遺物(3)
(2)SK46 断面(東から)	図版44 出土遺物(4)
図版34(1)SK47 木板出土状況(西から)	図版45 出土遺物(5)
(2)SK47 木板出土状況(北から)	図版46 出土遺物(6)
図版35(1)SK47 木板出土状況(東から)	図版47 出土遺物(7)
(2)SK53 完掘(西から)	図版48 出土遺物(8)
図版36(1)SK62 断面(南から)	図版49 出土遺物(9)
(2)SK72 断面(東から)	図版50 出土遺物(10)
図版37(1)SK74 断面(東から)	図版51 出土遺物(11)
(2)SK77 遺物出土状況(東から)	図版52 出土遺物(12)
図版38(1)SK77 遺物出土状況(東から)	図版53 出土遺物(13)
(2)SK77 遺物出土状況(西から)	図版54 出土遺物(14)
図版39(1)SK77 石出土状況(東から)	図版55 出土遺物(15)
(2)SK77 石出土状況(東から)	図版56 出土遺物(16)
図版40(1)SK78 遺物出土状況(東から)	
(2)現地説明会	

表 目 次

第1表 買田岡下遺跡整理作業工程表	第5表 石器観察表
第2表 買田岡下遺跡の周辺遺跡	第6表 鉄器観察表
第3表 掘立柱建物跡一覧表	第7表 木器観察表
第4表 土器観察表	

付 図 目 次

付図1 香川県買田岡下遺跡全体図(1)	付図3 香川県買田岡下遺跡全体図(3)
付図2 香川県買田岡下遺跡全体図(2)	付図4 香川県買田岡下遺跡I区中詳細図

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

調査に至る経過は、埋蔵文化財試掘調査報告VIに詳しいのでこれを引用する。

「国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財の保護については、これまで香川県教育委員会と国土交通省香川工事事務所との間で適宜協議を実施し、その適切な保護に努めてきた。

中讃地方南部の主要幹線道路である国道32号線の慢性的な渋滞を緩和する目的で整備が進められている満濃バイパス（満濃町羽間～仲南町買田）については、昭和63年11月1日付建四香第1461号で照会文書が提出されている。香川県教育委員会では、平成元年度より満濃町四条福家地区・羽間地区・吉野下地区・五条地区の用地交渉の妥結した場所において試掘調査を実施し、そのうち、吉野下地区において古墳時代～古代にかけての集落跡である吉野下・秀石遺跡（8,500㎡）、及び五条地区において古墳時代後期ごろのものと思われる古墳の墳丘の一部を確認している。平成4年度は、満濃町五条地区～仲南町買田地区の延長約880mを対象に平成4年6月15日～18日の期間で試掘調査を実施した。

事前に道路建設予定地内の現地踏査を実施し、遺物の表面採集、地形観察等により、試掘調査の必要の有無の確認および試掘場所の選定を行い、あわせて水路や公・私道の現状や重機の進入経路等を確認した。

試掘調査はトレンチ調査で、以下の方法を原則とした。

試掘トレンチは調査対象の範囲および地形、地割等を勘案して設定した。道路建設予定地内の試掘調査の場合、建設用地の両側近くにそれぞれトレンチを設定するのが有効であるが、今年度は、分布調査の結果等により、また、作付けの関係から建設予定地内の境界近くに千鳥に、地割にあわせてトレンチを設定した。トレンチの規模は幅約2mである。トレンチの掘削は重機により土層毎に掘削し、遺構等の発見される地面で一時停止して、その後は人力により掘削断面の清掃を行った。遺構等の検出後は土層柱状図・遺構配置略図を作成し、適宜写真撮影を行った。記録作成後、必要に応じてさらに深く掘削して、土層の堆積状況を観察・記録し、調査終了後旧状に埋め戻した。」

また、「トレンチは、地形等を勘案し、用地買収状況や作付け状況等から平野部に11箇所ほど設定した。

基本的な層序は、耕作土下に黄色粘土の地山が現れるが、③トレンチにおいては、耕作土下に厚さ10cmの灰色砂質土の遺物包含層が確認された。調査の結果、①トレンチ東側の水田から微高地が広がることが確認されたが、⑦トレンチより東側の部分については、後世の地下げを受けているらしく、残存状況の悪い近代以降の土坑が検出されたのみであった。検出された遺構としては、溝・土坑があげられる。溝は、②・⑤・⑥トレンチで検出され、特に⑤トレンチで検出された幅1.4m、深さ0.2mのものには、古代～中世にか

けての須恵器片・土師器片・黒色土器碗片が出土している。また、土坑は、②・③・⑥トレンチで検出され、いずれも長さ1m以上、幅0.8m以上で方形である。

トレンチ調査及び地形観察の結果、①トレンチ東側から微高地が広がることがわかり、③トレンチの包含層から古代～中世頃のものと思われる遺物が出土していることから、同時期もしくはそれ以前の遺構・遺物が所在するものと思われる。また、⑦トレンチ以東は近代以降の土坑の遺存状況からみてかなりの地下げを受けているものと思われ、これ以前の遺構・遺物は所在しないものと思われる。

以上のことから、第3図に示す範囲(8,000㎡)において文化財保護法に基づく適切な保護措置を講ずる必要がある。」と結論され、本調査が財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。〔埋蔵文化財試掘調査報告Ⅵ 国道バイパス・県道建設予定地及び県営は場整備事業予定内の調査〕1993年3月 香川県教育委員会)

第2節 調査の経過

調査は、試掘結果を受けて香川県教育委員会と現国土交通省四国地方整備局香川工事事務所の協議の結果、同年に本調査を実施することになり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは、同年8月1日に調査に着手し、8ヵ月の期間を要し平成5年3月31日に終了した。

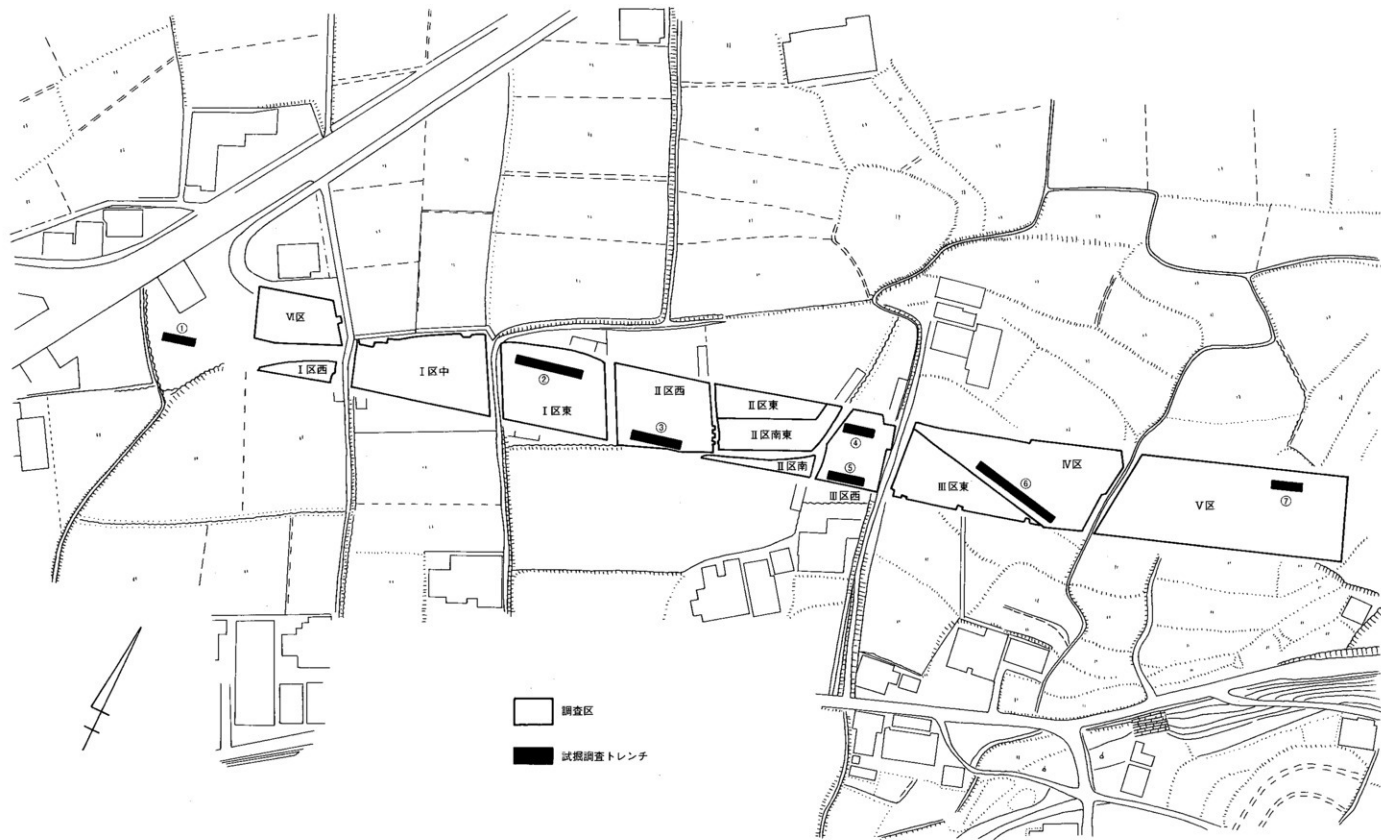
〔国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成4年度〕1993年3月 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

第3節 整理作業

整理作業は、平成15年8月1日に開始し、平成16年3月31日に終了した。整理作業の工程は第1表のとおりである。

第1表 買田岡下遺跡整理作業工程表

区分	工 程	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
職員	整 理 指 導												
	原 稿 執 筆												
	接 合・復 元												
遺物	実 測・拓 本												
	レイアウト												
	ト レ ース												
	観 察 表												
	写 真 撮 影												
	写真レイアウト												
	遺 構 図 整 理												
遺構	レイアウト												
	ト レ ース												
	写真レイアウト												
印刷	編 集												



第1図 調査区割り図及び試験調査トレンチ位置図

第4節 発掘調査及び整理作業の体制

平成4年度の発掘調査及び平成15年度の整理作業は次の組織で実施した。なお、例言でも触れたように、平成15年度末で財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが廃止となり、平成16年度から香川県埋蔵文化財センターに業務が移行したため、本報告の発注及び校正作業等は香川県埋蔵文化財センターで実施することとなった。組織は次のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課 長 中村 仁
主 幹 菅原良弘
課長補佐 小原克己
庶務 係 長 宮内憲生
(平成4年5月31日まで)
源田和幸
(平成4年6月1日から)
主 事 櫻木新士
石川恵三子
埋蔵文化財 係 長 藤好史郎
主任技師 国木健司
主任技師 北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所 長 松本豊胤
次 長 市原敏則
総務 係 長 土井茂樹
係 長 今田 修
主任主事 黒田晃郎
(平成4年5月31日まで)
主任主事 大西建司
(平成4年6月1日から)
調査 文化財専門員 西村尋文
文化財専門員 高月 計
主任技師 大久保徹也
調査技術員 高橋佳緒里

平成15年度

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所 長 中村 仁
次 長 渡部明夫
総務 副 主 幹 野保昌弘
係 長 多田敏弘
主 査 塩崎かおり
主任主事 田中千晶

整理 主任文化財専門員 真鍋昌宏
担 当 葛西 薫、小林里美、
青屋真理、東川真希子、
上原慶子

平成16年度

香川県埋蔵文化財センター

総括 所 長 中村 仁
次 長 渡部明夫
総務 総務課長 野保昌弘
係 長 松崎日出穂
主 査 塩崎かおり
主任主事 田中千晶

資料普及課 課長事務取扱 渡部明夫
校正担当 葛西 薫、
辻 悦子



第2図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

第2表 買田岡下遺跡の周辺遺跡

番号	種別	遺跡名	遺跡名ふりがな	所在地	時代	備考
1	包含地	岩崎遺跡	いわさきいせき	普通寺市大麻町岩崎		
2	包含地			普通寺市大麻町		
3	古墳	大麻神社古墳	おおあさじんじゃこふん	普通寺市大麻町上村上		
4	古墳	大麻神社2号墳	おおあさじんじゃ2ごうふん	普通寺市大麻町		
5	古墳	大麻神社3号墳	おおあさじんじゃ3ごうふん	普通寺市大麻町		
6	古墳	大麻神社4号墳	おおあさじんじゃ4ごうふん	普通寺市大麻町		
7	古墳	大麻神社5号墳	おおあさじんじゃ5ごうふん	普通寺市大麻町		
8	窯			普通寺市大麻町		
9	古墳	百合山1号	ゆりやま1ごう	普通寺市大麻町上村上		
10	古墳	百合山2号	ゆりやま2ごう	普通寺市大麻町上村上		
11	古墳	百合山3号	ゆりやま3ごう	普通寺市大麻町上村上		
12	寺院	称名院跡	しょうみょういんあと	琴平町大西山		
13	寺院	金光院跡	こんこういんあと	金刀比羅宮境内区域		
14	墓	清塚	きよづか	琴平町一ノ坂		
15	寺院	多聞院跡	たもんいんあと	琴平町札の前	中世	
16	山城	愛宕山城跡	あたごやまじょうあと	琴平町 892-1		
17	古墳	愛宕山古墳	あたごやまこふん	琴平町川西	古墳	
18	山城	丸山城跡	まるやまじょうあと	仲南町十郷買田	中世	伝 天正年間飯尾園盛
19	山城	佐文城跡	さぶみじょうあと	仲南町佐文尾郷		
20	古墳	西山西部2号墳	にしやませいぶ2ごうふん	溝邊町羽間		
21	古墳	西山西部3号墳	にしやませいぶ3ごうふん	溝邊町羽間		
22	城館	石川城跡	いしかわじょうあと	琴平町榎井中ノ町	中世	伝石川将監館
23	城館	本庄城跡	ほんじょうじょうあと	琴平町五条	中世	伝能勢大内藏館 文明年間
24	寺院	弘安寺廃寺	こうあんじはいじ	溝邊町四条東村	古代	伝行基(あるいは 智証)開基
25	集落跡	吉野下秀石遺跡	よしのしもひでいしせき	溝邊町吉野下秀石	弥生・古墳	発掘調査
26	集落跡	買田岡下遺跡	かいたおかしたいせき	仲南町十郷買田	古墳	発掘調査
27	古墳	買田峠古墳	かいたとうげこふん	仲南町十郷買田		
28	古墳	椿谷古墳	つばきだにこふん			
29	古墳	三堺山1号墳	みさかいやま1ごうふん	溝邊町五条三堺		
30	古墳	三堺山2号墳	みさかいやま2ごうふん	溝邊町五条三堺		
31	古墳	三堺山3号墳	みさかいやま3ごうふん	溝邊町五条三堺		
32	古墳	三堺山4号墳	みさかいやま4ごうふん	溝邊町五条三堺		
33	古墳	三堺山5号墳	みさかいやま5ごうふん	溝邊町五条三堺		

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

仲南町は、香川県中部（中讃地方）の西南部にあり、四国山地の北裾にあたる。買田遺跡は、高知県から香川県に抜ける国道32号線が、山間部を抜け平野部に入ったあたりに位置し、第2図にあるように、扇状地状に広がる丘陵北裾部、標高80m前後の緩斜面部に所在する。

地形は、北側に広がる三角形状で、眼前には金倉川が蛇行しながら東西に流れ、西側の丘陵にあたって北側に流れを変える。

生活域は、次節でも述べるが、古代と中世では異なると考えており、古代においてはこの金倉川の両岸に想定されるが、香川～高知のルート上に位置することを重視し、「道」にかかわる集落として発達したことも考えられる。

中世では、この緩斜面部での耕作も考えられ、緩斜面部の開墾がこの時期に本格化したことも想定される。

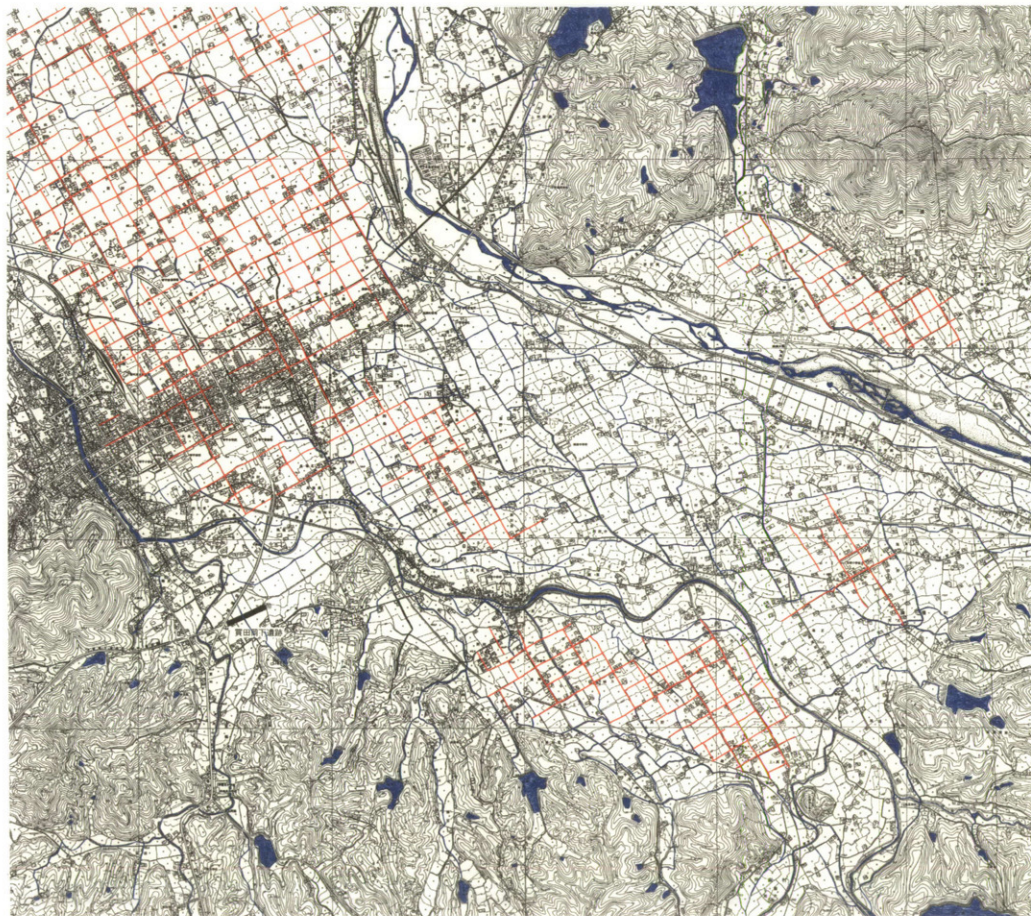
第2節 歴史的環境

この地域に所在する遺跡は、第2図・第2表や第3図にあるように、西及び南の丘陵上に古墳や中世山城が確認されているほか、北側や東側の平野部に古代寺院や条里区画、中世城館が確認されている。以下概報の記述を引用する。「背後の丘陵上には古墳時代中・後期の小古墳群の存在が知られるがその実態は詳らかではない。また白鳳期創建の弘安寺（廃寺）は金倉川を挟んで約1.3km北方に位置する。律令制下、那珂郡真野郷は金倉川湾曲部以南の南岸部分一帯に比定され、買田地区はその西部に位置するが、以東の地区とは標高120m前後の買田峠の丘陵によって隔てられており、鎌倉期には園城寺領買田庄が成立する。」

このように、古代においては真野郷の西部に位置し、条里区画が確認できないこと、郷の中心部ではなかったにもかかわらず、帯金具や緑釉が包含層からではあるが出土していること、この時期と考えられる瓦片が多数包含されていたことなどから、この時期の一般集落の範疇をやや超える内容を持つことから、買田岡下遺跡の古代集落の性格として、農村部の一般集落以上のものを考える必要があり、先にふれた香川～高知のルート上にあるという立地を最大限に評価すべきであると考えている。

また、中世に至って買田庄が成立することを受けて中世集落が成立したとも考えられ、性格の異なる二つの時期の集落が、全く別の意図で成立した可能性を考えておく。

こうした事柄については、今回の調査で古代・中世集落とも北端を検出したに過ぎず、集落の全体像が明らかになった時点でさらに検討を重ねる必要がある。



第3図 周辺の地形

第3章 調査の成果

第1節 調査区

調査は満濃バイパスの起点となる国道32号と同377号の分岐点付近から、延長約350m、面積8,000㎡を対象として実施した。調査地は南側の丘陵に沿って延び大局的には山裾緩斜面に展開するが、そこから派生する小丘陵・小開析谷数条を横断しており、微細地形をやや変化に富むものとしている。

調査は、西から東に向かってⅠ区～Ⅴ区、Ⅰ区北側の宅地部分をⅥ区として設定した。調査区割りは、水路・畦道等によって区分されている現状の水田を単位としてとらえている。調査段階では西端のⅥ区が宅地化していた以外はすべて水田となっていた。とくに東半部(Ⅲ区東部以東)は周囲の圃場整備が完了しており旧地形の観察が現状ではやや困難であった。(第1図参照)

調査区に沿って述べると、Ⅵ・Ⅰ区は安定した平坦地形が広がり、耕作土直下で遺構面が検出された。

Ⅱ区は小開析谷の出口部に当たり、Ⅰ区に比べ現地標高で約40cm低くなり、耕作土下には最大厚60cmあまりの遺物包含層が存在し、その下面が遺構面となる。Ⅲ区西部からⅣ区中央部にかけては南から派生する小支丘部にあたり最高部でⅠ区平坦面と約1mの比高を測る。水田造成時の削平及び近年の粘土採取によりこの部分の旧地形は大きく損なわれており、Ⅱ区に接した側斜面部分に若干の遺構が残存するのみである。調査区東端のⅤ区東部も北にのびる小支丘部にあたるが、大きく削平を受けた上に造成土が厚く堆積し旧地形からかなり変容している。この二筋の小支丘間、すなわちⅣ区東部からⅤ区西部は現地形でも明白な谷状の狭い低地をなしておりこの部分で小開析谷2条を検出している。

第2節 基本層序

基本層序については、第4・5図の土層図と前述したように、地形の改変等によりⅡ区には厚い包含層が検出されているが、他の地区では僅かに包含層が残るのみであった。以下、地区別で簡単に述べる。

Ⅵ・Ⅰ区は、耕作土直下で遺構面を検出した。

Ⅱ区は、耕作土の下に最大厚60cmあまりの遺物包含層が存在し、その下面が遺構面である。

Ⅱ区西・東部を中心に包含層や遺構面上においてサヌカイト剥片を採取し、その風化度合いから旧石器時代資料を含むと推定された。そのため平安時代以降の遺構の調査が完了した後に、その包蔵状況を確認するために遺構面以下の調査を実施した。調査は、Ⅱ区東・西部に2mメッシュを設定して水平・垂直分布を確認しつつ掘り下げを行った。

この部分の遺構面(地山層表層)は主に淡黄色～黄灰色のシルト質土からなり、下位に

堅固な黄褐色粘土層が認められる。Ⅱ区西部から東部にかけて下部の黄褐色粘土層が帯状に落ち込む部分、すなわち小規模な埋積谷を検出した。遺構面下0.2mで検出し、かなり蛇行しつつ南西から北東に抜ける。最大幅15m程度、深さ1mを測り、上層に黄灰色細砂層、下層に黄褐色粗砂層が堆積する。また局部的に最下層に植物遺体を含む黒色シルト層を見る。

縄文時代晩期の土器片若干と石鏃・スクレイパー等が出土した。形態から晩期以前にさかのぼりうる石鏃やきわめて風化の進んだサヌカイト片もわずかながら含まれるが、明確に旧石器時代に位置付け得る資料はない。遺物量は少なく、その多くは埋積谷中に混入したものである。他ではサヌカイト細片等が地山表層に散漫に包含される程度で顕著な集積地点はない。また埋積谷植物遺体包含層から少量の堅果類を採取した。

前述のようにⅡ区全体が浅い谷状地形にあり上述の建物など平安期遺構面の上位には20～60cmの厚さで暗灰色シルト系の堆積層がある。同層はミクロに見れば4～5枚に区分し得る薄い水平堆積層の連続とみなし得る。最下部、すなわち地山層上面が攪拌したように乱れている。9～10世紀を中心に12世紀までの遺物を包含するが層的に区分することは困難である。最下部まで12世紀代に下る資料が混入する。

また本層の下面で削り出し整形の畦畔状高まりを検出した。これと堆積状況などから本層は復次に及ぶ水田耕作土層の可能性がある。平安期の建物群廃絶後、おそらく12世紀以降に耕地化し、造成と耕作の繰り返しによって遺構の一部を削平し、耕地化以前の遺物を多量に混入させたものとする。したがって本層中に包含される遺物の大半は下部の建物群に関連する資料とみてよいであろう。

Ⅲ区西部からⅣ区中央部にかけては、水田造成時の削平、近年の粘土採取によりⅡ区に接した側斜面部分で若干の遺構が検出された。

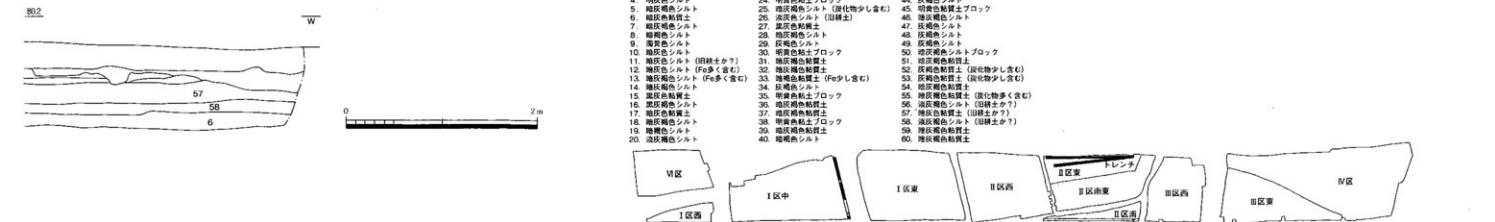
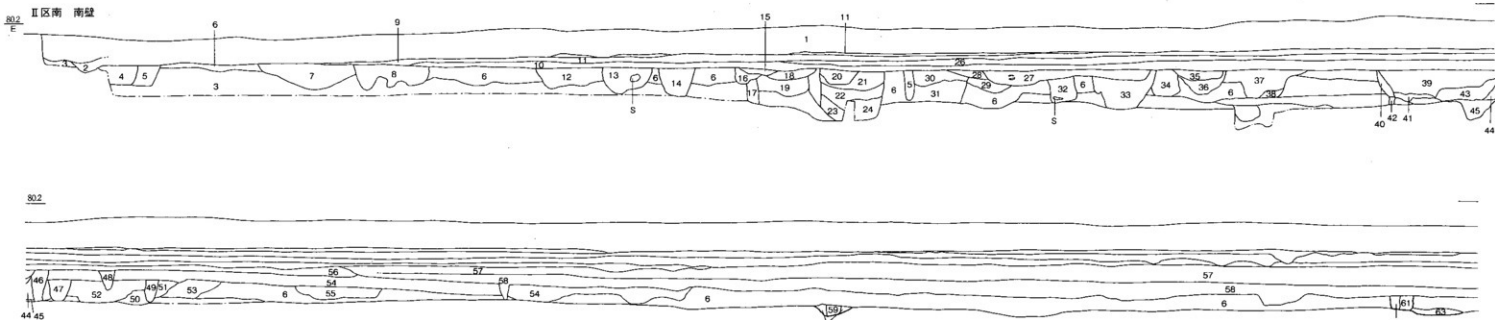
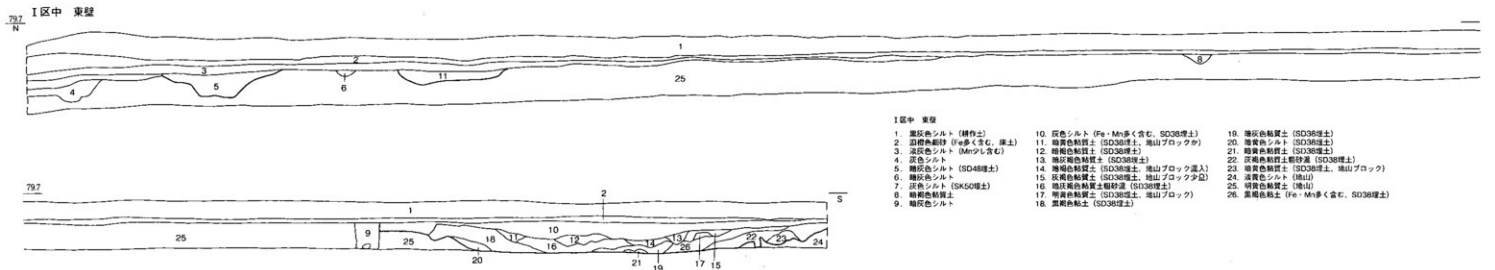
Ⅳ区東部からⅤ区西部は、明白な谷状の狭い低地である。

第3節 遺構・遺物

今回の調査では縄文時代・弥生時代末～古墳時代前期・同中期・平安時代・室町時代前半・江戸時代の資料を得た。このうち縄文時代・古墳時代中期は若干の遺物が出土したのみで、周辺にこの期の遺跡が展開する可能性を指摘できるととまる。

Ⅱ区西・南で平安時代前半期の建物群、Ⅰ区西で同時期の小溝群を確認した。建物群はⅠ区から緩やかに下がった谷出口部の低地から東側丘陵側斜面にかけて展開する。西辺から北辺は小溝によって限られ、東辺はⅢ区西部の小支丘西側面の小溝に区切られる。東西幅52mを測り、南北方向は10m検出している。本建物群の中心部分は南側用地外に位置し、今次調査ではその北辺部分を確認したことになる。Ⅲ・Ⅳ区の開折谷堆積土中にこの期の遺物少量を包含する。Ⅰ区西の小溝群はほぼ2m間隔で並行する浅い南北溝群で、畝状遺構の一部と思われる。

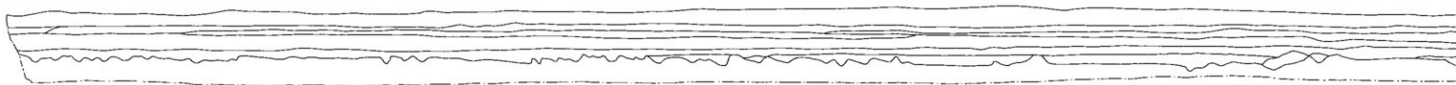
Ⅵ区はⅠ区西部の北隣の宅地跡で、地形的にはⅠ区中・西に続く平坦地である。室町時代前半の溝、江戸時代の建物など二時期にわたる遺構を検出した。



第4図 I区中東壁・II区南南壁土層図(1/40)及び調査区内土層位置図

79.6
W

II区東 北壁

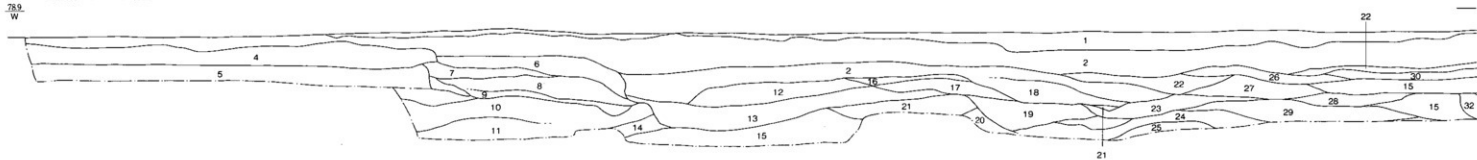


79.6

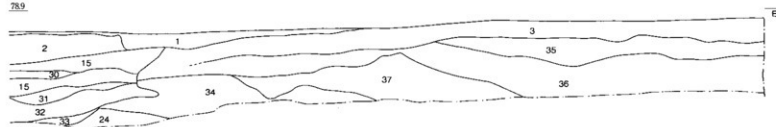


78.9
W

II区東 トレンチ北壁



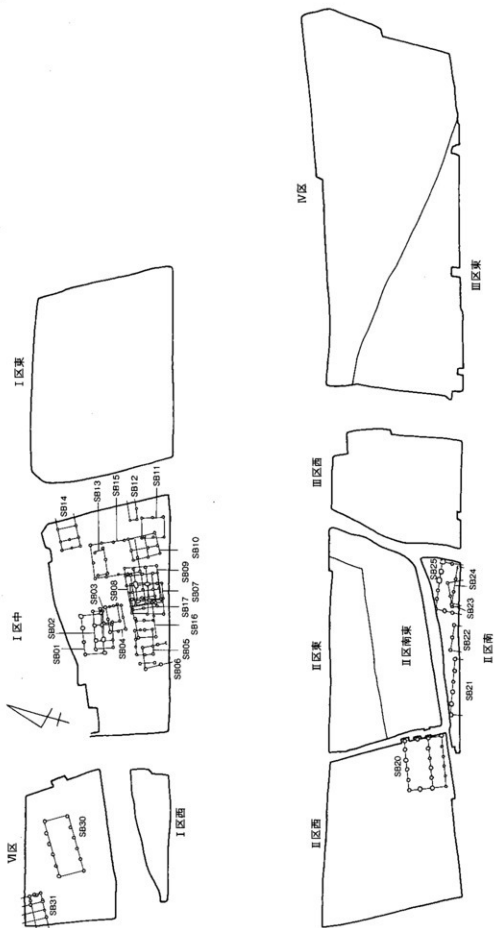
78.9



- | | | | | | |
|-------------------|-----------|------------|------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 深灰色シルト | 8. 黄褐色細砂層 | 15. 淡灰色細砂層 | 22. 淡灰色シルト | 29. 黒灰色シルト | 36. 黄褐色粘土 (Fe・Mn多く含む) |
| 2. 淡灰色シルト | 9. 黄褐色細砂 | 16. 黄灰色中砂 | 23. 黄灰色細砂 | 30. 灰白色中砂 | 37. 明黄色粘土・灰黄色粘土 |
| 3. 淡黄色粘土 (Mn少し含む) | 10. 淡灰色中砂 | 17. 黄褐色細砂層 | 24. 黄褐色中砂 | 31. 灰白色層 | |
| 4. 黄褐色粘土 | 11. 淡黄色細砂 | 18. 黄褐色細砂 | 25. 黄灰色中砂 | 32. 灰色細砂 | |
| 5. 黄褐色粘土 | 12. 黄褐色中砂 | 19. 黄褐色細砂層 | 26. 灰白色中砂 | 33. 灰シルト | |
| 6. 黄褐色粘土 (Fe多く含む) | 13. 黄褐色砂 | 20. 淡灰色細砂層 | 27. 灰白色中砂 | 34. 褐色細砂 | |
| 7. 淡黄褐色粘土 | 14. 黄褐色細砂 | 21. 淡灰色シルト | 28. 淡灰色細砂層 | 35. 黄褐色粘土 (Fe・Mn多く含む) | |



第5図 II区東 北壁・II区東 トレンチ北壁土層図 (1/40)



第 6 图 掘立柱建物配置图

第3表 掘立柱建物一覧表

名 称	規			模			方 向			
	梁間(間)	×	桁行(間)	梁間(m)	×	桁行(m)	面積(m ²)			
SB01	1		3	3.4		6.8	23.12	N	85	E
SB02	2		2	3.2		4.0	16.25	N	87	E
	1		1	2.3		1.5				
SB03	1		2	2.8		2.8	7.84	N	11	W
SB04	2		2	2.7		4.4	11.88	N	81	E
SB05	2		3	3.0		4.2	12.6	N	87	E
SB06	1		2	3.6		4.2	15.12	N	11	W
SB07	2		2	5.2		5.6	29.12	N	0	E
SB08	2		4	5.2		5.4	28.08	N	8	W
SB09	2		2	3.8		5.8	22.04	N	5	W
SB10	2		2	3.7		4.7	17.39	N	13	W
SB11	1		2	3.4		3.9	13.26	N	0	E
SB12	1		1以上	1.8		(2.1)	(3.78)	N	67	E
SB13	1以上		2	(2.0)		4.5	(9.0)	N	77	E
SB14	2		2	3.2		3.6	11.52	N	11	W
SB15	2		4	5.6		7.4	41.44	N	10	W
SB16	1		2	3.3		5.7	18.81	N	85	E
SB17	1		2	2.0		4.1	8.2	N	7	W
SB20	2		5	6.4		8.4	53.76	N	68	E
SB21	1以上		5	(1.4)		9.7	(13.58)	N	55	E
SB22	1以上		2	(1.0)		4.3	(4.3)	N	80	E
SB23	1以上		2	(0.8)		4.2	(3.36)	N	60	E
SB24	2		3	2.2		6.7	14.74	N	90	E
SB25	2以上		5	(3.7)		8.2	(30.34)	N	90	E
SB30	1		5	4.5		9.8	44.1	N	55	E
SB31	1以上		3以上	3.4		4.9	16.66	N	59	E

室町時代前半の遺構はI区中に集中している。

本遺跡は、出土している遺物から主として古代、中世の複合遺跡であることが分かる。年代を確定させることのできる出土遺物を持たない遺構も多々あることから、ここでは遺構の種別にそって記述し、時代ごとの概要については第4章でまとめた。

なお、土器の年代観は主として下記の書を参考にした。

須恵器 佐藤竜馬 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」 『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』 1993 関西大学

土師器ほか 片桐孝浩 「古代から中世にかけての土器様相」 『中小河川大東川改修工事(津ノ郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』 1992 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』 2000 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第6図に示したように、Ⅰ区中央、Ⅱ区西・南、Ⅵ区で検出され、それぞれの調査区で検出された掘立柱建物跡には時間的なまとまりがある。必ずしも遺物を伴う掘立柱建物跡ばかりではなく、検出状況などを考慮すればⅠ区中央は中世、Ⅱ区西・南は古代、Ⅵ区は近世と大きく区分することが可能である。これは、南から延びる丘陵及び小開折谷の開発状況を反映するものと考えられるが、後世の土地改変（削平）もあり明確な答えを導き出せなかった。

SB01 (第7図)

SB01はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(3.4m)×桁行3間(6.8m)、面積23.12㎡で主軸方位はN-85°-Eを測る。なお、Pit 3-9間、Pit 5-8間にはやや南辺に近い位置ではあるが対応する柱穴が検出されている。また、Pit 1-3、Pit 2-9の対角線の交点にも柱穴が認められる。これらの柱穴が本建物跡と関連性があるかどうかは即断できないが、掘立柱建物跡内の間取りを考える上で参考になる資料であるかも知れない。

柱穴の掘り方平面は径0.4~0.8mの円形、断面は深さ0.3~0.7mを測る逆台形もしくは二段掘りで船底状である。このような断面形状は、埋土が1層であることも考え合わせると、柱材を抜き取る際に柱材周辺を掘り込んだか、柱材を前後左右に揺さぶったことにより形成された柱穴形状と考えている

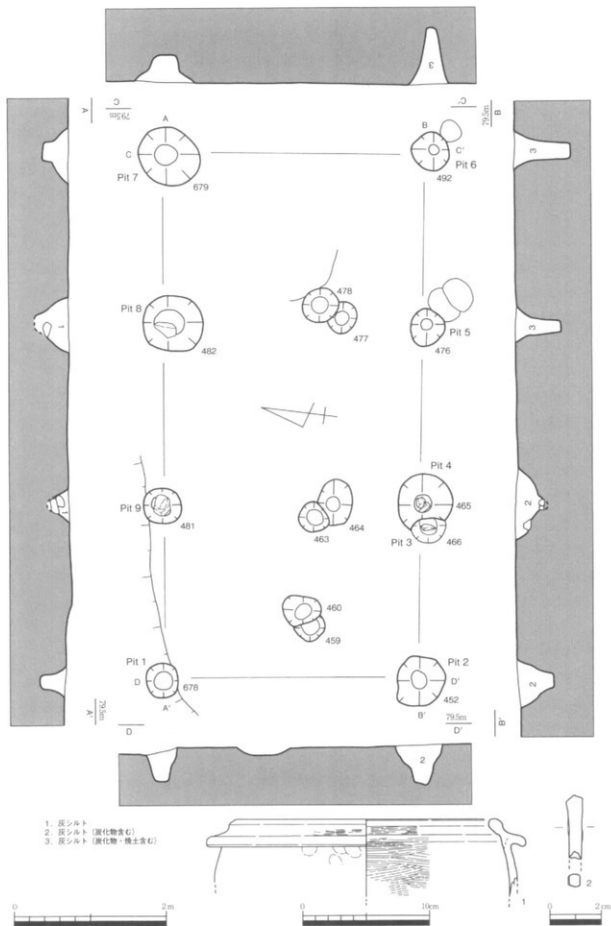
Pit 3・4・8・9には根石もしくは詰石と考えられる川原石が出土している。

遺物はPit 8から出土したもので、1は土師質羽釜、2は鉄釘の断片と考えられる。1は、鍔がやや下方に垂れ下がり、口縁部も内湾して丸く肥厚して終わる。外面はナデ調整、内面はハケ調整が顕著である。脚の有無については不明である。2は、断面形状が四角で先端部が欠損しているが、釘の可能性が高い。1の土師の時期は、その形態から片桐Ⅲ-①~⑦に比定され、14世紀~16世紀前半に位置付けられる。

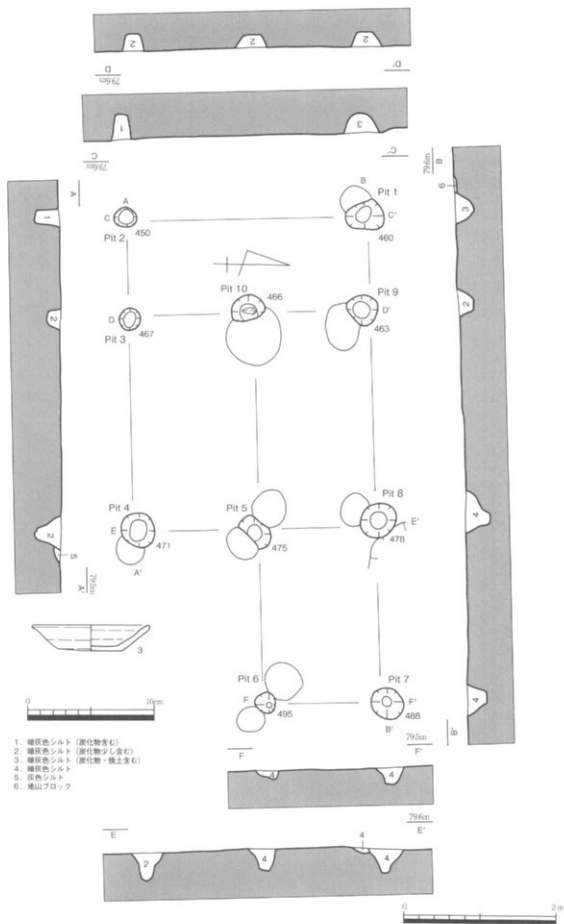
SB02 (第8図)

SB02はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間西側で1間、東側で2間(3.2m)×桁行2間(4.0m)であるが、北東部分に1間幅(2.3m×1.5m)の張り出しが見られる。東南隅に1柱穴あれば1or2間×3間になるが、検出されていない。張り出しを含めた面積は16.25㎡で主軸方位はN-87°-Eを測る。なお、Pit 5と10に注目すれば、1間×2間の南北棟の西側と東側に張り出しのある建物とも考えられる。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

Pit 7から3の土師器小皿が出土している。底面はナデ調整で、外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つことから、佐藤2000 II-4~5に比定され、13世紀第3四半期~14世紀前半に位置付けられる。



第7図 SB01平・断面図、出土遺物実測図



第8図 SB02平・断面図、出土遺物実測図

SB03 (第9図)

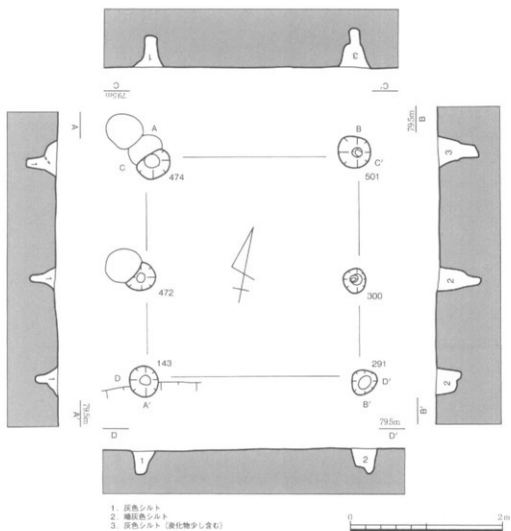
SB03はI区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(2.8m)×桁行2間(2.8m)の小形建物跡で、面積7.84㎡、主軸方位はN-11°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

この掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していない。

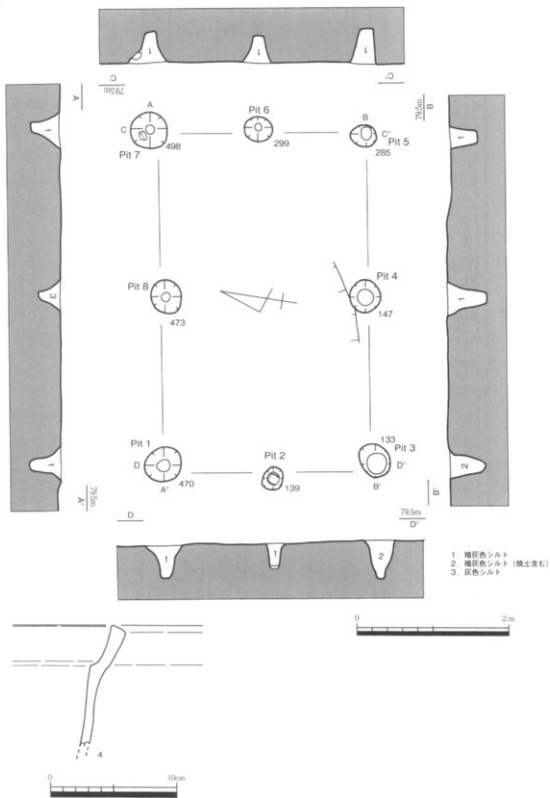
SB04 (第10図)

SB04はI区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(2.7m)×桁行2間(4.4m)で、面積11.88㎡、主軸方位はN-81°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

Pit 6から4の土師質土鍋口縁部片が出土している。外面は摩滅しており観察不能、内面はナデ調整である。やや直立気味の体部に内湾する口縁部を持つ。



第9図 SB03平・断面図



第10図 SB04平・断面図、出土遺物実測図

SB05 (第11図)

SB05はI区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.0m)×桁行3間(4.2m)で、面積12.6㎡、主軸方位はN-87°-Eを測る。ただし、南辺は2間幅しか確認できていない。柱穴の掘り方平面は径約0.2~0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

また、東西に庇もしくはSB05に並行する櫓列と考えられる柱穴が確認されている。庇と考えるにはSB05の東西辺から1.5~1.6mの距離は長すぎると考えており、柱の軸線からは若干はずれるものの建物の一部と考えても良い事例かもしれない。櫓列と考えた場合、列長が短すぎることもあるが、ここでは櫓列として取り扱う。

SA01は、SB05の西側にあり、Pit間は2.7mである。

SA02は、SB05に東側にあり、2間幅でPit間は3.2mである。

遺物は、SB05Pit2から5の土師器小皿、SA02Pit2から6の土師質土釜の脚部が出土している。5は、ヘラ切りの底部から外反気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000 II-3~5に比定され、13世紀第2四半期~14世紀前半に位置付けられる。

SB06 (第12図)

SB06はI区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(3.6m)×現状で桁行2間(4.2m)の建物跡で、現状での面積は15.12㎡、主軸方位はN-11°-Wを測る。南辺が調査区外に伸びているが、Pit3が南東隅の可能性もある。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

この掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していない。

SB07 (第13図)

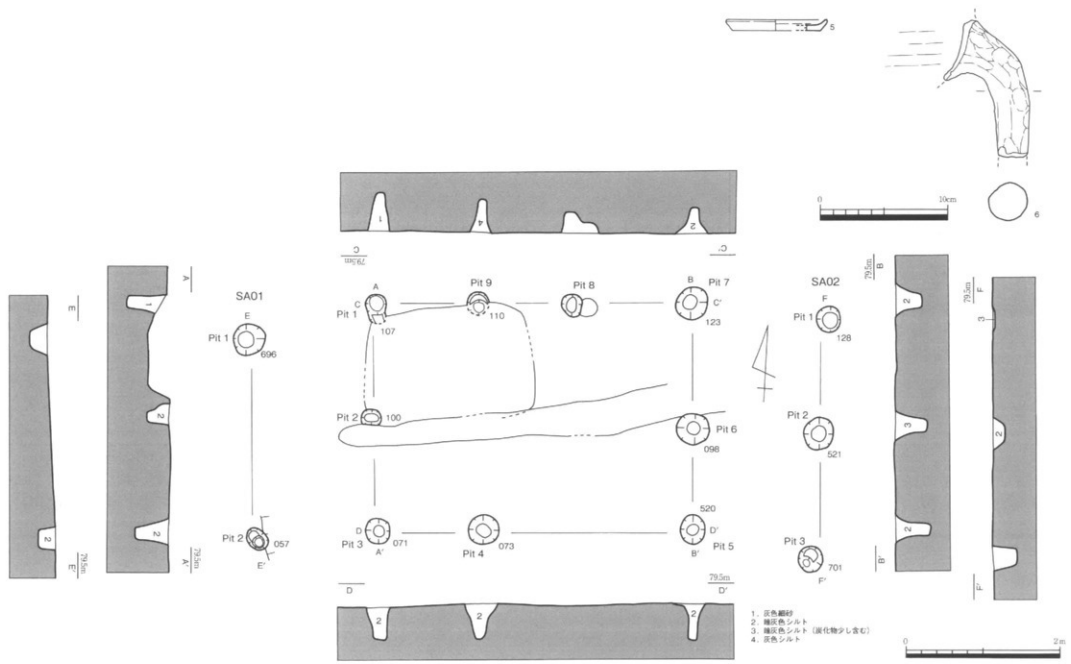
SB07はI区中央で検出された東西棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間(5.2m)×桁行2間(5.6m)で、面積29.12㎡、主軸方位はN-0°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2~0.8mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形である。断面形状は、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化は見られず、単純な柱の抜き取りを想定している。

なお、各Pitの形状や規模にバラツキが多く見られ、断面形もまちまちであることから、総柱掘立柱建物跡の可能性に疑問を残している。

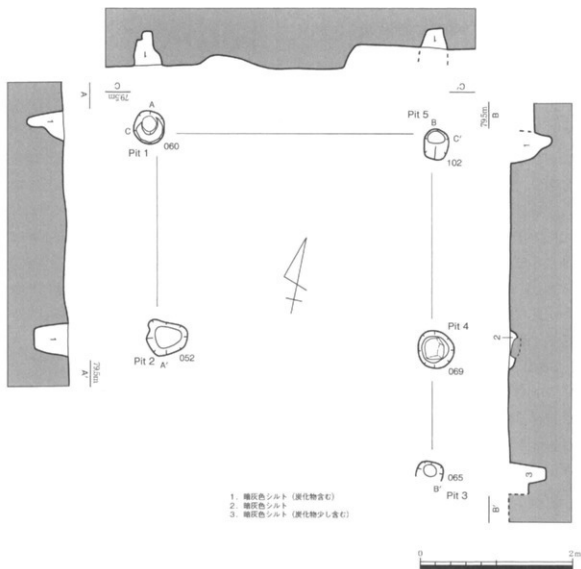
Pit3から7の土師器小皿が出土している。7は、ヘラ切りの底部から外反気味に薄く短く立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデ調整である。佐藤2000 II-3~5に比定され、13世紀第2四半期~14世紀前半に位置付けられる。

SB08 (第14図)

SB08はI区中央で検出された南北棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間(5.2m)×桁行4間(5.4m)で、面積28.08㎡、主軸方位はN-8°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2~0.5mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆三角形である。断面形状



第11図 SB05平・断面図、出土遺物実測図及びSA01・02平・断面図



第12図 SB06平・断面図

は、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とも考えられる。

なお、Pit 1-2、10-11並びに Pit 4-5、7-8は間隔が狭く、Pit 2-4、8-10で構成される2間×2間の建物の附属施設か間仕切りの可能性もあるが、総柱建物である点を考慮して一体のものと考えた。

Pit 内から8の東播系こね鉢 (Pit 9) 及び9・10 (Pit 3)、11・12 (Pit 14) の鉄釘が出土している。8は、底部が欠損しているが外上方に直線的に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部を内上方に拡張して平坦面を作っている。口縁端部の一部を外側に折り曲げた単純な注ぎ口が見られる。外面には指頭圧痕が顕著に認められ、内面はナデ調整が施されている。片桐Ⅲ-①～③ 14世紀に位置付けられる。

9～12はX線写真の観察の結果、断面が6mm程度の四角の鉄釘と考えられるが、錆と土に覆われており明確ではない。9は頭部が少し扁平に変形し、先端部が細くやや曲がって

いる。10は上下逆の可能性もあるが先端ではなく頭部の変形と考えられた。11は9同様の形態である。12も頭部に変形が見られる。

SB09 (第15図)

SB09はI区中央で検出された東西棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間(3.8m)×桁行2間(5.8m)、面積22.04㎡であるが、北東部分に1間幅の張り出し(1.5m×3.0m)が見られる。この張り出し部分を含めた面積は26.54㎡で主軸方位はN-5°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.8mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としない。

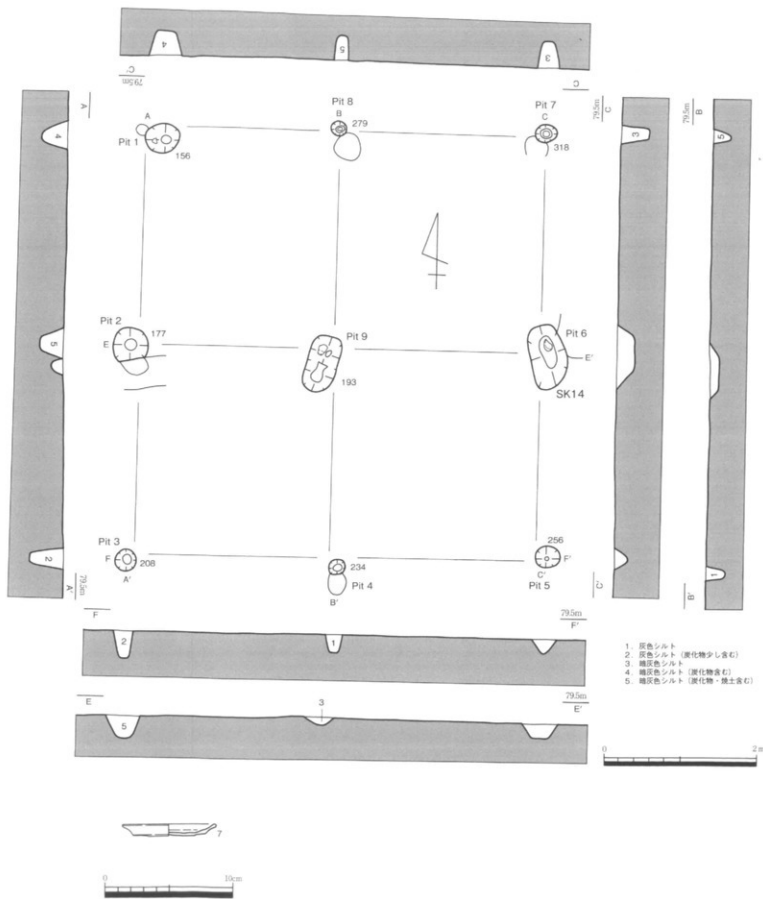
Pit内から13(Pit 5)の土師質羽釜、14(Pit 7)の鉄製刀子、15(Pit 8)の鉄釘の先端部と考えられる資料が出土した。土師質羽釜は、体部中央から内湾気味に伸び、口縁端部は丸く終わる。鈎はやや下方に下がっている。外面は指頭圧痕が顕著で、内面にはハケ調整が見られる。片桐Ⅲ-①~⑦に比定され、14世紀~16世紀前半に位置付けられる。刀子は、激しい錆化のため、形態は明確ではない。15は断面四角で先端が尖っている。

SB10 (第16・17図)

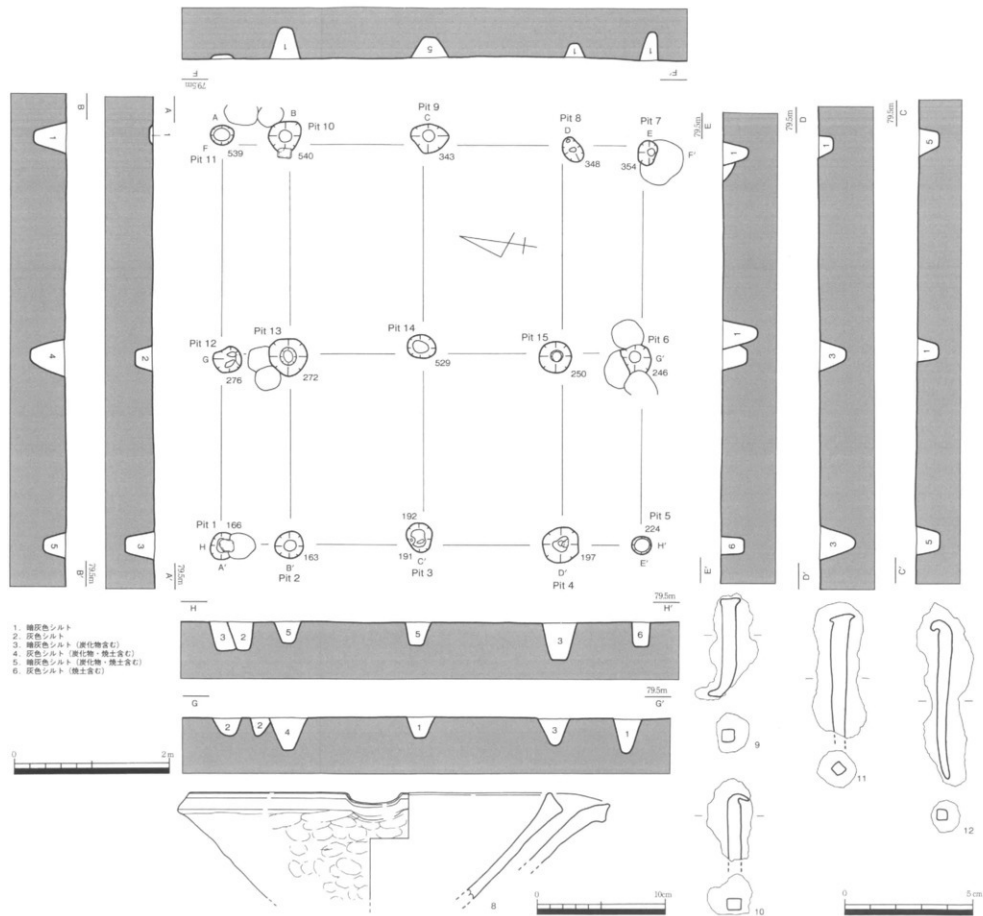
SB10はI区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。現状では梁間2間(3.7m)×桁行2間(4.7m)であるが、軸線からははずれているPit 9をこの掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えた場合は総柱掘立柱建物跡になる。面積は17.39㎡で主軸方位はN-13°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.4mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としない。

Pit内から16の砥石のほか、17・18の土師器杯、19・20の土師質土鍋や21の土師質脚付き羽釜が出土している。16の砥石がPit 1から出土したほかは、Pit 6からの一括出土である。16は、薄い長方形で、表面と両側の長側面に砥石特有の作業面が認められる。17はナデ調整の底面から外上方に内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3~4で13世紀第2~4四半期。18は、17に比べてやや直線的な口縁部を持っている。底面はヘラ切りで、板目を残す。佐藤2000Ⅱ-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。19・20とも微妙な差異はあるが、概ね口縁部の内側に段があり、口縁部はやや内湾気味に外上方に伸びている。口縁端部は平坦に仕上げている。片桐Ⅲ-⑦~⑨で16世紀。21は胴部最大径部から直線的に内傾して上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。鈎は水平に短く伸びる。外面胴部上半は指頭圧痕、下半は格子叩きが顕著である。内面は上半がナデ、下半がハケ調整である。片桐Ⅲ-③で14世紀後半(遡る可能性もある)。以上17~21の特徴からは14世紀もしくは16世紀となるが、他の掘立柱建物跡が概ね14世紀に位置付けられることから、ここでは、19・20タイプの土鍋の年代が遡るのではないかという可能性を指摘しておく。

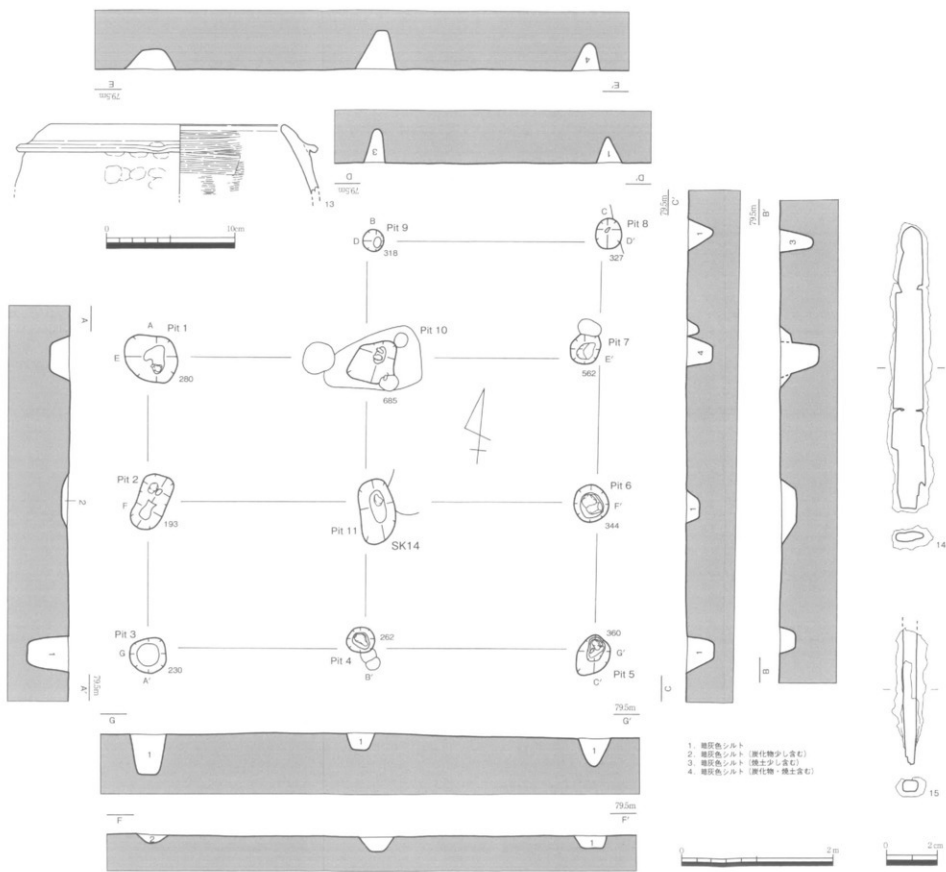
なお、佐藤竜馬「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十八冊 国分寺楠井遺跡』1995 香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財



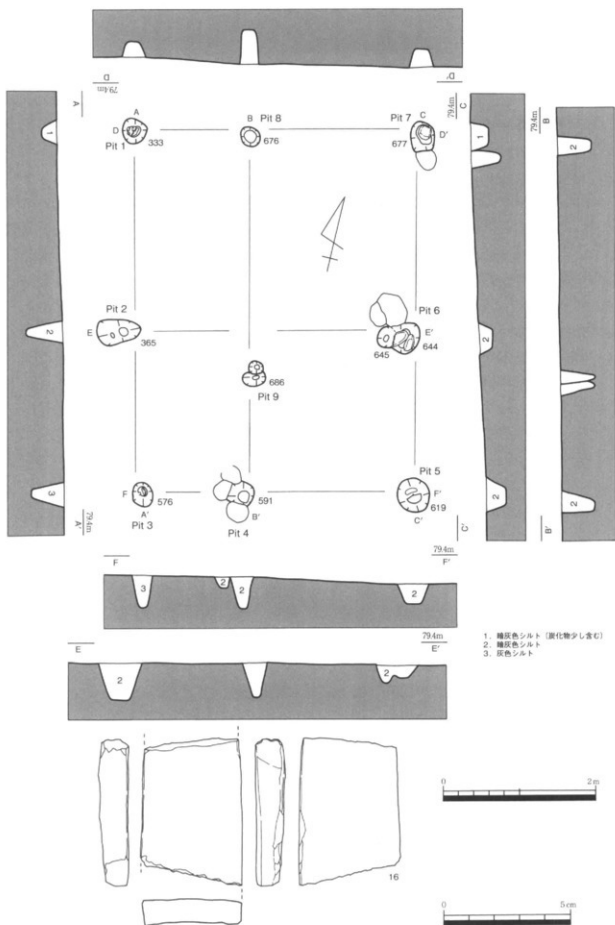
第13図 SBO7平・断面図、出土遺物実測図



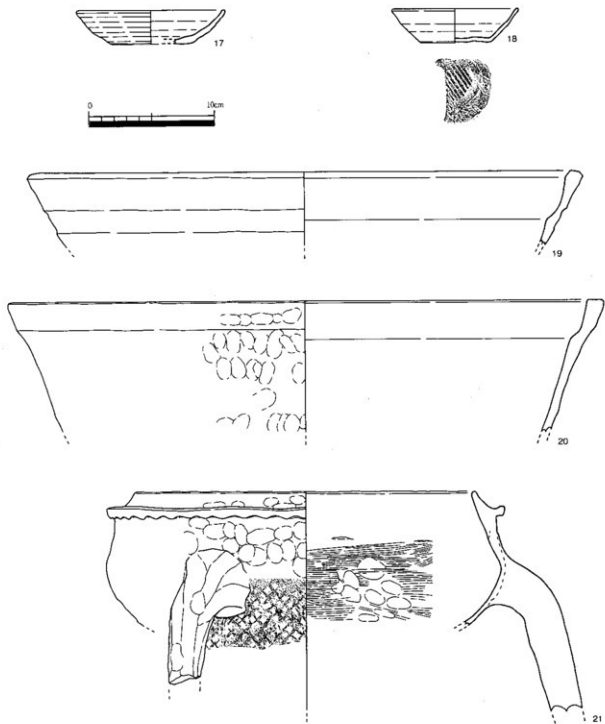
第14図 SB08平・断面図、出土遺物実測図



第15図 SB09平・断面図、出土遺物実測図



第16図 SB10平・断面図、出土遺物実測図



第17图 SB10出土遺物実測図

調査センター、日本道路公団では、このタイプの土鍋の出現期がⅡ期（14世紀前葉～15世紀前葉）とされており、楠井産の土器に限らず、同タイプの土鍋が同様の変化を遂げると考えた場合には、年代的な矛盾はない。これも今後の課題である。

SB11（第18図）

SB11はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.4m）×桁行2間（3.9m）で、面積は13.26㎡、主軸方位はN-0°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としなない。

Pit内から22（Pit5）のスクレイパー、23（Pit1）の銅銭の破片が出土している。前者は剥片の縁辺に片面のみ刃部加工している。この資料については、周辺の状況から混入資料と判断している。後者は約1/2の破片であり、「●元□●」と判読できるが、銭種を確定することはできなかった。中世段階に大量に流通した中国銭と考えられる。

SB12（第19図）

SB12はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。東側が調査区外に伸びると考えており、現状では梁間1間（1.8m）×桁行1間（2.1m）以上で、面積は3.78㎡以上、主軸方位はN-67°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3m前後の円形、断面は逆台形である。

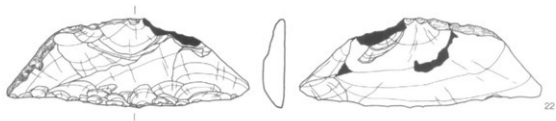
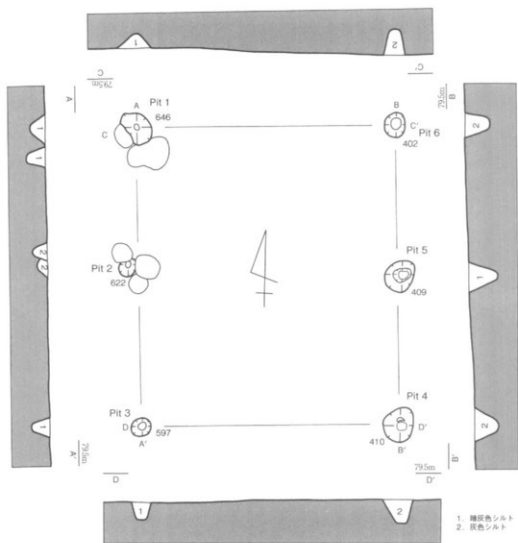
Pit内から遺物は出土していない。

SB13（第20図）

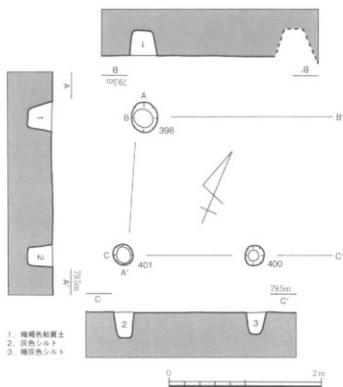
SB13はⅠ区中央で検出された東西棟と考えられる掘立柱建物跡である。梁間1間（2.0m）以上×桁行2間（4.5m）で、面積は9.0㎡以上、主軸方位はN-77°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.4～0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。

Pit3・4には根石もしくは詰石が見られる。

遺物は、24・25の土師器杯、26の土師器小皿、27の土師質羽釜が、いずれもPit1から出土している。また、64の土師質土鍋がPit4から出土している。24は、ヘラ切り底部からはほぼ直線的に外上方に立ち上がる口縁部を有し、内外面とも回転ナデが施されている。底部には板目？の痕跡も若干認められる。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。25は底径が24に比べて小さく内湾気味の口縁部を持つ。底部はヘラ切りである。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。26はヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を有し、体部と底部の境は明瞭である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。27は、体部上半のみの出土で、最大径部から内湾気味に伸び、口縁端部はやや厚く、丸みを持って終わる。鐏は外下方に垂れ下がりが形骸化する段階と考えられる。内外面ともハケ調整が施される。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。64は、逆「ハ」の字形に外反気味で外上方に伸び、口縁内側に段を持つ。また、口縁端部は平坦面が形成されている。外面は指頭圧痕や板ナデの痕跡が顕著で、内面は口縁部内側にのみ



第18図 SB11平・断面図、出土遺物実測図



第19図 SB12平・断面図

ハケ調整が施されている。片桐Ⅲ-⑦-⑨で16世紀。これは、先の19・20同様のことで、いずれも Pit からの一括であることを考え、14世紀前半頃に位置付けておく。

SB14 (第21図)

SB14はI区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.2m)×桁行2間(3.6m)で、面積は11.52㎡、主軸方位はN-11°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。

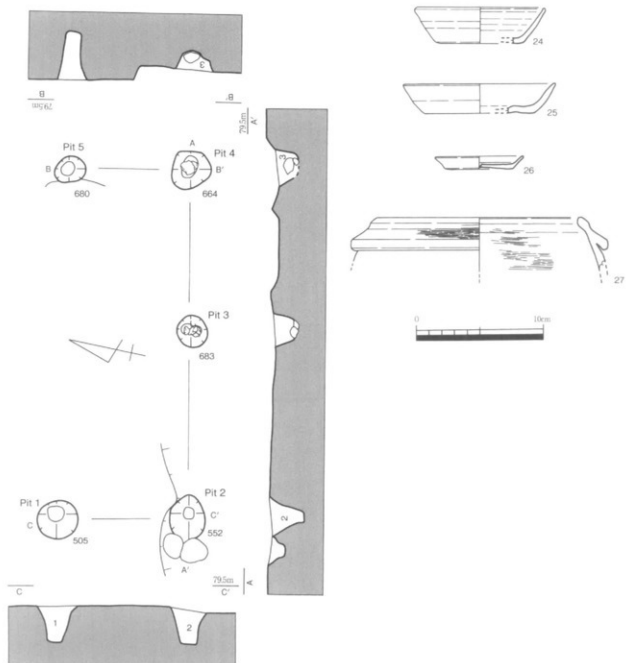
平面は、東辺が1間であることや Pit 8の存在から、やや不定形な掘立柱建物跡になっている。

Pit 内から遺物は出土していない。

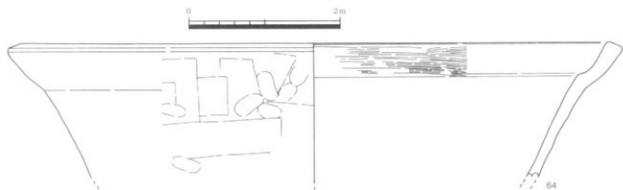
SB15 (第22図)

SB15はI区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(5.6m)×桁行4間(7.4m)で、面積は41.44㎡、主軸方位はN-10°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2~0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。この場合、Pit 7は除外している。Pit 7としている遺構は、径約1mの土坑で、他の柱穴との比較から見れば、この掘立柱建物跡を構成する Pit を壊して後世に作られた土坑と考えられる。

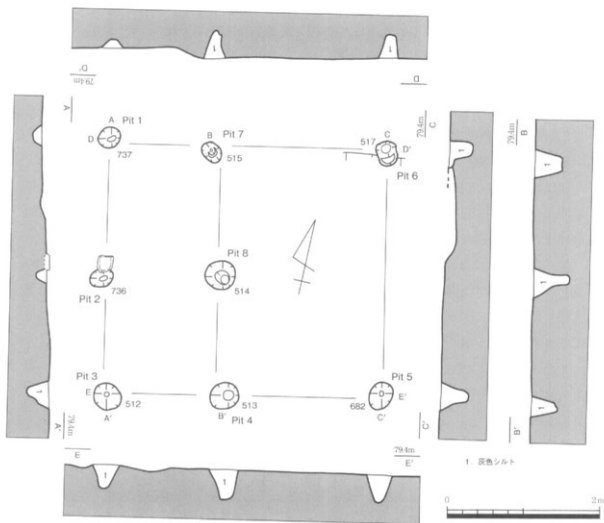
Pit 9から28の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや内湾気味に外上



1. 灰色シルト (炭化物・焼土含む)
2. 暗灰色シルト (炭化物・焼土含む)
3. 暗灰色シルト



第20図 SB13平・断面図、出土遺物実測図



第21図 SB14平・断面図

方に立ち上がる口縁部を持つ。

1点ではあるが、土器の特徴から佐藤2000 II-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半に位置付けられる。

SB16 (第23図)

SB16はI区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(3.3m)×桁行2間(5.7m)で、面積は1881㎡、主軸方位はN-85°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.4mの円形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とは考えられない。また、梁間、桁行ともやや間隔が広い為、軸線上にのらない柱穴も利用されていた可能性は否定できない。

Pit 5から29の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや内湾気味に外上方に伸び、端部が肥厚する口縁部を持つ。

1点ではあるが、土器の特徴から佐藤2000 II-3~5で13世紀に位置付けられる。

SB17 (第24図)

SB17はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(2.0m)×桁行2間(4.1m)で、面積は8.2㎡、主軸方位はN-7°-Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2~0.3mの円形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とは考えられない。

Pit内から遺物は出土していない。

SB20 (第25図)

SB20はⅡ区西で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(6.4m)×桁行5間(8.4m)で、面積53.76㎡、主軸方位はN-68°-Eを測る大型建物である。柱穴掘り方平面は径約0.4~0.7mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

柱穴埋土断面には、部分的に柱痕と思われる土層が認められること、柱の抜き取り穴が見られず、断面の土層にも乱れが認められないことから、SB01同様の柱の抜き取りは考え難く、地表面での切断の可能性が高い。柱の固定は、柱周辺の土を版築状に固めることでなされている。柱の径は柱痕と思われる土層の幅から見て約0.2m前後と推定される。

また、南辺の柱穴に対応して0.3~0.4mの柱穴列が検出されている。これは、本体の柱穴と比べて規模が小さくなること、本体南辺の柱穴と対応関係が明確であることから庇と判断している。

遺物は、Pit 2から30の須臾器杯蓋のつまみ、Pit 19から31の土師質土鍋口縁部片が出土している。佐藤1993Ⅰ-1~Ⅱ-5で7世紀中頃~9世紀中頃。31は半球状の体部から屈曲して外上方に短く直線的に伸び、端部を平坦に終わる。内面調整はハケ調整である。時期不明。

1点ではあるが、30の特徴や後述する同グループの掘立柱建物跡の年代から9世紀中頃に位置付けられる。ただし、31がこの時期まで遡るかどうかについては、疑問が残る。

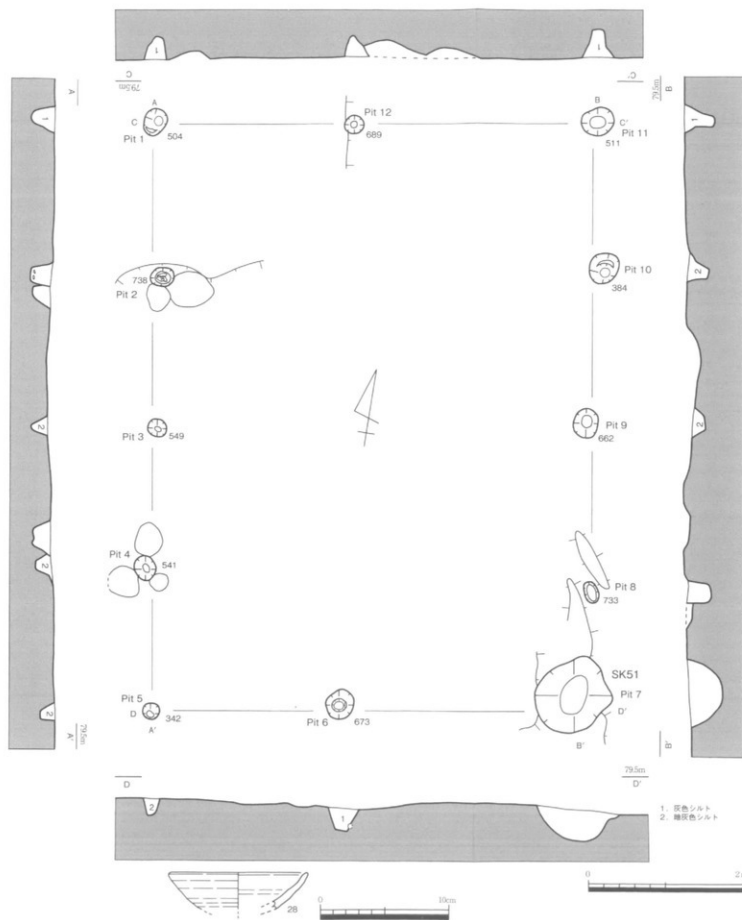
SB21 (第26図)

SB21はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(1.4m)以上×桁行5間(9.7m)以上で、現状での面積13.58㎡以上、主軸方位はN-55°-Eを測る大型建物と考えられるが、掘立柱建物跡の北辺のみの検出で、大半が調査区外に伸びるため正確な規模は不明である。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.5~0.7mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

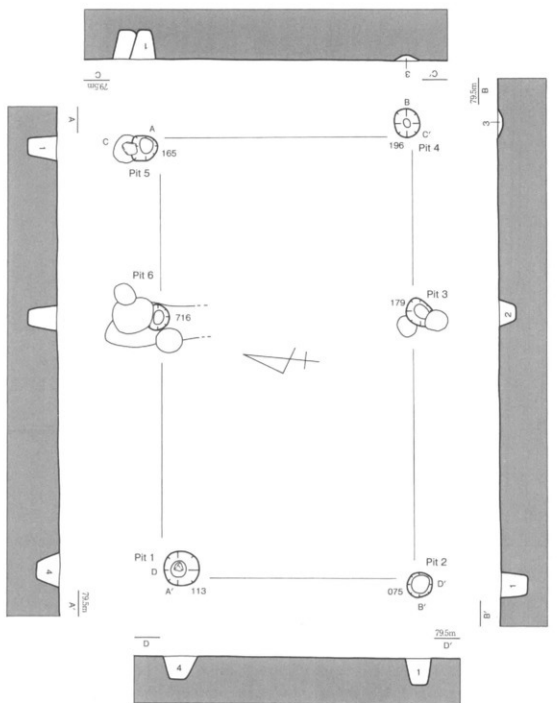
柱材についてはSB20同様、検出された断面の一部に柱痕が認められること、柱の抜き取り穴が見られず、断面の土層にも乱れがないことから、SB01同様の柱の抜き取りは考え難く、地表面で切断された可能性が高い。柱の固定は、柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit 6から32の須臾器皿が出土している。底部は残存部から見ると回転ヘラ切りで、体部はやや外反気味に外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。

1点ではあるが、土器の特徴から佐藤1993Ⅱ-5に比定され、9世紀中頃に位置付けられる。



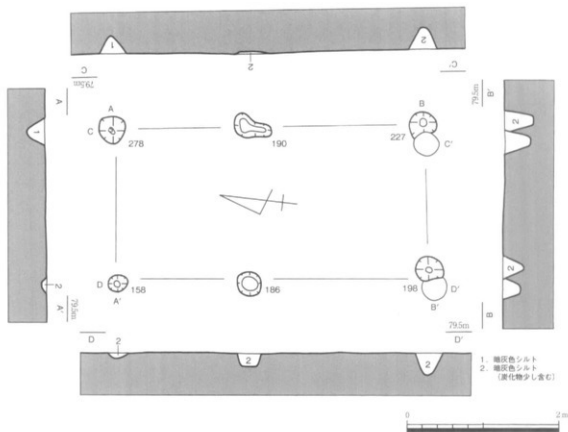
第22図 SB15平・断面図、出土遺物実測図



1. 灰色シルト
2. 灰色シルト (黄土少し含む)
3. 暗灰色シルト (炭化雑草含む)
4. 暗灰色シルト (炭化物・黄土含む)



第23図 SB16平・断面図、出土遺物実測図



第24図 SB17平・断面図

SB22 (第27図)

SB22はⅡ区南で検出された掘立柱建物跡である。梁間1間(1.0m)以上×桁行2間(4.3m)で、現状での面積4.3㎡以上、主軸方位はN-80°-Eを測る。大半が調査区外に伸びるため、現状では東西棟と考えているが、南北棟の可能性もある。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.4m前後の円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

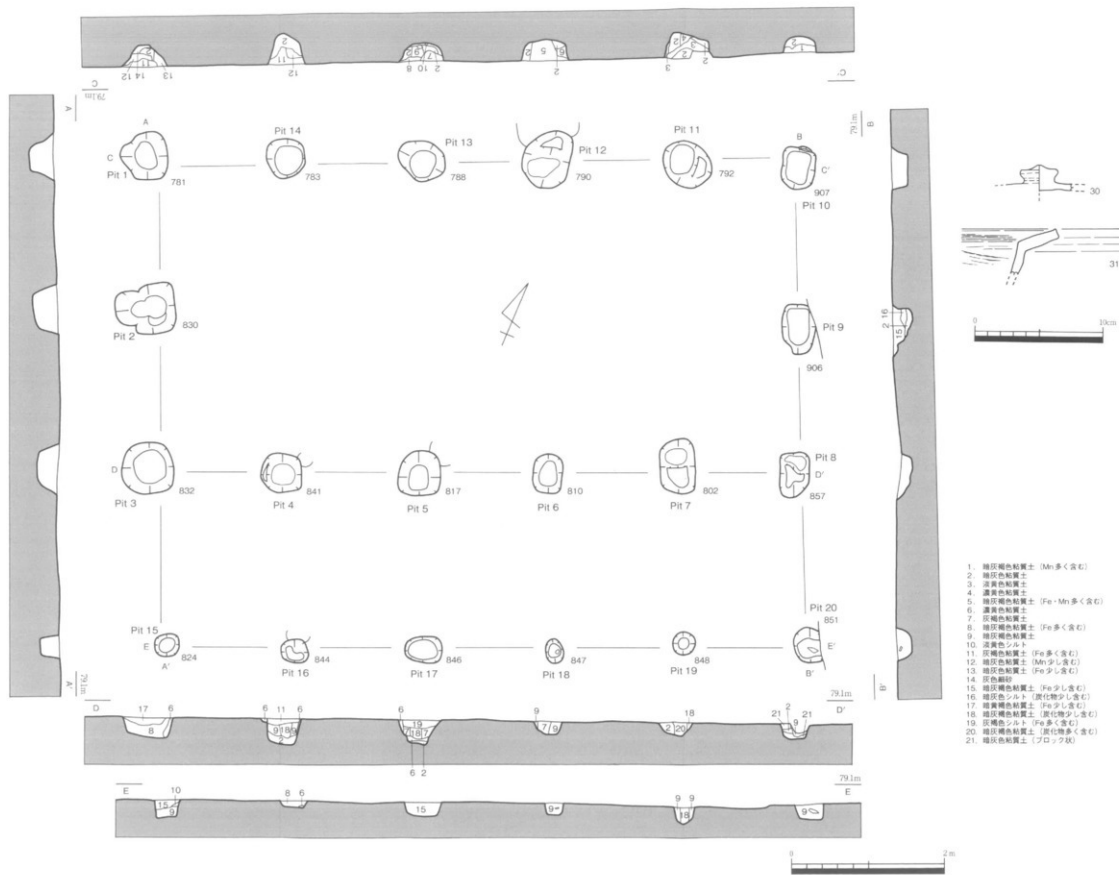
柱穴埋土断面には、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りは考えられず、切断された可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit内から遺物は出土していない。

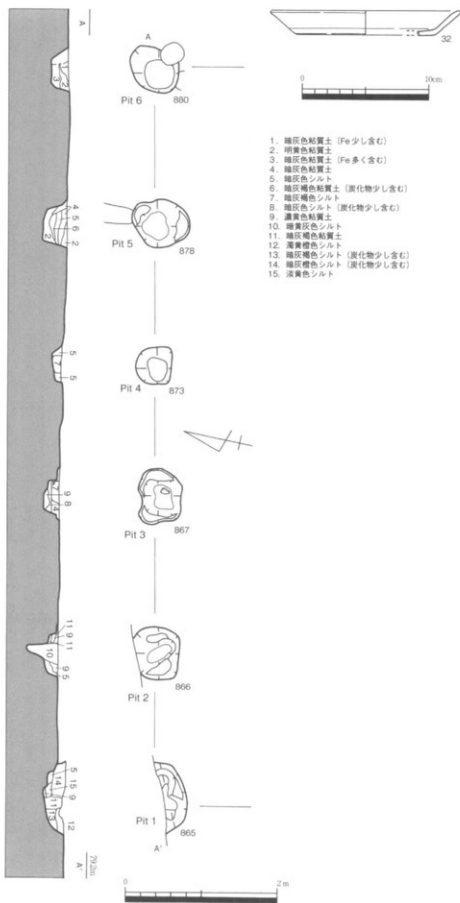
SB23 (第27図)

SB23はⅡ区南で検出された掘立柱建物跡である。梁間1間(0.8m)以上×桁行2間(4.2m)で、現状での面積3.36㎡以上、主軸方位はN-60°-Eを測る。大半が調査区外に伸びるため、現状では東西棟と考えているが、南北棟の可能性もある。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.3m前後の円形、断面は逆台形である。

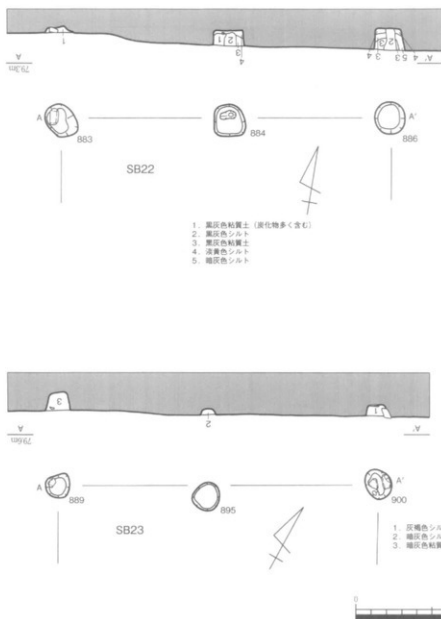
柱穴埋土断面には、SB21同様の柱痕は認められず、柱の抜き取り方法については不明



第25図 SB20平・断面図、出土遺物実測図



第26図 SB21平・断面図、出土遺物実測図



第27図 SB22・23平・断面図

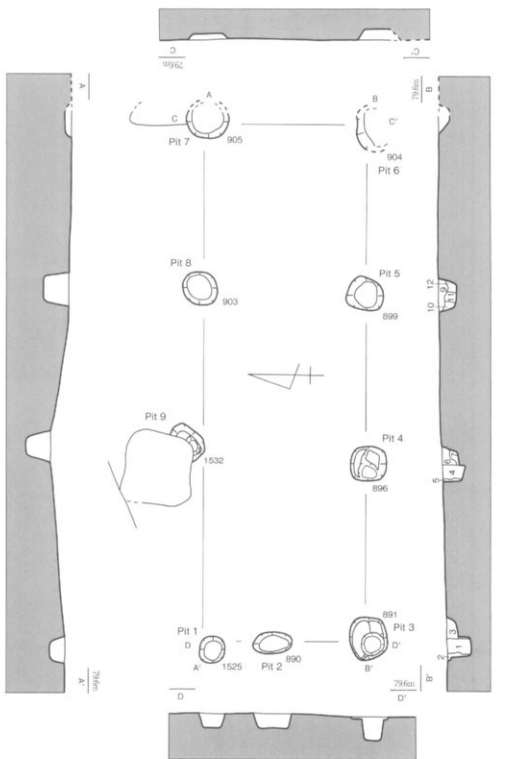
である。

Pit内から遺物は出土していない。

SB24 (第28図)

SB24はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(2.2m)×桁行3間(6.7m)で、面積14.74㎡、主軸方位はN-90°-Eを測る。調査区外に伸びる可能性は否定できないが、梁間の間隔が短く、南辺にも柱穴が確認できることから、完結した掘立柱建物跡と考えられる。柱穴の掘り方平面は径約0.3~0.5mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは四角形である。

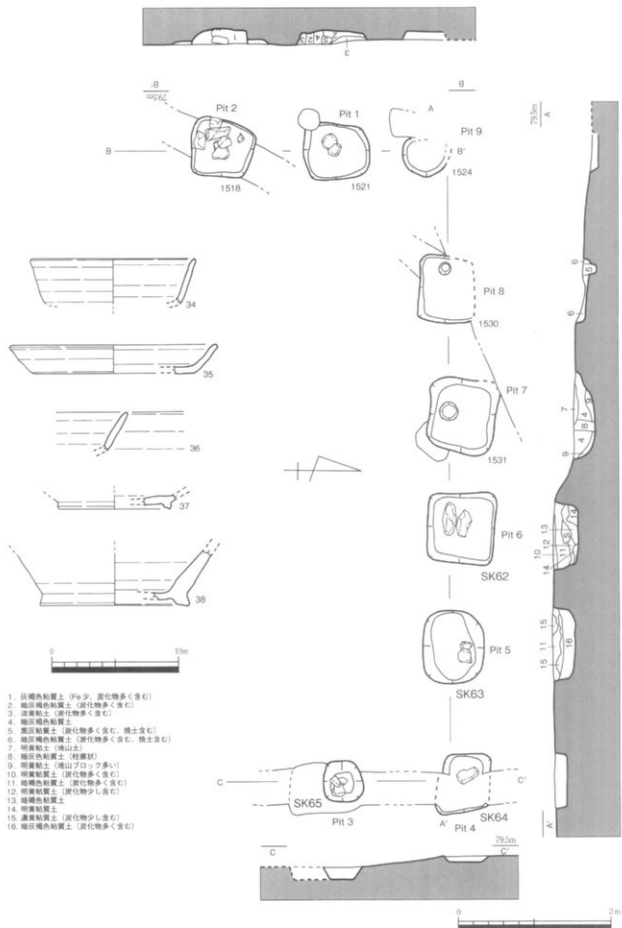
柱穴埋土断面が確認できる南辺の3柱穴でSB21同様の柱痕が認められるため、SB24を



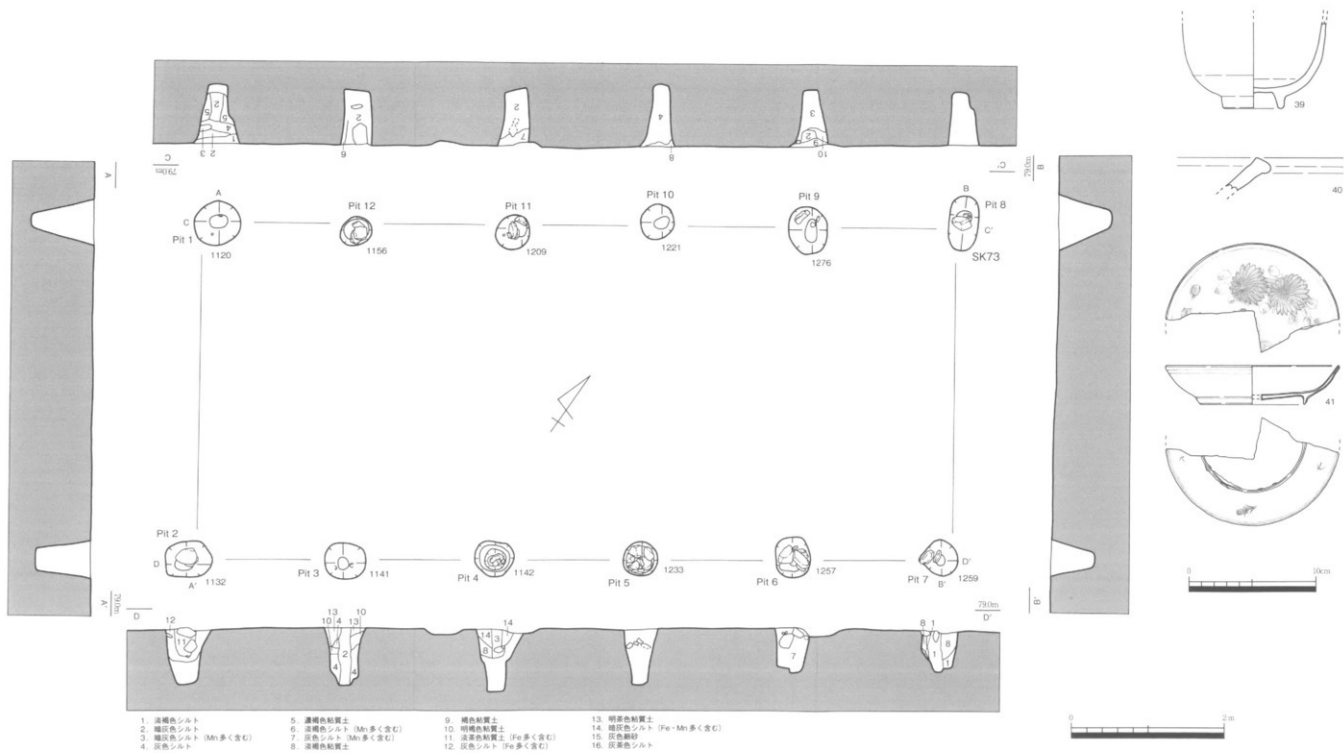
1. 黒灰色粘質土 (炭化物少し含む)
2. 黒灰褐色シルト
3. 黒灰色粘質土
4. 黒灰色シルト
5. 黒黄色粘質土
6. 白褐色シルト
7. 黒灰色シルト



第28図 SB24平・断面図、出土遺物実測図



第29図 SB25平・断面図、出土遺物実測図



第30図 SB30平・断面図、出土遺物実測図

構成するすべての柱穴で柱の抜き取りは考えられず、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit 8から33の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや外反気味に外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる大形の杯である。

SB25 (第29図)

SB25はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.7m)以上×桁行5間(8.2m)で、現状での面積30.34㎡、主軸方位はN-90°-Eを測る。検出できたのは北辺・東辺・西辺部分であり、調査区外にどの程度伸びるかは不明である。柱穴の掘り方平面は径約0.8~1.0mの隅丸方形、断面は逆台形である。

Ⅱ区南では遺構面が2面確認され、上面で確認できたPit 5・6は概報段階では土坑として扱われている。(SK63・62)下層面で他のPitが確認されていることから、本来は上層面からの掘り込みである。

柱穴埋土断面が確認できる柱穴の一部では、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りは考えられず、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

遺物は、34の須恵器杯、35の須恵器皿がPit 2から、36の須恵器皿、37の須恵器皿はPit 7から、38の須恵器壺底部がPit 1から出土している。

34はやや内湾気味に外上方に伸び、端部が外反して細く終わる。このため、口縁端部内側は明瞭な稜線が認められる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。35は平坦な底面から僅かに内湾し、端部が小さく外反する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-3で8世紀後半。36は直線的に外上方に伸び、端部が細くなって終わる。8世紀中頃~9世紀中頃。37は底面と体部の屈曲部の底部側に四角く直立する脚部を持つ。佐藤1993Ⅱ-1~5で8世紀~9世紀中頃。38は体部との屈曲部から外側に張り出す脚部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。

以上のことから9世紀中頃に位置付けられる。

SB30 (第30図)

SB30はⅥ区で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(4.5m)×桁行5間(9.8m)で、面積44.1㎡、主軸方位はN-55°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.4~0.5mの円形もしくは隅丸方形、断面は四角及び逆富士山形である。

柱穴埋土断面が確認できる柱穴の一部では、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りではなく、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。また、埋土1層のみのPitもあることから、当然柱の抜き取りも想定される。なお、埋土がPit中位程度で区画されているものも見られ、柱の長さなどを調整した痕跡と考えられる。

Pit内出土遺物として次の3点がある。39(Pit 8)の陶器碗、40(Pit 1)の土師質土鍋口縁部片、41(Pit 9)の染付け皿である。39は、やや深めの碗で、高台部も高い。40は、

半球状の体部から外上方に屈曲する土鍋と考えているが、時期は不明である。41は肥前系磁器染付皿で、見込みには菊花文、外面にも文様を描く。

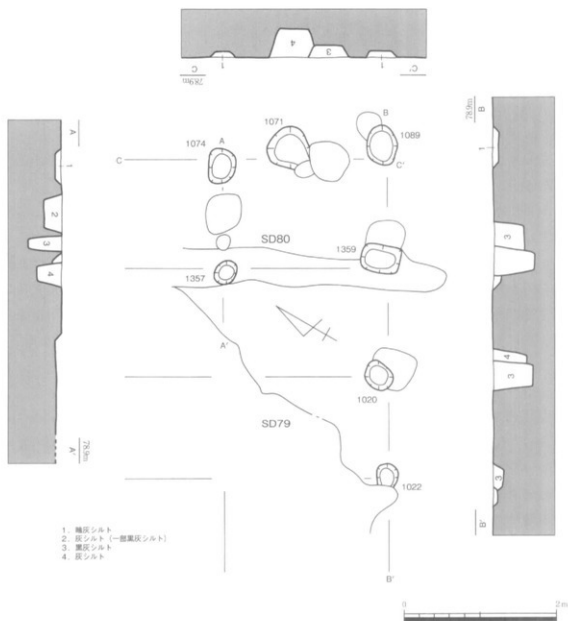
これらの特徴から19世紀前半～幕末頃に位置付けられる。

SB31 (第31図)

SB31はⅥ区北西隅で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間(3.4m)以上×桁行3間(4.9m)以上で、現状での面積16.66㎡、主軸方位はN-59°-Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形もしくは隅丸方形、断面は四角及び逆台形である。

現状でも北西部の柱穴は確認されておらず、SD79に切られていると考えられる。

Pit内から遺物は出土していない。



第31図 SB31平・断面図

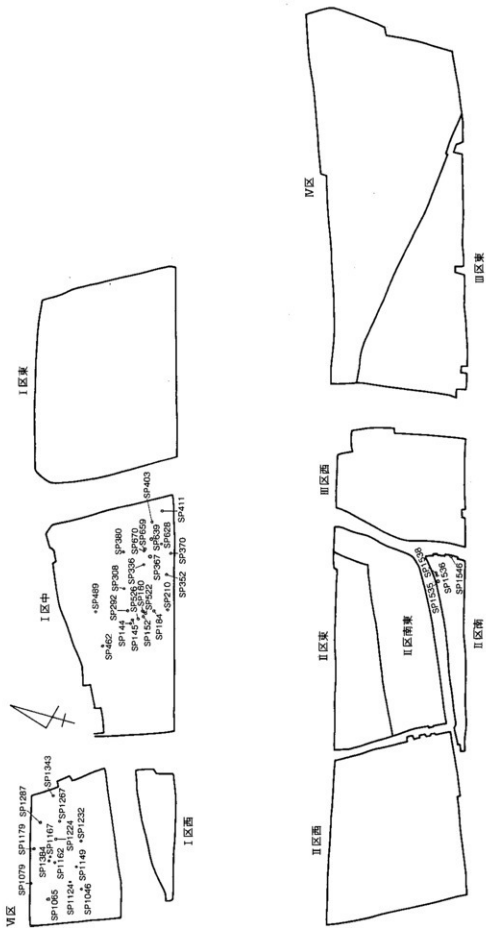
2 柱穴 (第32～35図)

柱穴は、全調査区で凡そ1,500穴程度確認されているが、その大半は掘立柱建物跡や欄列を構成するものとして位置付けることができなかった。掘立柱建物跡や欄列と認識されるものは、基本的に四角形を構成するか、一直線に並ぶかと、埋土の色・質などの要件を満たしているものである。今回の調査でも、単独で検出されている掘立柱建物跡 (SB20・30など) が、四角形を基本とする構成となっているため、検出段階及び整理段階でもこれを基準として精査した。しかし、構成を確認できない柱穴がこれほど大量に見られることは、より複雑な建物構造や簡易な施設、単独で機能するものなどの存在も想定され、今後の検討を要する項目の一つである。

以下、これらの柱穴から出土した遺物について記述する。なお、掲載は柱穴番号順としている。

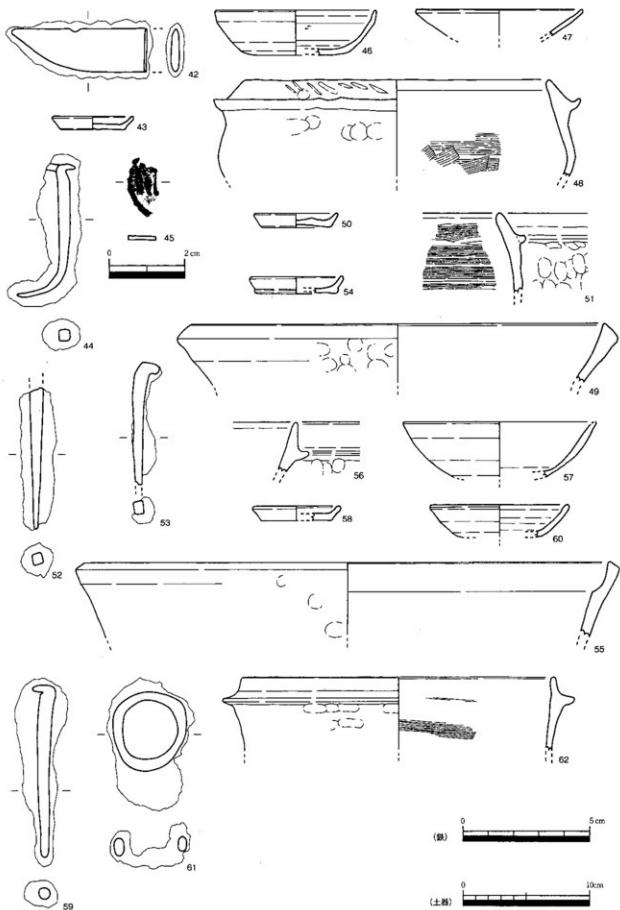
42 (SP144) は鉄刀の切先片である。43 (SP145) は土師器小皿で、底面はヘラ切り、他は内外面とも回転ナデが見られる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。

44 (SP152) は鉄釘である。先端部が釣り針状に曲がっており、頭部は変形している。45 (SP160) は銅銭片で、「●宝●●」と読むことができる。銭種は明確にできなかった。46 (SP184) は土師器杯で、内湾気味に立ち上がる体部を有し、口縁端部は細く終わる。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。47 (SP210) は土師器杯で、外上方に直線的に立ち上がる体部を有し、口縁端部は細く終わる。48 (SP292) は土師質羽釜で、体部下半を欠損している。体部中央から直線的に内上方に立ち上がり、端部は細く終わる。鏝はやや受け口状に小さく伸びている。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦14世紀～16世紀前半。49 (SP308) は土師質鉢で、口縁部のみ出土である。口縁部は体部から肥厚しながら端部に至り、端部に平坦面を作る。外面には指頭圧痕が顕著に見られる。片桐Ⅲ-⑥～⑦で15世紀後半～16世紀前半。50 (SP336) は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。51 (SP352) は土師質羽釜片で、鏝は短く水平に伸びる。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が顕著である。片桐Ⅲ-①～⑦で4世紀～16世紀前半。52 (SP367) は鉄釘の先端部である。断面は四角く、先端は尖る。53 (SP370) は鉄釘の頭部である。断面は四角く、頭部は変形している。54 (SP380) は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。55 (SP403) は土師質土鍋口縁部片で、口縁部内側に段を持つ。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。56 (SP411) は土師質羽釜口縁部片で、鏝は短く水平に伸びる。時期不明。57 (SP462) は土師器椀で、半球状の体部を有し、口縁端部は細く終わる。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。58 (SP489) は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から外上方に短く外反して立ち上がる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。59 (SP522) は鉄釘で、頭部は変形している。先端部は欠損している。

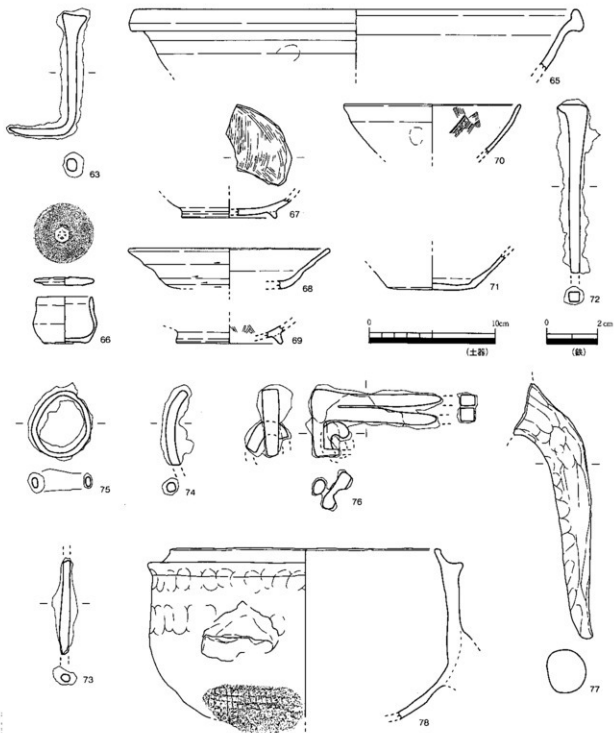


第 32 图 柱穴配置图

可能性が高い。60 (SP526) は土師器杯で、底部から内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000 II-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。61 (SP628) は不明鉄製品で、X写真ではリングが確認できるが、用途は不明である。62 (SP639) は土師質羽釜で、ほぼ直立する体部に水平に伸びる鐏を持つ。時期不明。63 (SP659) は鉄釘で、L字状に曲がっている。頭部は変形しており、先端部は尖って終わる。65 (SP670) は土師質鉢の口縁部で、直線的な体部に上下に肥厚して端部に面を作る。内外面ともナデ調整を施す。片桐Ⅲ-②~③で14世紀。66 (SP1046) は陶器の小壺で、扁平な蓋を持つ。蓋中央には亀甲形の中に大の刻印を持つ。体部は、底部から外上方に直線的に伸び、最大径部で内上方に屈曲したのち垂直に伸びて口縁部に至る。近世資料と考えるが時期は不明である。67 (SP1065) は土師器碗である。高台は三角形にやや外に伸び、内面はヘラミガキが顕著である。12~13世紀頃か。68 (SP1079) は土師器杯で、丸みを持った底部から一端内湾し、そのち外反して口縁端部に至る。佐藤2000 II-3~5で13世紀。69 (SP1124) は黒色土器碗の底部で、高台は三角形にやや外に伸び、内面にはヘラミガキが見られる。12~13世紀頃か。70 (SP1149) は土師器杯で、内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。71 (SP1162) は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は欠損している。72 (SP1167) は先端部を欠損している鉄釘で、頭部が変形している。73~76はSP1179から出土した鉄製品である。73は鉄釘の部分と考えられ、頭部・先端とも欠損している。74も鉄釘の部分と考えられるが、湾曲しており、頭部・先端とも欠損しているため、他の製品の可能性がある。75は61同様のリングで、用途は不明である。76はいくつかの資料が錯着しており、まとまって一つの製品を構成するものかどうかさえ不明である。75のリングと同様の資料も断片的ではあるが認められる。77 (SP1224) は土師質土鍋もしくは羽釜の脚で、ほぼ完存している。78 (SP1232) は土師質羽釜で、脚が欠損している。半球状の体部から短く屈曲して口縁部を形成している。屈曲部からほぼ水平に伸びる鐏が見られる。体部外面上半は指頭圧痕、下半は格子叩きが顕著である。内面はナデ調整が施されている。片桐Ⅲ-④で15世紀前半。79 (SP1267) は土師質羽釜である。口縁部は内傾して丸く終わる。鐏は水平に短く伸び、形骸化の傾向が見られる。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。80 (SP1287) は土師質土鍋の口縁部で、内面に段を持つ。段部分にはハケ調整が施されている。片桐Ⅲ-⑦~⑨で16世紀。81 (SP1343) は土師質播鉢で、底部から外上方に内湾気味に伸び、口縁端部は肥厚して終わる。内面には8条を1単位とした卸目がある。片桐Ⅲ-⑧~⑨で16世紀。82 (SP1384) は土師質羽釜である。口縁部は内傾して丸く終わる。鐏は水平に短く伸び、形骸化の傾向が見られる。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。83 (SP1535) は須恵器杯蓋の乳頭状つまみである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。84・85はSP1536から出土している。84は須恵器杯で、高台は垂直に四角く立ち上がる。佐藤1993 III-1~3で9世紀後半~10世紀中頃。85は須恵器杯蓋で、扁平な形状で端部は丸く終わる。つまみ部分は欠損している。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。86~

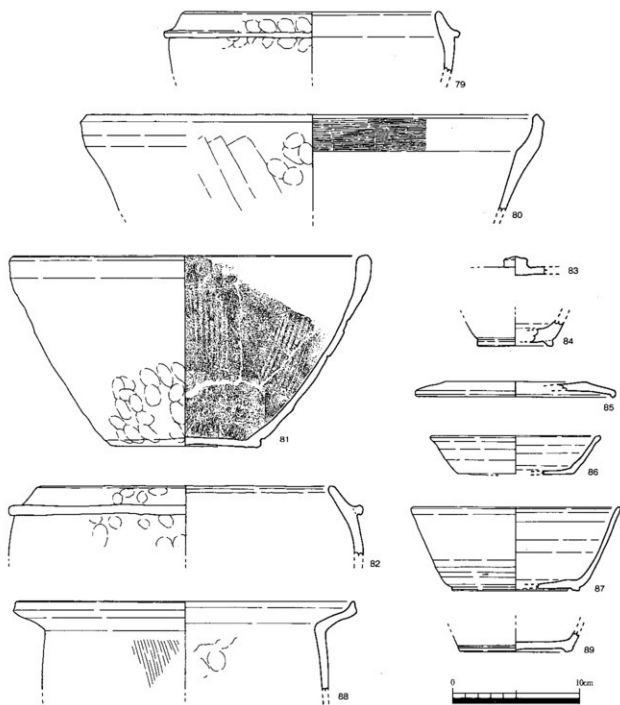


第33圖 SP 出土遺物実測図 (1)



第34図 SP出土遺物実測図(2)

88はSP1538から出土している。86は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に伸び、口縁端部は丸く終わる。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。87は須恵器高台付杯で、低く扁平な高台を持つ。体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がる。底面はヘラ切りで仕上げられている。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。88は土師質土鍋で、直立する体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張する。これ



第35図 SP出土遺物実測図(3)

らの資料から片桐Ⅰ-②~④で10世紀。89(SP1546)は須恵器高台付杯の底部で、外に四角く伸びる高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1~5で8世紀~9世紀中頃。

以上のように、Pit出土の資料についても、掘立柱建物跡の年代にほぼ分かれることから、大きくは二時期の集落跡であるといえる。

3 溝状遺構

溝状遺構は、第36図に示したようにすべての調査区で検出されおり、それぞれ時代や性格を異にしているが、ここでは遺物が出土しているものを中心に、特徴的な溝状遺構を単体で取り上げて記述する。

SD02 (第37図)

SD02は、I区西で検出された小規模な溝で、検出長2.0m、上面幅1.1m、深さ0.12mを測り、断面は浅い皿状である。溝は北端部分のみ検出しており、遺構の性格は不明である。出土遺物は90の土師質羽釜片1点である。罫は水平に伸びた後、外上方に屈曲するやや古相を呈する資料である。1点のみの出土であるが、この資料が溝の廃絶時期を示すものであれば、片桐I-①～②に比定され9世紀後半～10世紀前半に位置付けることができる。

SD05 (第37図)

SD05は、I区西で検出された小規模な溝で、検出長5.0m、上面幅0.8m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。溝は北端、南端が調査区外に伸びている。また、SK01とSD08に切られており、これらの遺構に先行することは間違いない。なお、北端部はⅥ区では検出できていない。出土遺物はなく、性格は不明である。

SD10 (第38図)

SD10は、I区中央で検出された溝で、検出長12.5m、上面幅0.5m、深さ0.18mを測り、断面は逆台形である。埋土は1層で、淡灰褐色細砂からなる。溝は北端が調査区外に伸びている。南端は自然消滅する。出土遺物はなく、性格は不明である。

SD12 (第38図)

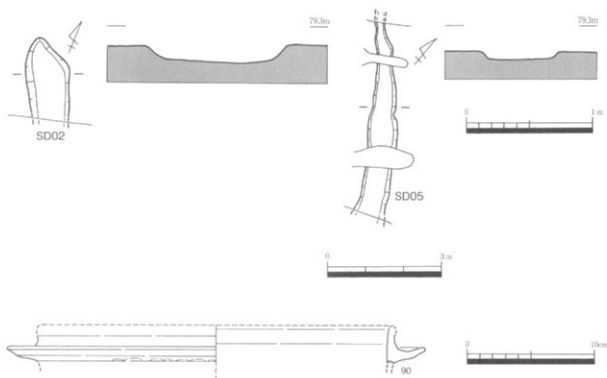
SD12は、I区中央で検出された溝で、検出長15.5m、上面幅0.9m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状である。埋土は1層で、暗灰色シルトからなる。溝は北端部分で東に直角に分岐 (SD48) しているほか、ほぼ中央部で同様の分岐 (SD13) が見られる。掘立柱建物跡との関係から、検出されている掘立柱建物群を囲む溝と考えられる。出土遺物はない。

SD28～31 (第39～42図)

SD28～31は、I区中央で検出された溝群で、SD48から直線的に東に連続して伸びる部分と、SD48との合流部から南に伸びる部分からなるSD28が基本となり、ほぼ中央部で大きくは3本 (SD28・29・30) に分岐する。また、これと並行して東側にSD31がある。SD31は北側でオーバーフローしており、断面1のとおりSD28に先行する状況を示すが、南側ではSD28～31と合流し、切りあい関係は見当たらない。規模は、SD28が検出長25.2m、上面幅1.0m、深さ0.1m、SD29が検出長13.6m、上面幅1.3m、深さ0.14m、SD30が検出長10.6m、上面幅0.8m、深さ0.2m、SD31が検出長19.9m、上面幅0.7m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。断面2～4のとおり、SD30が徐々に埋没していく様相を示すのに対して、他の溝状遺構は埋土が1層からなるものが多い。

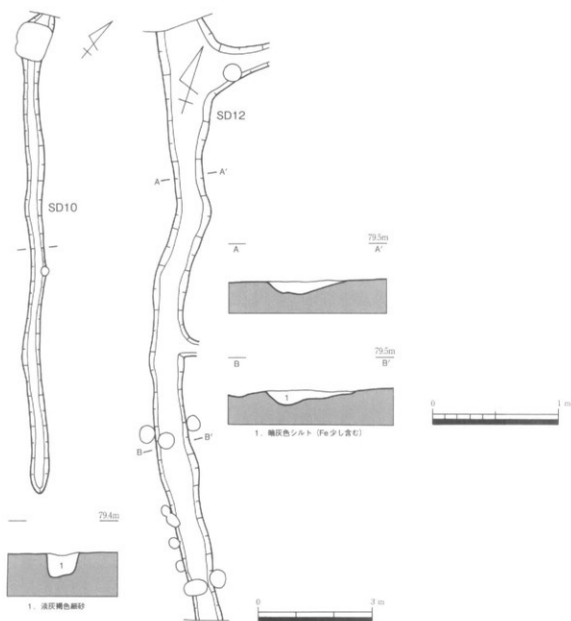
出土遺物は、第39図91～95の鉄製品及び第41・42図の土器類96～112がある。

91・92は鉄片で、全体形状は不明である。93は短冊状の鉄板を釣り針のように曲げた



第37図 SD02・05平・断面図、出土遺物実測図

もので用途は不明である。94は鉄釘で頭部が変形しているほか、先端部も直角に折れ曲がっている。使用によるものか。95も鉄釘と考えられるが、頭部・先端部とも欠損しているため断定できない。96は土師器杯で、回転ナデ調整が施される。佐藤2000Ⅱ-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。97も土師器杯でナデ調整である。佐藤2000Ⅱ-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。98は96・97に比べて深く、器壁も厚い。佐藤2000Ⅱ-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。99は土師器杯で、底部に回転ヘラ切りと板目圧痕が見られる。100は土師質搦鉢で6条を1単位とする卸目が見られる。時期不明。101は土師器小皿でヘラ切りの底部を持ち、浅い。佐藤2000Ⅱ-3~5で13世紀第2四半期~14世紀前半。102は土師質こね鉢で口縁部を上下に拡張して面を作る。片桐Ⅲ-②~③で14世紀。103~109は土師質羽釜である。103はほぼ直立する体部に水平で短い鈔がつく。口縁部は少し内傾し、端部は丸く終わる。底面は格子状叩きが認められる。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。104は103と比べて浅く、脚がつく。調整などは同様である。片桐Ⅲ-③で14世紀後半。105は口縁部が前2者と比べて長い。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。106は、口縁部と鈔部分を一体として製作しているため、鈔部分の器壁が厚い。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。107も同様の器形である。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。108は口縁部が内傾して長い。鈔は水平に伸び、端部は細く終わる。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。109は口縁部が短く内傾する。鈔も短く形骸化している。片桐Ⅲ-①~⑦で14世紀~16世紀前半。110は土師質土鍋の口縁部で、内



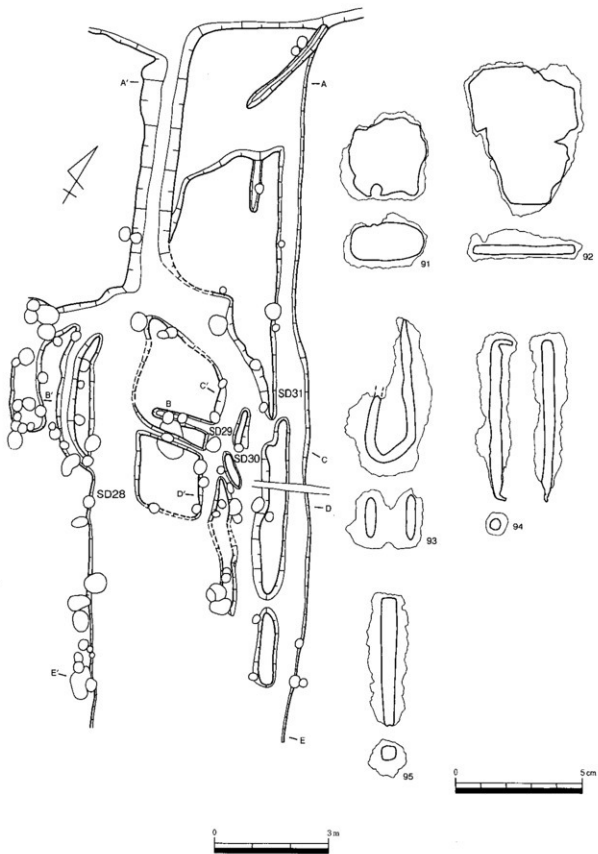
第38図 SD10・12平・断面図

側に段を持ち、端部を平坦につくる。片桐Ⅲ-⑦~⑨で16世紀。111は土師質土鍋で、体部から屈曲する口縁部を持つタイプである。片桐Ⅲ-⑦~⑨で16世紀。112は110同様の形態を持つ。体部外面には指頭圧痕が顕著である。片桐Ⅲ-⑦~⑨で16世紀。

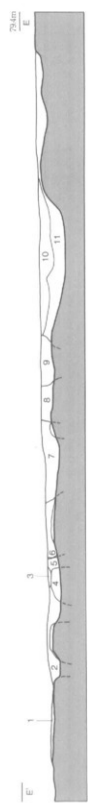
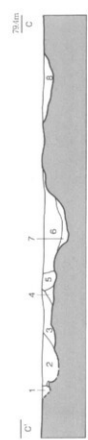
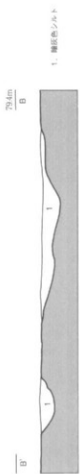
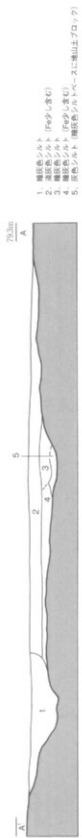
以上の土器の特徴から、14~16世紀に埋没したといえる。ただし、前述したように16世紀に位置付けられる資料が土師質土鍋に限られる点は留意する必要がある。

SD37 (第43~48図)

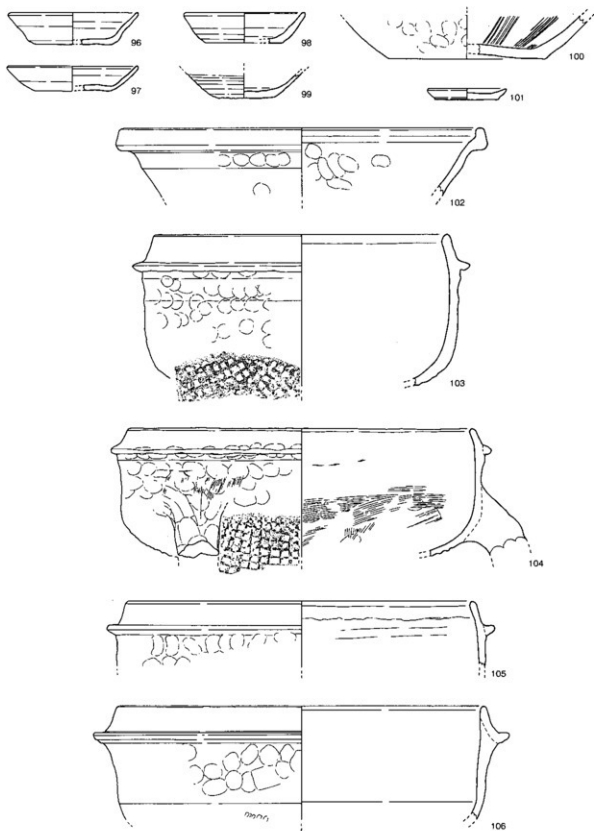
SD37は検出長28.7m、上面幅0.8~5.1m、深さ0.46~0.7m、断面はU字もしくは逆台形を呈する小規模な溝で、「く」の字状に屈曲して北に流れる。本溝が半ば以上埋没した段階で古式土師器50個体分以上が投棄されている。断面B-B'では、土層1~3が上層、こ



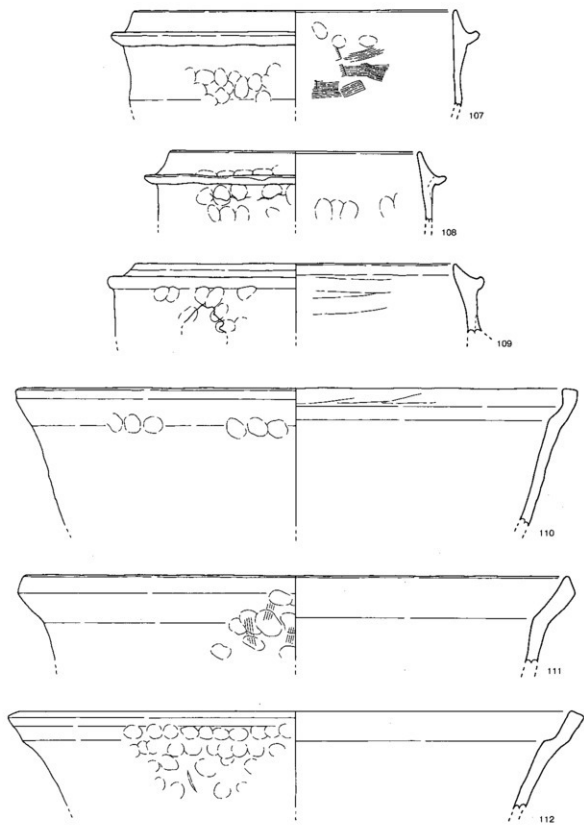
第39图 SD28~31平面图、出土物実測图(1)



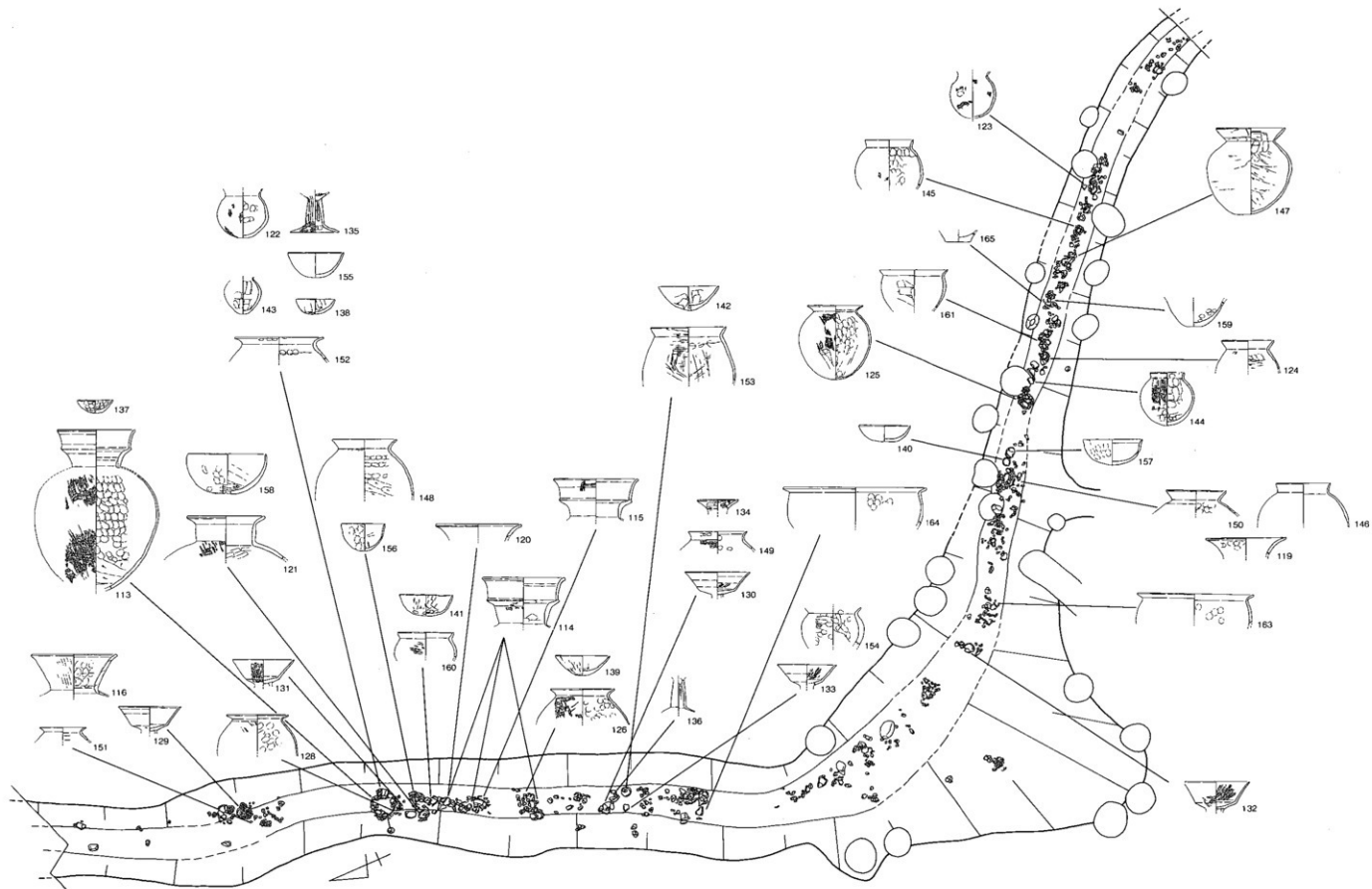
第40図 SD28~31断面図



第41圖 SD28~31出土遺物実測図(2)



第42図 SD28~31 出土遺物実測図 (3)

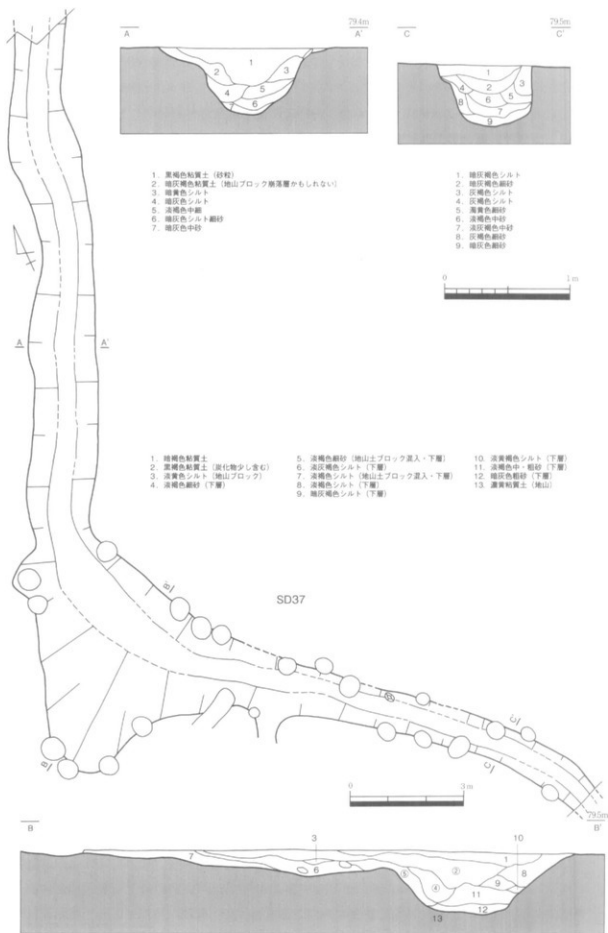


第43图 SD37遺物出土状況

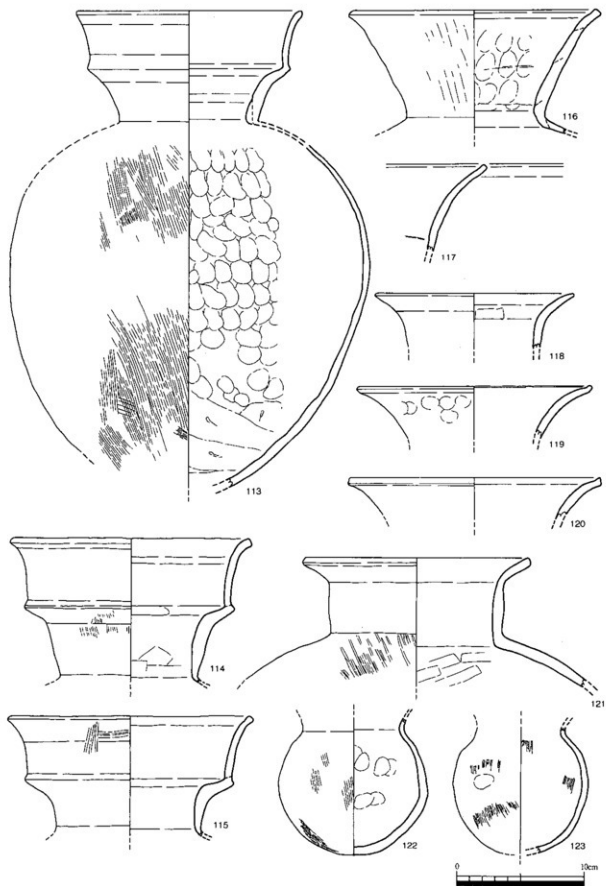
れ以外が下層に相当する。下層は、この溝状遺構が徐々に埋没する過程を表現しているが、上層については、他の断面からも土器を包含する埋土が短期間で形成されていることが分かる。このことは、多量の土器が投棄されていたことから隣接地点に当該期の集落域が存在すること、土器の投棄がSD37の廃絶と密接に関係すると考えられることから、SD37の廃絶が集落の廃絶と同時期になされた可能性が高い。また、投棄された土器は、以下のとおり複数形式の土器を含まないと考えられるため、ごく短期間機能した集落と考えられる。

113～123は壺である。113は広口壺である。口縁部と体部は接合しないが、図上で復元を試みた。口縁部は体部から外反気味に外上方に伸びた後、垂直方向に角度を変えて再び外反気味に立ち上がる。二重口縁壺の形態化したものととらえることができる。体部は肩部に最大径があり、やや尖り気味の丸底になると考えられる。体部外面は全面ハケ調整であるが、底部付近にハケ調整の下に叩き目が観察される。内面は底部のみヘラ削りが認められ、他は指頭圧痕が顕著である。114も広口壺の口縁部で、113に比べてやや長く、口縁端部に面を持つ。115は形態的には113同様であるが、口縁端部は114の形態である。116はラッパ状に開く広口壺で、体部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。外面は板ナデ後ナデ調整が施され、内面は指頭圧痕が顕著である。117は116同様の器形である。118は体部からやや垂直に立ち上がった後外反する口縁部を持つ広口壺である。119・120は116同様の広口壺であるが、口縁部の高さがやや低くなるタイプと考えられる。121は118同様、体部から垂直に立ち上がった後、外反ではなく短く屈曲する口縁部を持つ。体部外面にはヘラミガキの痕跡が認められる。また、内面は板ナデである。122は小型丸底壺で、球形の体部に外反する口縁部を持つが、欠損しており長さ・形状は不明である。体部外面はハケ調整、内面は指頭圧痕が見られる。123も122とはほぼ同様である。

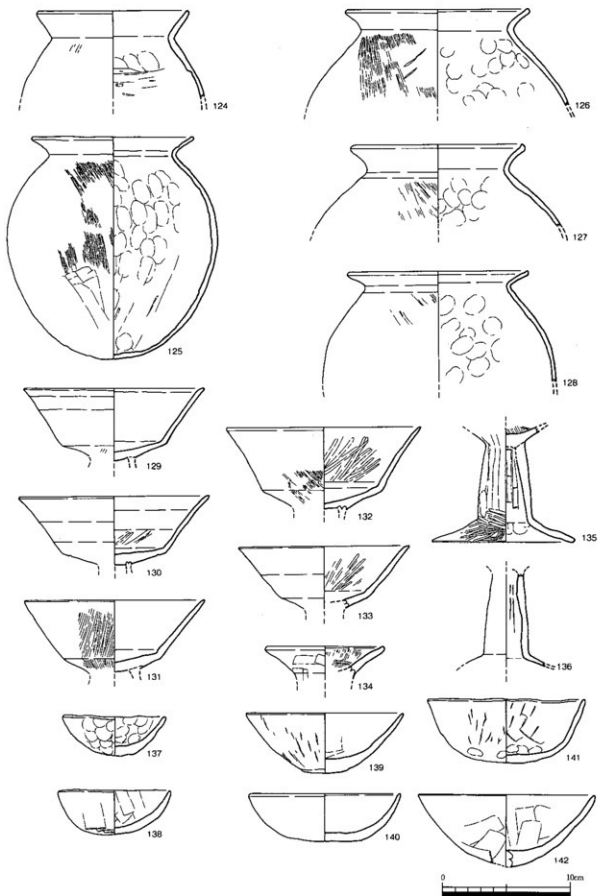
124～128、147～154は甕である。124は体部上半のみの出土で、体部の形状は不明であるが、体部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。内面は体部中位以下にヘラ削りを行っていると考えられる。125は球形の体部に短く外上方に立ち上がる口縁部を持つ。体部外面は中位以上がハケ調整、下位は板ナデである。内面は下位にヘラ削り、中位以上に指頭圧痕が顕著である。口縁端部は上方に少し摘み上げている。126は125とはほぼ同様であるが、全体に器壁が厚い。127は、口縁部が内湾気味に立ち上がり端部はやや肥厚している。128は125に近い形態であるが、調整が125ほど顕著でない。147は肩部に最大径があり、「く」の字に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。調整は外面がナデ、内面は頸部より少し下までヘラ削りである。148は最大径が体部中位にあると考えられる資料で、内面調整が中位までヘラ削り、上位は指ナデである。149は頸部の屈曲が明瞭ではなく、折り曲げ口縁と考えられる。体部外面は叩き目が明瞭に残っている。150は「く」の字に直線的に立ち上がる口縁部を持ち、端部は上方に少し拡張されている。151は口縁部が外反して立ち上がる。152は149同様、折り曲げ口縁と考えられる。153は最大径が体部中位にあり、すこし「く」の字に屈曲する口縁部を持つ。口縁部・体部とも外面に叩き目があり、折り曲げ口縁であることが分かる。内面は頸部より少し下までヘラ削りが見られ



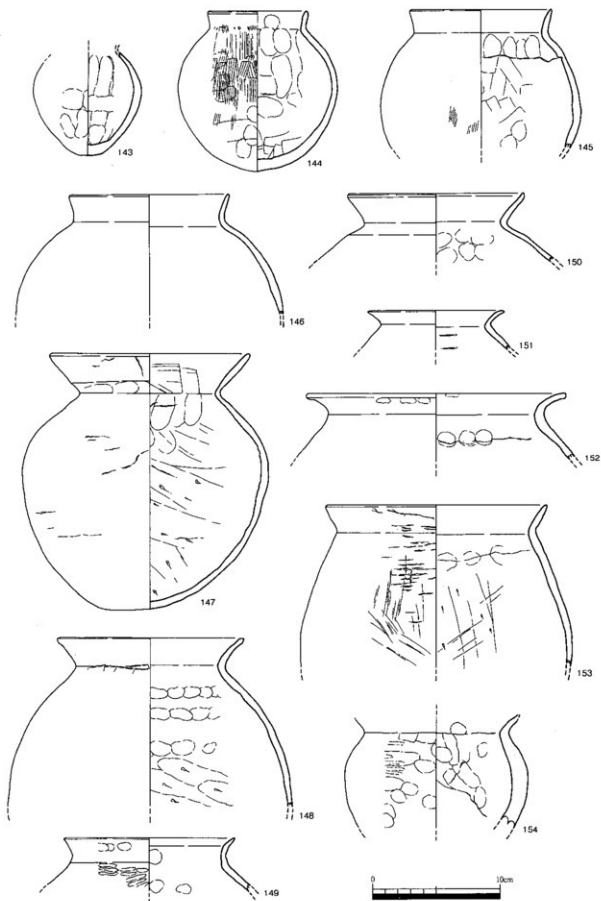
第44図 SD37平・断面図



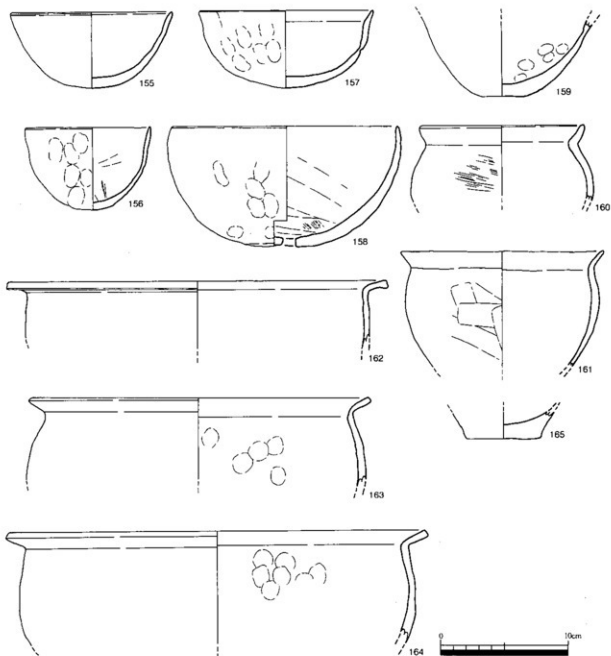
第45图 SD37出土遺物実測图 (1)



第46图 SD37出土遺物実測図(2)



第47図 SD37出土遺物実測図(3)



第48図 SD37出土遺物実測図(4)

る。154は球形の体部に「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。体部外面には叩き目が見られる。体部器壁は厚く、鉢に分類すべき資料かもしれない。

129～133、135、136は高杯である。129～133は高杯杯部で、杯部と脚部の境から短く外上方に伸びた後、屈曲して長く立ち上がる口縁部を持つ。口縁部はやや外反気味に立ち上がる129～130・132と直線的に立ち上がる131とがある。133は屈曲がやや不明瞭となるタイプで、このグループの中では後出する要素と考えられる。調整は、ややバラツキがあるものの杯部外面をハケ調整、内面をヘラミガキするものが多い。135・136は脚部である。やや開き気味の筒部から低く「ハ」字に開き端部に至る。135では筒部外面を指す

デ、内面をヘラ削り、脚端部外面をヘラミガキ、内面をナデ調整している。136は筒部が細くなっており、後出する要素と考えている。

134は小型器台の受部で、脚部は欠損している。受部は低く逆「ハ」の字になっている。

137～142、155～164は鉢である。137は小形の鉢で、所謂「手捏ね土器」である。内外面とも指頭圧痕が顕著である。138は丸底の鉢で内外面とも板ナデで仕上げている。139はやや丸みを持った平底の鉢で、底部から内湾気味に立ち上がる。140は丸底の鉢で、底面をヘラ削りで仕上げている。141は半球状のやや深めの鉢である。142はやや尖底気味の鉢で、内外面に板ナデが施されている。

143～146は小形壺である。143は卵形の体部を持ち、底部は少し平たい丸底である。調整は内外面とも指ナデである。144～146は球形の体部に短く直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。144は外面ハケ調整、内面指ナデである。145・146は口縁部が144に比べてやや長く外反する。155は半球状の鉢で、内外面ともナデ調整を施す。底部は丸底である。156は半球状の鉢で、底部は不明瞭ながら平底である。157は口縁端部が細く終わり、これに伴い内側に明瞭な稜線を持つ。158は鉄鉢形の鉢で、底面に穿孔が見られる。159は不明瞭な平底を持つもので、壺の底部の可能性はある。160は最大径が体部中位より上にあり、「く」の字に立ち上がる短い口縁部を持つ。161は半球状の体部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。162は逆「L」字の口縁部を持つもので、端部は平坦につくる。内外面とも摩滅しており、弥生時代前期に遡る資料の可能性はある。163は半球状の体部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。寛に分類すべき資料の可能性はある。164も163同様の資料であるが、口縁部が低く広がること、明らかに口縁部が最大径を持つことから、鉢と考えている。

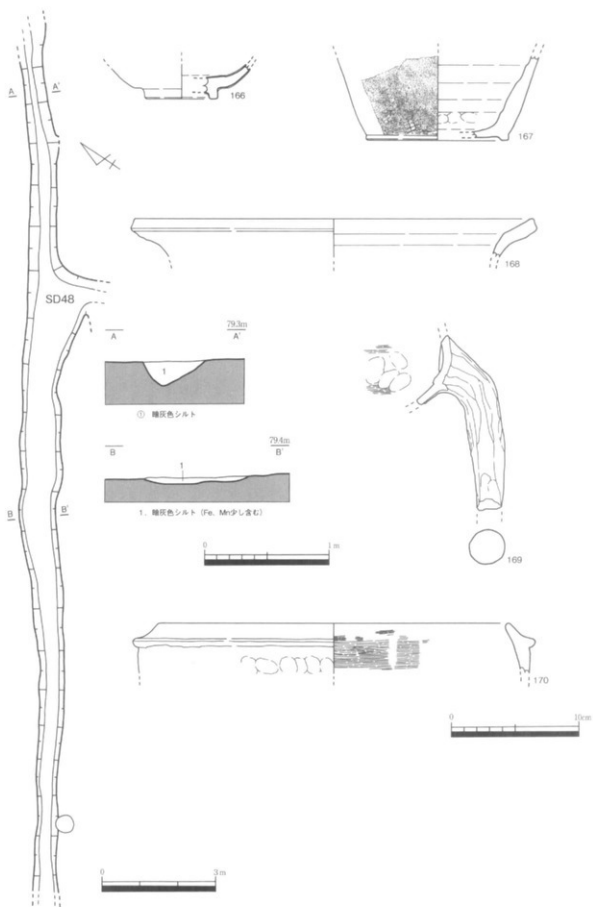
165は壺もしくは甕の底部である。明瞭な平底を持つことや他の資料には見られないことから、同時期ではなく、先行する可能性もある。

SD37出土土器の年代的な位置付けについては第4章第2節でふれる。

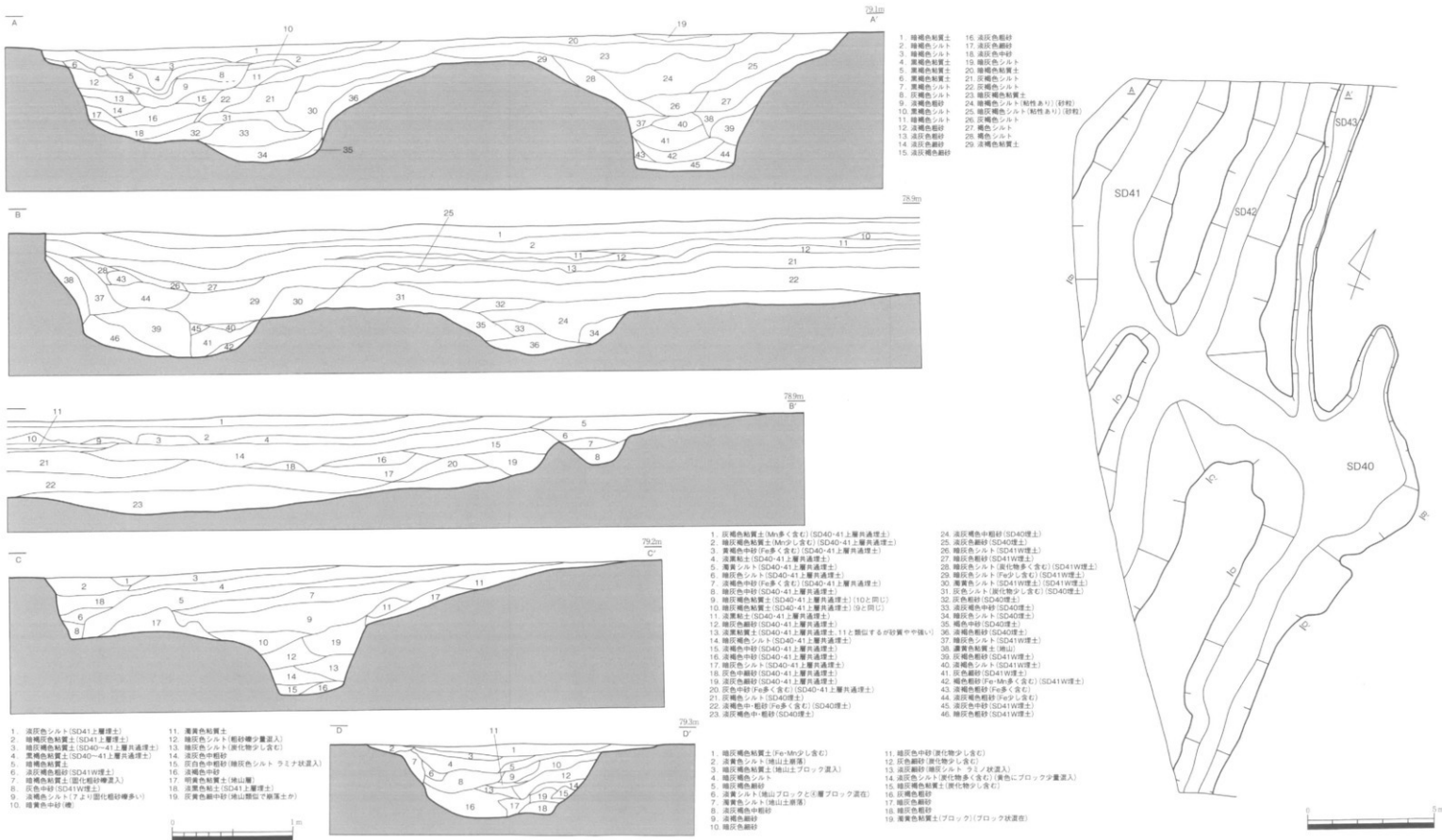
SD48 (第49図)

SD48は、I区中央の北辺で検出された東西に伸びる溝で、検出長22.3m、上面幅1.0m、深さ0.2mを測る。先にもふれたように、SD12・28に連続する溝で、SD37を切っている。集落の北辺を画する性格の溝と考えられるが、北側が調査区外になるため、断定はできない。断面はA断面では上面の広いU字状、B断面では浅い皿状で検出され、それぞれ埋土は1層であり、短期間での廃絶が考えられる。

出土遺物は166～170の5点である。166は青磁碗である。高台部も含め施釉されている。13～14世紀カ。167は須恵器壺底部で、低い高台を持つ。体部下位には格子叩き目が見られる。9世紀代。168は土師質壺の口縁部で、外上方に伸び、肥厚する。時期不明。169は土師質土鍋・羽釜の脚で、先端部を欠損している。170は土師質羽釜の口縁部で、内湾する口縁部に形骸化した鏝を持つ。内面はハケ目が顕著である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。



第49図 SD48平面図、出土遺物実測図



第50図 SD40～43平・断面図

出土遺物の年代はSD28出土遺物の年代と齟齬がなく、14世紀に位置付けることができる。

SD40～43 (第50・51図)

SD40～42はI区東で検出された北流する大形溝、SD43は同地区で検出されたSD40に伴う小水路で、断面は逆台形状である。SD41の南端はI区中央の東端で僅かに検出された。時間的な先後関係は、SD41・42が並行して存在し、ある程度埋没した段階でSD41から分岐し、SD42を横断してSD40への流れがある。土層断面D-D'の状況からは、SD40の開削時期がSD41・42とほぼ同時と考える状況にない。ただSD41・42に重なる最終流路の堆積状況から類推すれば、SD40の1～5層が最終流路に伴うものとも考えられるので、これ以下の堆積は最終埋没以前に形成されており、開削時期がSD41・42と同時期まで遡る可能性が高い。

各溝の規模は次のとおりである。

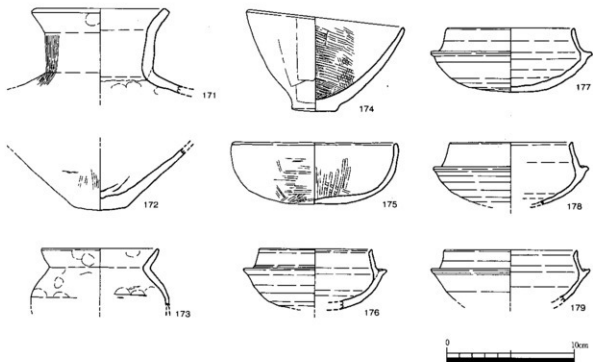
SD40は、検出長16.8m、上面幅2.2～3.0m、深さ0.9～1.3mを測る。

SD41は、検出長24.2m、上面幅3.4m、深さ1.0mを測る。

SD42は、検出長16.4m、上面幅2.8m、深さ1.08mを測る。

SD43は、検出長11.2m、上面幅0.7mを測る。

出土遺物は171～179がSD40・41から出土している。171は体部から直立して立ち上がる頸部に、少し屈曲する短い口縁部を有する。頸部から体部にかけてハケ目が見られる。172は壺の底部で、不安定な平底を持つ。173は小型丸底壺で、最大径部から上のみ出土している。体部は球形で、「く」の字に短く内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。174は



第51図 SD40・41出土遺物実測図

平底の鉢で、外面調整は板ナデやナデ、内面はハケ目が顕著である。175は丸底の鉢で、内外面ともヘラミガキが観察される。176～179は須恵器杯身で、口縁部は長く直立し、口縁端部内側に段を持つ。171～175の資料中、173・175が下川津Ⅵ式、その他が下川津Ⅴ式に相当すると考えられ、176～179は古墳時代中期 TK47 5世紀後半に比定できる資料である。

出土資料の層位からみて、弥生時代後期後半頃にSD40～42の3条の溝が開削され、半ば以上が埋没した状態で、古墳時代中期頃に3条の溝を1条の溝（SD40からSD42を横断してSD41に続く）として再利用したものと考えられる。SD43はこの段階に付加された溝である。

これらの溝群は規模・形態・方向から山裾の谷部より取水して北方低地部に給水する灌漑水路と考えられる。

SD55～57・72（第52・53図）

Ⅱ区西のSD55～57、Ⅱ区東の72は一連の溝で、規模はSD55が検出長11m、上面幅1.6m、深さ0.26m、SD56・72が検出長24.2m（SD56が10.0m、SD72が12.7m）、上面幅0.7～2.1m、深さ0.06～0.24m、SD57が検出長3m、上面幅0.5m、深さ0.1mを測る。配置からSB21と関連する溝と考えられる。溝は、SB21の北辺（SD56）、西辺（SD55）を画する状態を呈しており、北西のコーナーから短く伸びるSD57によって北側に広がる低湿地状の落ちに水を流すような構造を示している。また、SD56はⅡ区東のSD72につながり、東端は不整形な土坑状の浅い落ち込みで終わっている。形態的には、この地点の湧水を北側に排水する機能と、SB21に附属する溝との両者の機能を有していたものと考えられる。

SD55～57の断面からは、流水の痕跡があまり認められず、堆積土も比較的ブロック状に堆積していたと考えられ、最終的には一時に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物はSD55・56から180～183の4点が出土している。180は、土師器碗で低い高台を持つ。181は須恵器杯で底部はヘラ切りされている。7世紀後半～9世紀後半頃。182は土師器碗で、四角く外に踏ん張る高台を持つ。183は土師質土鍋の口縁と考えられる。

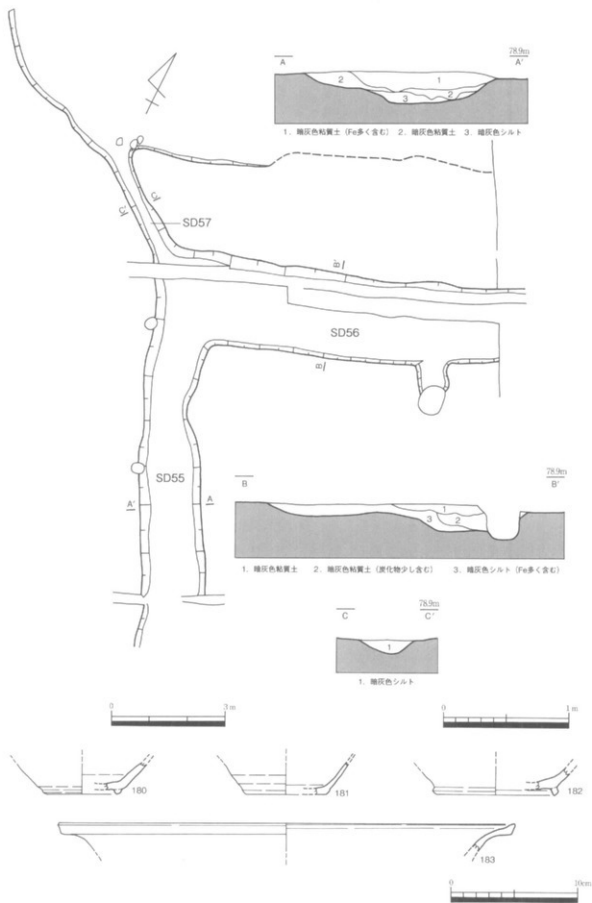
埋没時期は9世紀後半頃に位置付けることができる。

SD69～71・73（第54図）

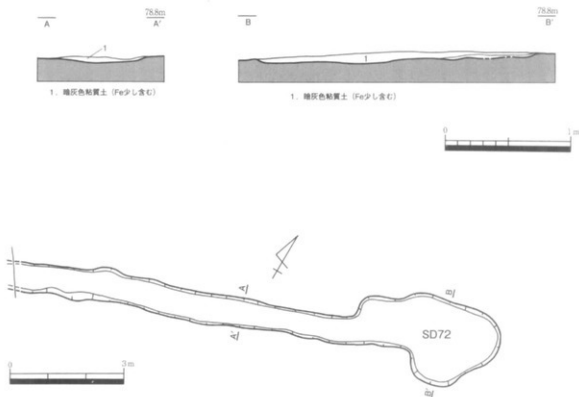
SD69～71・73は、いずれもⅡ区東で検出された南北に伸びる溝で、SD69が検出長7.0m、上面幅0.8m、深さ0.16m、SD70が検出長7.5m、上面幅0.5m、深さ0.1m、SD71が検出長8.7m、上面幅0.6m、深さ0.1m、SD73が検出長4.0m、上面幅1.2m、深さ0.16mを測り、断面はすべて逆台形である。SD69・73が不整形、SD70・71が直線的に伸びるが、南端付近でクロスしている。状態からは、溝の最深部を残した削平と考えられ、その性格は不明である。出土遺物は、SD69から出土した184のみである。184は須恵器杯で、底部から体部への移行がなだらかである。7世紀後半～9世紀後半頃に位置付けることができる。

SD50（第55図）

SD50は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.1m、幅0.5m、深さ0.06mを測る。断面は浅い皿状を呈し、出土遺物はない。Ⅱ区西及びⅡ区東で延長を確認することができない。



第52図 SD55～57平・断面図、出土遺物実測図



第53図 SD72平・断面図

SD62・63 (第55図)

SD62・63は、それぞれⅡ区南及びⅡ区東で検出された南北に伸びる溝で、一連の溝であると判断できるので、一対で考える。検出長5.7m (SD62が1.5m、SD63が1.7m)、幅0.8～0.9m、深さ0.04～0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、出土遺物はない。北端は削平により残存しなかった可能性が高い。なお、SB22の柱穴に切られており、これに先行する年代である。

SD64 (第55図)

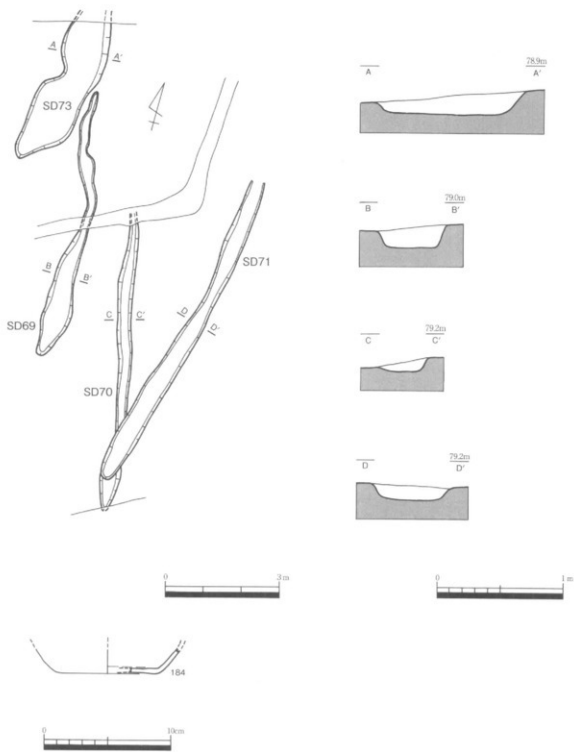
SD64は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.3m、幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面は浅い逆台形である。出土遺物はない。南端をSB22の柱穴に切られており、それ以上南には伸びない。また、Ⅱ区東で延長を確認することができない。

SD65 (第55図)

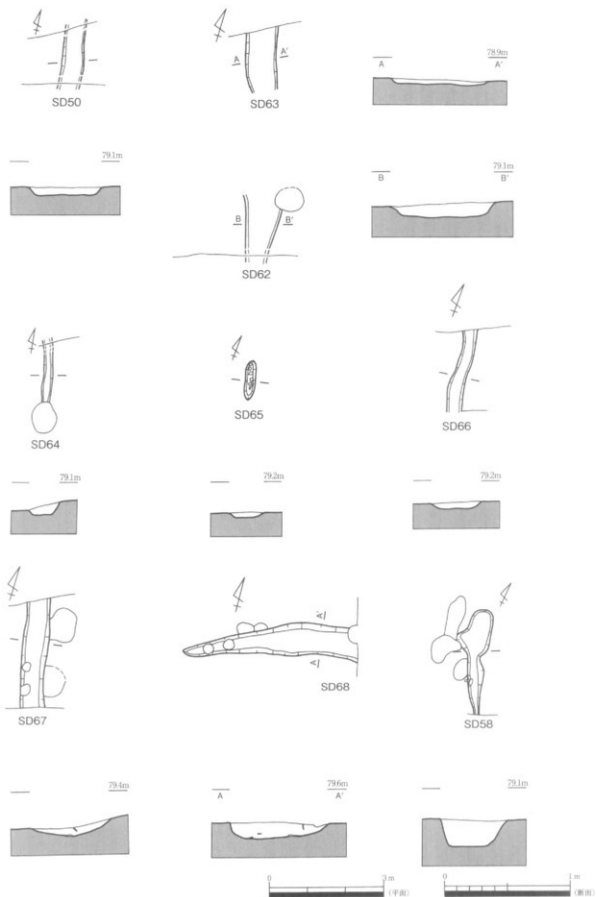
SD65は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.0m、幅0.3m、深さ0.04mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物はない。平面形は長楕円形を呈し、北へ伸びる可能性もないことから、上面の削平を想定する必要がある。

SD66 (第55図)

SD66は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.3m、幅0.3m、深さ0.04mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物はない。Ⅱ区東で延長を確認することができない。



第54图 SD69·70·71·73平·断面图、出土遺物实测图



第55図 SD50・58・62～68平・断面図

SD67 (第55・56図)

SD67は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.9m、幅0.6m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物は、土師器杯1点である。185は、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀に位置付けることができる。

Ⅱ区東で延長を確認することができない。

SD68 (第55・56図)

SD68は、Ⅱ区南で検出された東西に伸びる溝で、検出長4.7m、幅0.7m、深さ0.12mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物は、186～189の4点である。186は土師器杯で、ヘラ切りの底部から、少し外反気味に外上方に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。187は須恵器壺口縁部で、体部から外反気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部には平坦面をつくる。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。188は須恵器杯で、四角く外に張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。189は土師質甕で、砲弾型の体部に「く」の字に外反する口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張する。片桐Ⅰ-②～④で10世紀。以上のことから、埋没年代を10世紀に位置付けることができる。

位置的には、Ⅲ区西で検出されているSD74(西)につながる可能性が高い。

SD58 (第55図)

SD58は、Ⅱ区西で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.7m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、出土遺物はない。調査区内での延長を確認することができない。形状は、削平された溝の最深部のみと言った状況である。

SD74～77 (第57・58図)

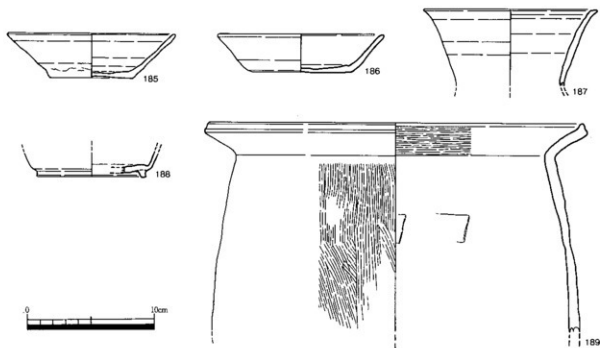
SD74～77は、いずれもⅢ区西で検出された溝で、SD74(西)・SD76が南北に、SD75・77が東西にそれぞれ伸びる。調査区北側は削平を受けており、一部の検出に止まっている事から性格は不明である。

規模は、SD74(西)が検出長2.5m、上面幅1.2m、深さ0.3m、SD74(東)が検出長3.7m、上面幅1.6m、深さ0.24m、SD75が検出長3.1m、上面幅1.8m、深さ0.2m、SD76が検出長5.3m、上面幅1.2m、深さ0.2m、SD77が検出長2.7m、上面幅0.8m、深さ0.16mを測る。

狭い範囲ではあるが、SD74(西)とSD74(東)は平行して伸びることから、一連のものとして理解すべきであると考えられる。

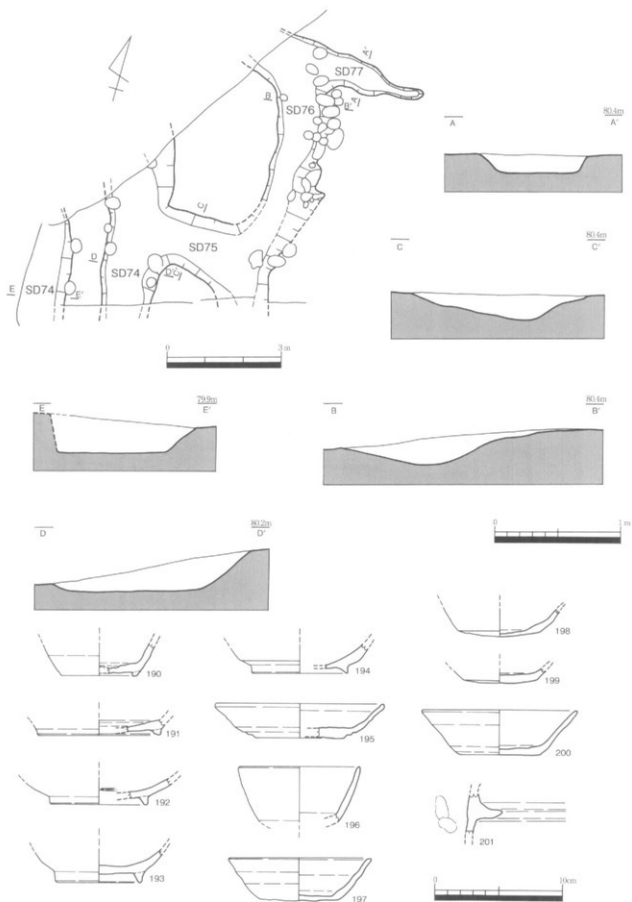
遺物は、SD74から190・204・206～214・216～217の26点、SD76から205、215の2点が出土している。

190は器壁が厚く、小形の須恵器杯と考えている。四角く低い高台を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。191は須恵器杯の高台部分で、逆台形の低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。192は黒色土師碗で、三角形の高台を持ち、内面にヘラミガキが見られる。12～13世紀頃か。193は土師器碗で、三角形の高台を

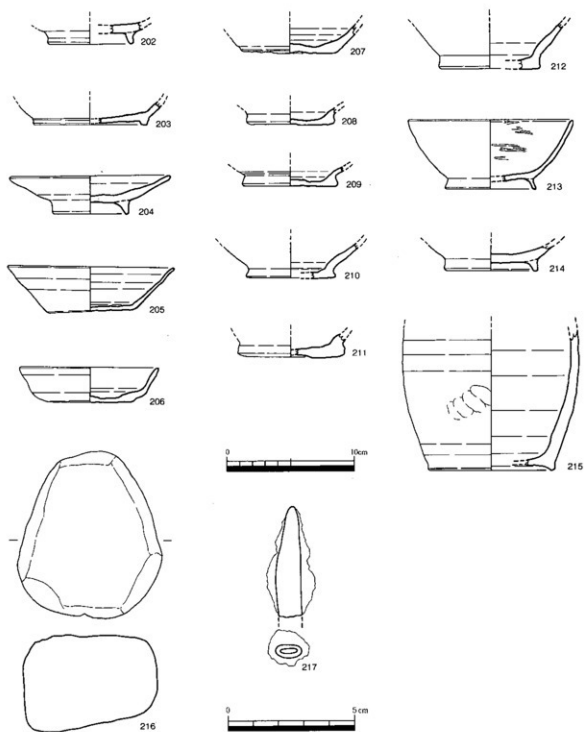


第56図 SD67・68出土遺物実測図

持つ。194は黒色土器碗で、三角形の高台を持つ。ヘラミガキは確認できない。12～13世紀頃か。195は土師器杯で、ヘラ切りの削り出し高台のような円板高台で、やや内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。196は須恵器杯である。体部はやや内湾気味に上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。197は土師器杯でヘラ切りの底部から直線的に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。198も土師器杯でヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。199も土師器杯で、ヘラ切り後ナデ調整を施した底部を持つ。200は土師器杯でヘラ切りの底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。201は土師質羽釜の鐔部分で、水平に伸び受け口状に上に収束する。古相を残す資料である。片桐Ⅰ-①～②で9世紀後半～10世紀前半。202は黒色土器碗で三角形の高台を持ち、見込み部分にヘラミガキが確認できる。12～13世紀頃か。203は須恵器杯で、ややかかと上がりの低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。204は土師器小型器台で、高い三角形の高台、やや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。片桐Ⅱ-⑥で12世紀後半。206・207は土師器杯で、ヘラ切りの底部から外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。208～212は土師器円盤状杯で、円板高台を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。209の底面はヘラ切りである。213は黒色土器碗で、板状の高台である。内面にはヘラミガキが確認できる。片桐Ⅱ-③で11世紀後半。214は土師器碗で、三角形の高台を持つ。216は歪な円柱形の石で、上面の角部分が丸みを帯びている。製品かどうかは不明である。217は鉄釘の先端部と考えられる。ただし、断面が四角くなく、他の製品を考えるべきかもしれない。



第57图 SD74~77平・断面图、SD74出土遗物实测图(1)

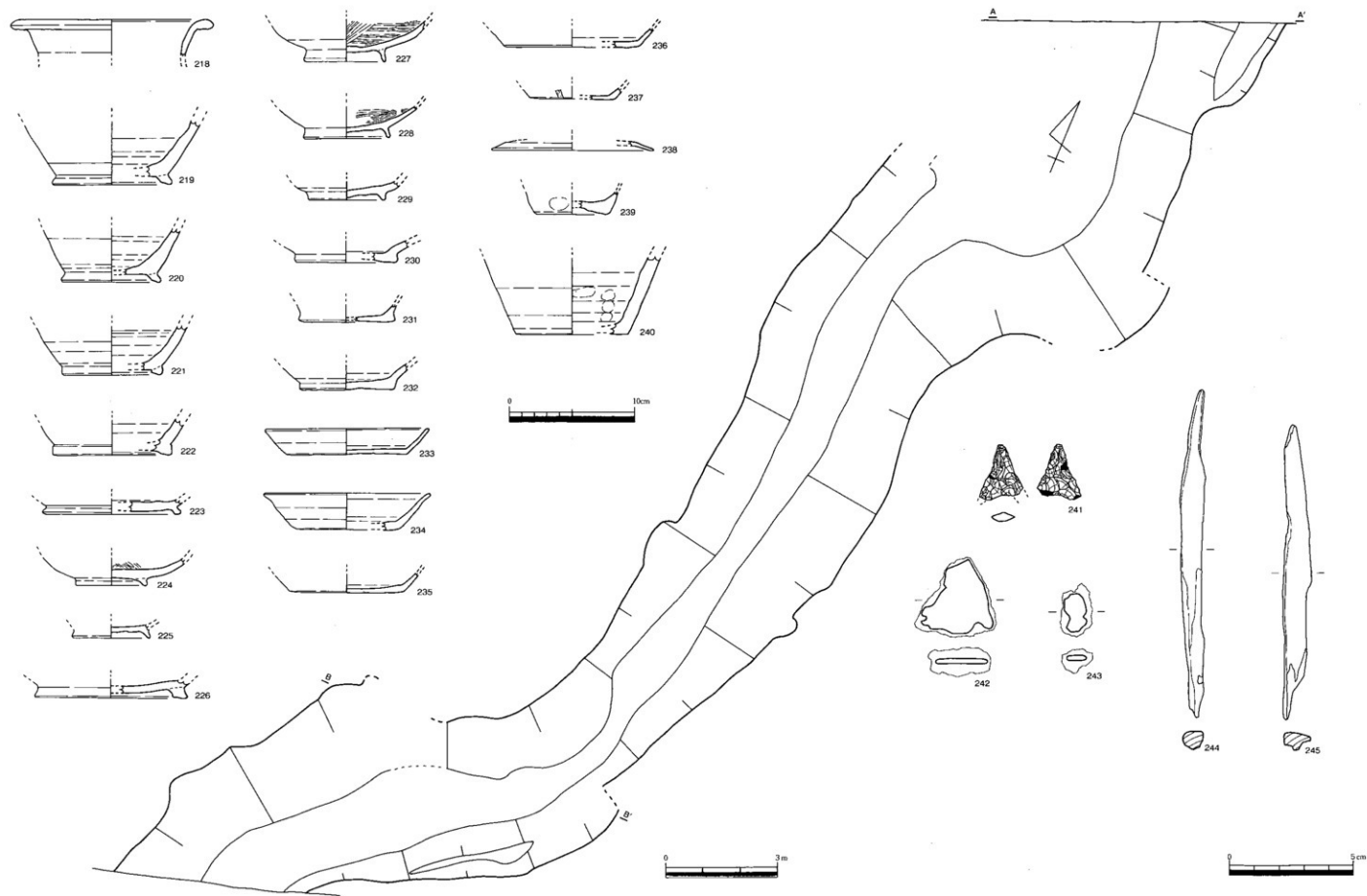


第58図 SD74 (2)・SD76出土遺物実測図

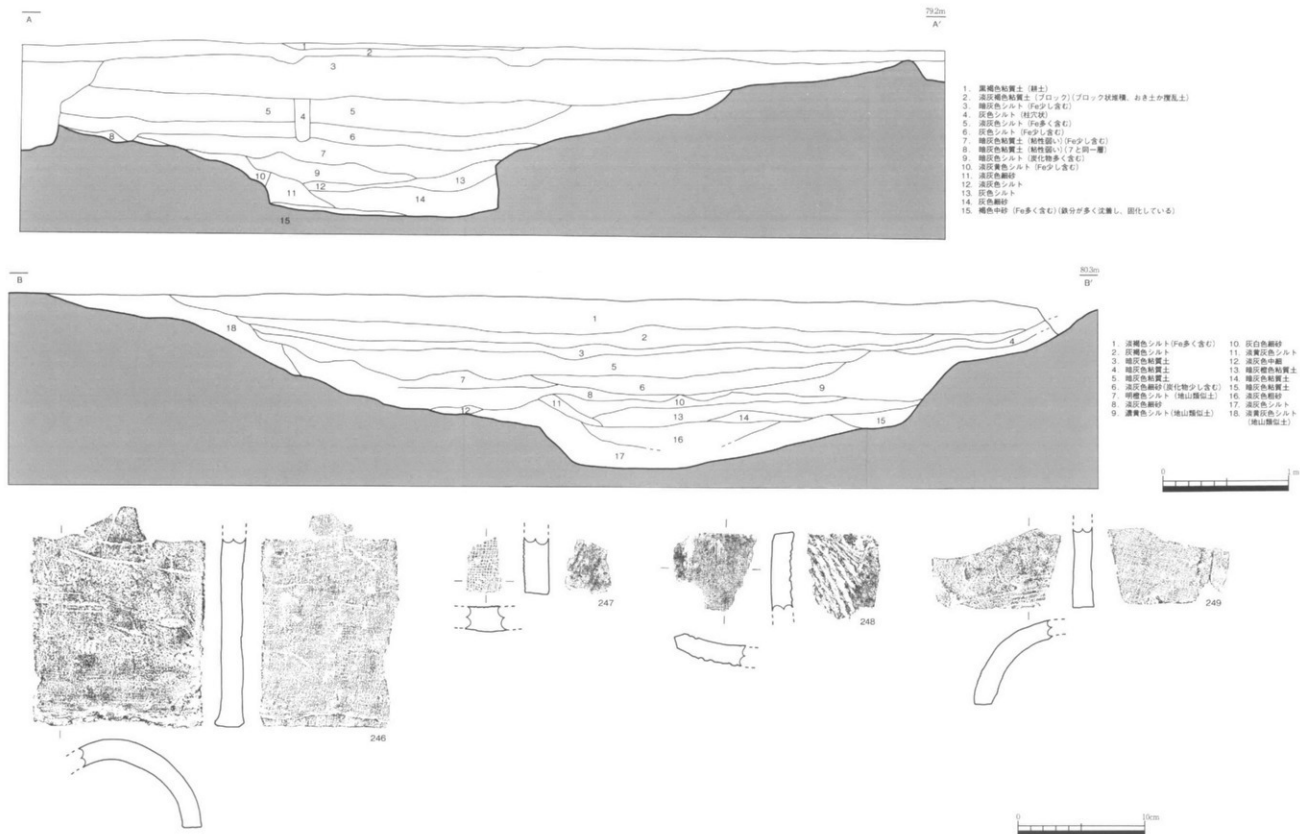
205は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ。器壁が薄い。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。215は須恵器壺で、低く外側に踏ん張る高台を持つ。体部はピア樽のような形である。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。

以上のことから、10世紀と13世紀の遺物に分けることができる。

出土遺物から見て、この一群の溝は、同時期に機能していたものと考えられ、北側・東



第59图 SD78平面图、出土遗物实测图(1)



第60図 SD78断面図、出土遺物実測図 (2)

側の状況からすれば、Ⅱ区南で検出されている掘立柱建物跡群の東を画する溝と考えられるが、集落を取り囲む溝であるなど具体的な機能は不明である。また、掘立柱建物跡群が廃絶後も一部機能が残り、中世集落の廃絶と同時期にははその機能を終えたことが分かる。

SD78 (第59～61図)

SD78は、Ⅲ区東で検出された大溝で、やや蛇行するが南北に伸びる。検出長34.5m、上面幅3.0～8.5m、深さ1.36mを測る。断面観察の結果、下層部分は東西からの流入土によって交互に堆積している様子が見られることから、自然埋没の状況を呈するものと考えられる。

遺物は、218～256の39点が出土している。

218は須恵器壺の口縁部で、大きく外反しながら伸び端部は肥厚して丸く終わる。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。219は須恵器壺の底部で、外側に踏ん張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。220は219と同形でやや小ぶりな壺である。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。221も219とほぼ同形であるが、高台が外側に踏ん張らず、ほぼ垂直である。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。222は221と同形である。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。223は須恵器杯で、外に踏ん張る形の高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。224は土師器椀で、三角形の高台を持ち、内面にはヘラミガキが見られる。225は土師器椀の高台で、板状の高台である。226は須恵器壺底部片で、外側に踏ん張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。227・228は黒色土器椀で、ほぼ垂直に下る高台を持ち、内面には井桁上のヘラミガキが見られる。12～13世紀頃カ。229は土師器椀で、三角形の高台を持つ。230はヘラ切りの円板高台を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。231は円板高台に近い平底の底部を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。232はヘラ切りの円板高台を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。233は須恵器皿で、底面はヘラ切りで、口径に対して器高は低い。佐藤1993Ⅱ-3で8世紀後半。234も土師器杯で、底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。235も土師器杯で、底面にはヘラ切りの痕跡が見られる。236は須恵器皿で、底面にはヘラ切りが確認できる。口縁部を欠損しており、あまり伸びないと判断して皿に分類した。8世紀中頃～9世紀中頃。237は須恵器杯底部片である。7世紀後半～9世紀後半頃。238は須恵器杯蓋で、扁平な天井部から下方に屈曲して端部に至る。端部は丸く終わる。つまみ部分は欠損している。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。239は土師器杯カ。やや上げ底気味の器壁の厚い器形で、極端に薄い器壁で外上方に立ち上がると思われる。240は須恵器壺底部である。平坦な底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～4で9世紀後半～10世紀後半。241は石鏃で、所謂「凹基式」に属する。小形で縄文時代のものと考えられる。242・243は鉄器片である。2点とも扁平な断面を持つが、製品は不明である。244・245は木片で、製品かどうか不明である。但し、先端部が尖っていることから人口品と考えている。246は丸瓦で、凸面に縄目の叩きが認められる。247は平瓦で、須恵質の焼きである。凸面に縄目の

叩きが、凹面に布目が観察できる。248も平瓦で、247同様である。249は丸瓦で、須恵質である以外は246同様である。250は磨製石斧の基部と考えられるもので、上下面とも人為的な研磨が行われていると思われるが、先端部が欠損しているため定かではない。251は石鏃で、片方の返しが欠損している。252はサヌカイトの剥片で、特に刃部調整は見られない。253は縁辺に細かな剥離が見られることから、特に調整を加えているわけではないが、使用痕と考えるとスクレイパーとした。254・255ともサヌカイトの剥片である。256は四角形をした板片で、上下は折られた痕跡がある。上面は平で、人為的な加工を考へるが、製品としては明確な位置付けはできない。

以上の資料から、10世紀と13世紀の2群に分けることができ、それぞれの時期に機能していたと考えられる。

SD79～83 (第62・63図)

SD79～83は、Ⅵ区で検出された溝で、調査前に所在していた建物や近世と考えられるSB30・31に伴わない。

SD79は、他の溝と方位が異なりやや東に振れ、南側が大きく膨らんでいる。検出長3.5m、上面幅0.5～2.2m、深さ0.16mを測る。

遺物は、257・258、261・262、264・265の6点がSD79から出土した。257は土師器杯の口縁部で、内外面とも回転ナデ調整である。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。258も土師器杯で、底部にヘラ切りの痕跡が見られる。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。261・262は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。264・265は円板高台の土師器円盤状高台杯で、265にはヘラ切りの痕跡が明瞭である。片桐Ⅱで11～13世紀。

以上の資料から14世紀頃に埋没した可能性が高い。

SD80は、検出長8.8m、上面幅0.5m、深さ0.16mを測る。

遺物は、263の1点がSD80から出土している。263は土師質小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に立ち上がる器形である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。

SD79同様、14世紀に埋没したと考える。

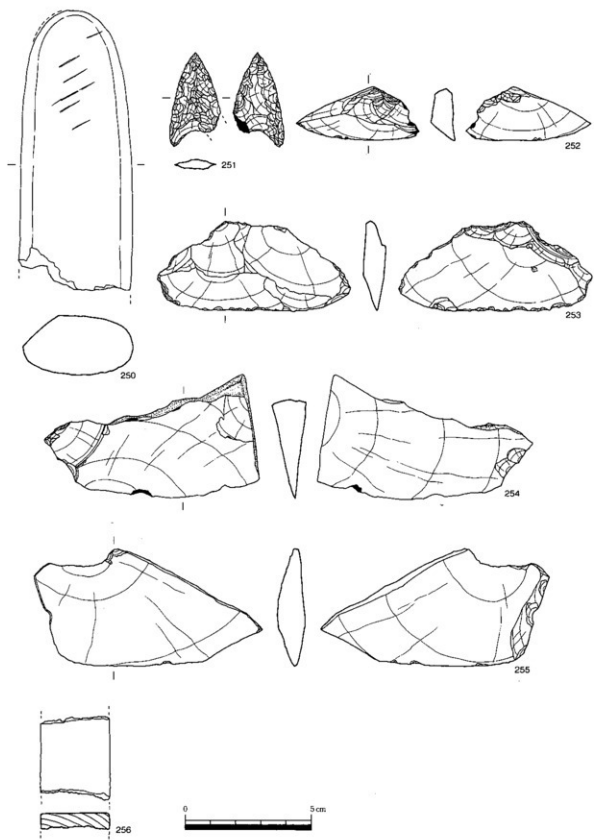
SD81は、検出長0.7m、上面幅0.1m、深さ0.06mを測る。

SD82は、検出長5.1m、上面幅0.4m、深さ0.16mを測る。

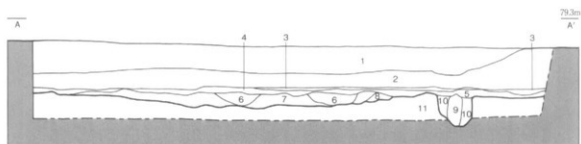
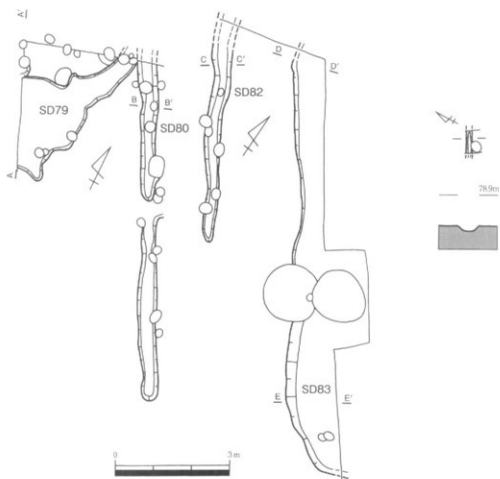
SD83は、検出長10.7m、上面幅0.7～1.3m、深さ0.2mを測る。

遺物は、259・260・266～268の5点がSD83から出土した。259は土師器杯で、内湾気味に外上方に伸び、端部が細く終わる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。260も土師器杯で底面にヘラ切りが認められる。口径に比べて器高が低く、皿に近い器形である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。266は土師器碗で、外に踏ん張る形の三角形の高台を持つ。267はサヌカイトの剥片で、二次調整は見られない。268は砥石である。

SD79・80同様に14世紀頃に埋没したと考えられる。



第61图 SD78出土物实测图(3)



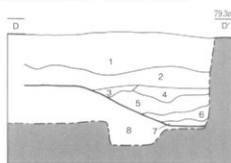
1. 遺成土
2. 雑灰色シルト (耕作土)
3. 淡灰色シルト (深土)
4. 暗褐色粘質土 (Fe多く含む、深土か)
5. 淡褐色粘質土 (Fe多く含む、深土か)
6. 黒灰色シルト (Mn・炭化物少し含む) (SD79埋土)
7. 雑灰色シルト (Mn・炭化物少し含む) (SD79埋土)
8. 淡灰色シルト (鉄土ブロック含む) (SD79埋土)
9. 黒灰色シルト (SP柱礎)
10. 雑灰色シルト (SP埋土)
11. 淡黄色シルト (埋山土)



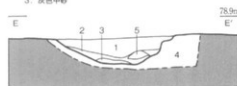
1. 雑灰色シルト (SD80埋土)
2. 黒灰色シルト (SP埋土)



1. 灰白色中砂 (SD82埋土)
2. 雑灰色粗砂 (Mn多く含む)
3. 灰色中砂



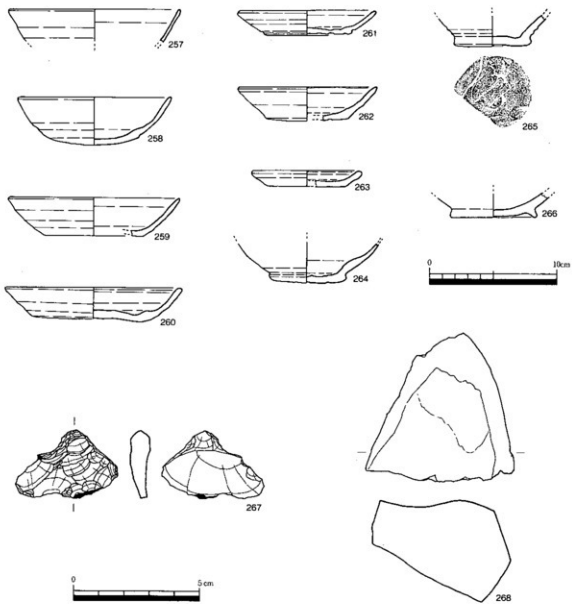
1. 遺成土、花崗土
2. 黒灰色シルト (耕作土)
3. 暗褐色粘質土中砂層 (SD83埋土)
4. 暗褐色粘質土中砂層 (SD83埋土)
5. 雑灰色シルト (Mn多く含む、SD83埋土)
6. 淡灰色中砂 (SD83埋土)
7. 雑灰色粗砂 (SD83埋土)
8. 淡黄褐色粘質土 (埋山)



1. 灰白色中砂
2. 雑灰色粗砂
3. 暗褐色粗砂 (Mn多く含む)
4. 暗褐色粘質土



第62図 SD79~83平・断面図



第63图 SD79・80・83出土遺物実測図

4 土坑

土坑は、柱穴よりも規模的に大きなものや性格が不明なものを含んで相対的に認識している。掲載している土坑中にも、溝状遺構に分類すべきものも含まれる可能性があるが、原則的には現地調査での判断を尊重している。ただし、明らかに掘立柱建物跡を構成する柱穴と判断したものは分類替えをしている。

第64図は、本遺跡の土坑分布略図である。この図のとおり、土坑はすべての調査区で検出されており、それぞれ時代や性格を異にしているが、ここでは遺物が出土しているものを中心に、特徴的な土坑を単体で取り上げて記述する。

SK01 (第65図)

SK01はI区西で検出された土坑で、検出長辺5.3m、短辺1.1m、深さ0.24mの隅丸長方形の本体東辺に長さ1.2m、上面幅0.2mの溝状の張り出しが認められる。この張り出しはSD05を切っている。断面は浅い皿状である。

出土遺物は269の土師器椀底部片のみである。

SK02 (第65図)

SK02はI区西で検出された土坑で、長辺0.88m、短辺0.54m、深さ0.1mの楕円形である。土坑中に石が認められ、断面は浅い皿状である。

SK03 (第65図)

SK03はI区西で検出された土坑で、長辺2.0m、短辺0.76m、深さ0.16mの楕円形を呈し、断面は浅い皿状である。

出土遺物は270～272の3点ある。270は黒色土器椀で、高台が外側に踏ん張っている。12～13世紀頃か。271は須恵器壺の底部で、全体的には円筒形である。272も須恵器壺の底部であるが、外上方に内湾気味に立ち上がる体部を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～4で9世紀後半～10世紀後半。270の資料から13世紀に位置付けておく。

SK04 (第65図)

SK04はI区西で検出された土坑で、長辺1.32m、短辺0.54m、深さ0.1mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

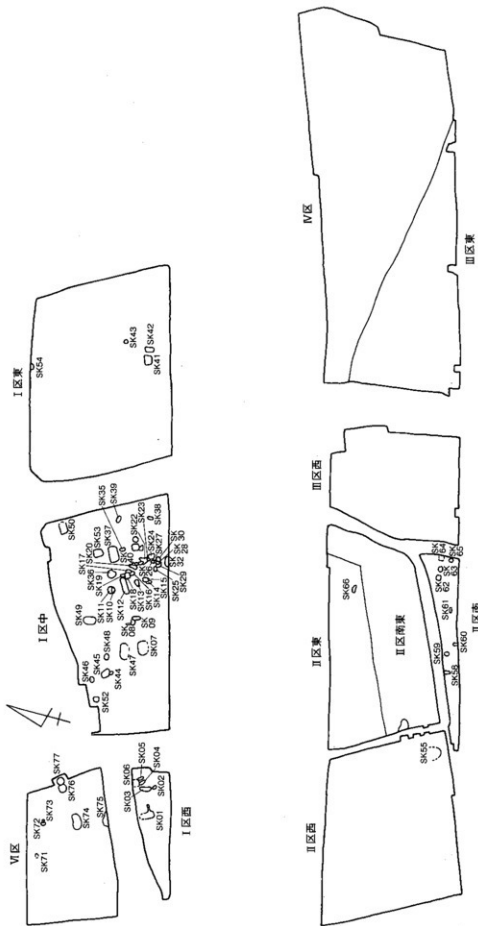
SK05 (第65図)

SK05はI区西で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.46m、深さ0.18mの楕円形を呈し断面は浅い逆台形である。

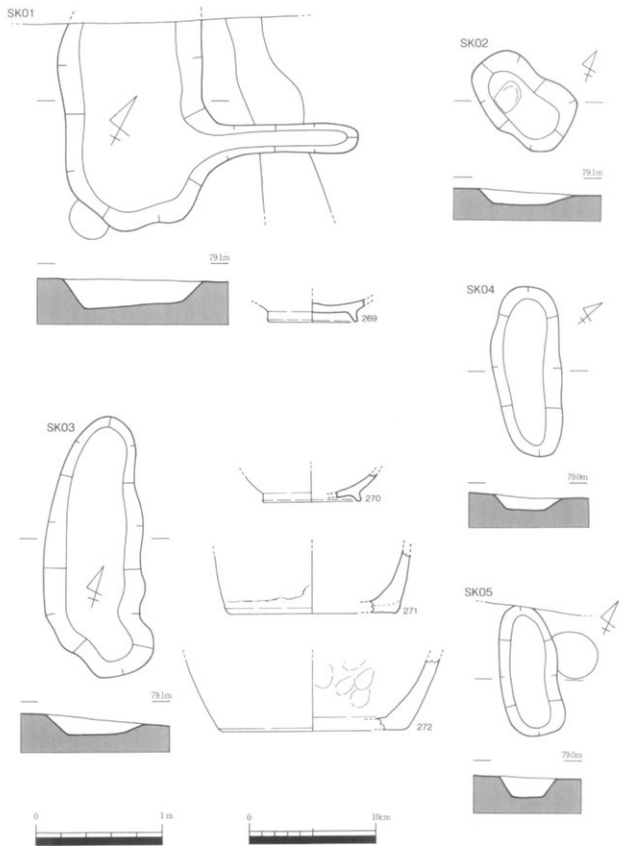
SK07 (第66図)

SK07はI区中央で検出された土坑で、長辺2.16m、検出短辺1.36m、深さ0.32mの隅丸方形を呈し、断面は逆台形である。

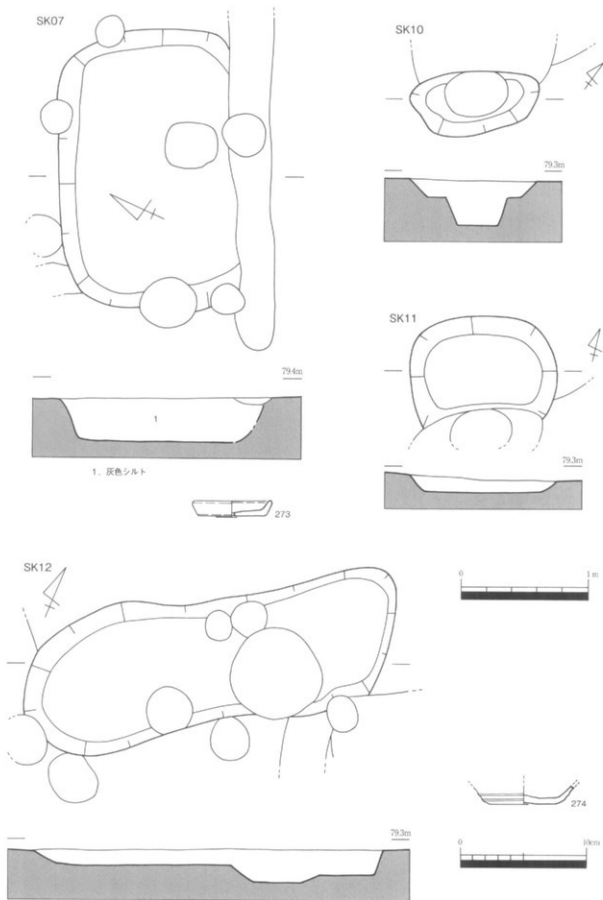
出土遺物は273の1点で、ヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。



第64图 土坑配置图



第65図 SK01～05平・断面図、出土遺物実測図



第66図 SK07・10～12平・断面図、出土遺物実測図

SK10 (第66図)

SK10はI区中央で検出された土坑で、長辺1.0m、短辺0.5m、深さ0.34mの楕円形を呈し断面は二段掘りの逆台形である。SK11・SD23を切っている。

SK11 (第66図)

SK11はI区中央で検出された土坑で、長辺1.16m、検出短辺0.74m、深さ0.14mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。SK10に切られており、SD23を切っている。

SK12 (第66図)

SK12はI区中央で検出された土坑で、長辺3.0m、短辺1.1m、深さ0.26mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は274の1点で、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。

SK13 (第67図)

SK13はI区中央で検出された土坑で、長辺1.3m、短辺0.88m、深さ0.5mの隅丸三角形を呈し断面は二段掘りの逆台形である。

出土遺物は275の1点で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀に位置付けることができる。

SK14 (第67図)

SK14はI区中央で検出された土坑で、長辺0.9m、短辺0.46m、深さ0.2mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

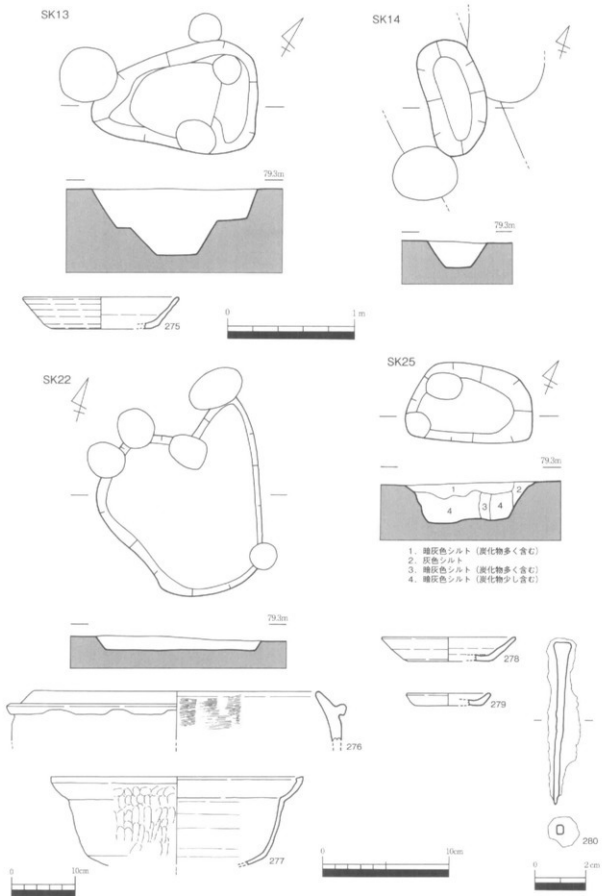
SK22 (第67図)

SK22はI区中央で検出された土坑で、長辺1.4m、短辺1.34m、深さ0.12mのいびつなハート形を呈し断面は浅い皿状である。

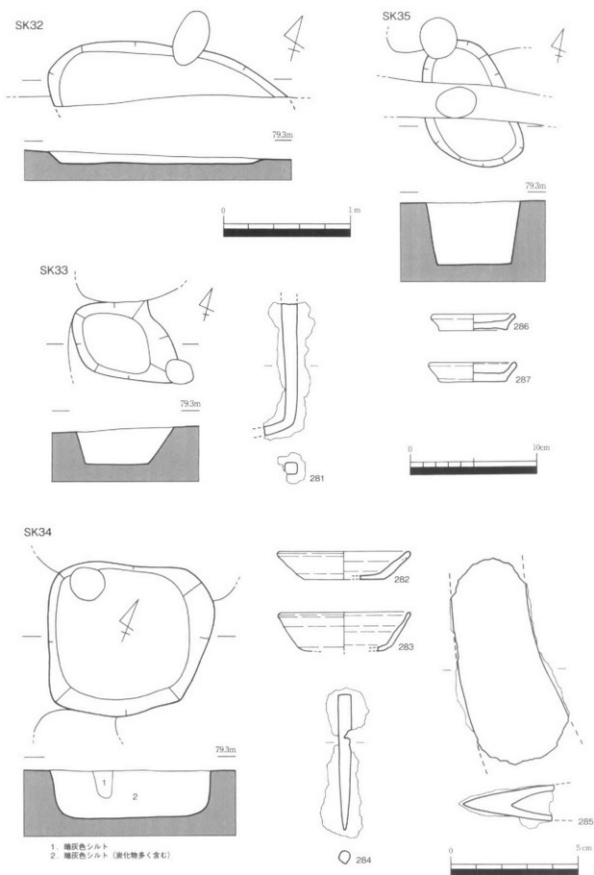
出土遺物は276～280の5点である。276は土師質羽釜で、半球状の体部に短い鈎がほぼ水平に伸びる。口縁部内側はハケ調整が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。277は土師質土鍋で、丸みを帯びた逆台形の体部から内湾気味に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は平坦面を作り出している。口縁部が受け口状になるため内面に明瞭な屈曲線を持つ。底部は格子叩きが顕著で、他は指ナデで調整されている。片桐Ⅱ-⑧～⑨で13世紀。278は土師器杯で、口径に比べて器高が低い。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。279は土師質小皿で、短く直線的に延びる口縁部を持つ。底部にはヘラ切りの痕跡が明瞭である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。280は鉄釘である。これまでの出土例よりも断面の厚みが薄い。以上の資料から14世紀に位置付けることができる。

SK25 (第67図)

SK25はI区中央で検出された土坑で、長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.3mの楕円形を呈し断面は逆台形である。埋土は5層からなり、ブロック状の堆積が見られるが、柱痕の痕跡とも考えられる縦方向の土層もあり、柱穴の可能性もある。ただし、埋土上面まで伸び



第67図 SK13・14・22・25平・断面図、出土遺物実測図



第68図 SK32～35平・断面図、出土遺物実測図

ず、柱穴の場合は柱を切り取り、後に最終埋没したことになり、遺構上面が削平を受けていることを考えると疑問を呈する状況である。

SK32 (第68図)

SK32はI区中央で検出された土坑で、長辺1.9m、検出短辺0.48m、深さ0.1mの南辺が調査区外に伸びるものの楕円形を呈するものと考えられる。なお、断面は浅い皿状である。

SK33 (第68図)

SK33はI区中央で検出された土坑で、長辺0.92m、短辺0.66m、深さ0.28mのややいびつな隅丸方形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は281の1点で、鉄釘と考えられる。先端部が「L」字状に曲がっている。

SK34 (第68図)

SK34はI区中央で検出された土坑で、長辺1.26m、短辺1.2m、深さ0.38mの隅丸方形を呈し断面は四角形である。

出土遺物は282～285の4点である。282は口径に比べて器高が低い土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。283はヘラ切りの底部からやや内湾気味に上方に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。284は鉄釘と考えられるが、断面が四角くなく、他の製品を考えるべきかもしれない。頭部は明確に確認できず、欠損している可能性が高い。285は鉄製鋤先の破片であるが、全体の大きさ等は不明である。282・283から14世紀に位置付けることができる。

SK35 (第68図)

SK35はI区中央で検出された土坑で、長辺1.02m、短辺0.7m、深さ0.47mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は286～287の2点である。286・287とも土師質小皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

SK37 (第69図)

SK37はI区中央で検出された土坑で、長辺2.84m、短辺1.6m、深さ0.7mの隅丸長方形を呈し断面は四角形である。底面に樹皮を敷き詰めた痕跡が認められた。

形状及び樹皮を敷き詰めた痕跡から考え、貯蔵施設として機能し、廃絶時に埋め戻されたものと考えられるが、埋土は複雑な様相を示す。底面の樹皮面に人為的に土を被せて面を作り、この後深さ2/3程度まで埋め戻し、再び自然埋没状態で埋まっている。大きくは上中下の3層ととらえることができる。この土層状態については明確な解釈を持ち合わせていない。今後の課題とする。

出土遺物は288～295の8点である。288はヘラ切りの底部から短く立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。289はヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世

紀第3四半期～14世紀前半。290も土師器杯であるが、器壁が289よりも厚く、やや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。291も土師器杯であるが、ヘラ切り?の底部から底径に対して大きく広がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。292は291と同形の土師器杯であろう。293は土師質土鍋の口縁部で、口縁端部を肥厚させ、口縁部内側に段を持つ。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。294は土師質羽釜で、直立した体部に水平方向に短く伸びる鑊を持つ。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。295は青磁碗の底部で、見込み部分にヘラ描で文様が見られる。13～14世紀カ。以上の資料から14世紀に位置付けるのが妥当であろう。

SK36 (第70図)

SK36はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺3.4m、短辺0.78m、深さ0.3mの楕円形を呈し断面は逆台形である。SD28から分岐した溝とも考えられるが、溝状遺構との接点に柱穴がかたまって存在するため、厳密には切りあい関係があるのかどうかは不明である。ここでは、単体の土坑と考えておく。

SK38 (第70図)

SK38はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.06m、短辺0.54m、深さ0.34mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は296の1点で、白磁碗の口縁部と考えられる。口縁端部外側を肥厚させて終わる。

SK39 (第70図)

SK39はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.66m、深さ0.08mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK40 (第70図)

SK40はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.48m、深さ0.58mの楕円形を呈し断面は四角形である。

出土遺物は297の1点で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

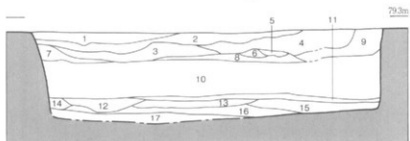
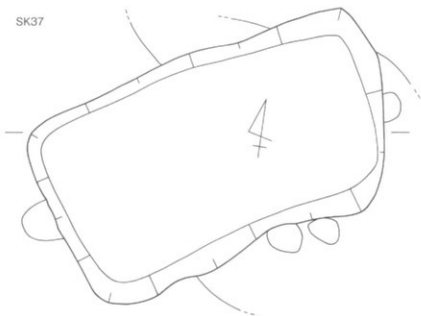
SK44 (第70図)

SK44はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺0.9m、短辺0.64m、深さ0.14mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

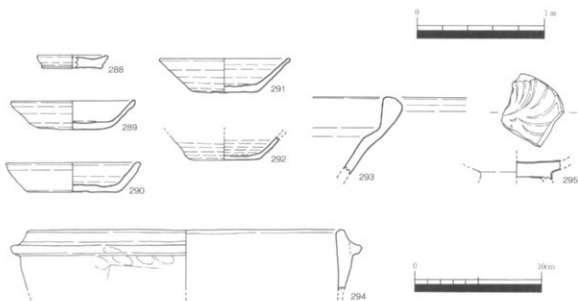
SK45 (第71図)

SK45はⅠ区中央で検出された南北主軸の長辺1.56m、短辺1.0m、深さ0.1mの土坑墓で中世集落の西辺溝外方に単独で営まれる。遺骸は残存していないが短刀(298)1口を副葬する。全体を錆で覆われており、X線写真から見て、全長30cm、刃部長25cm、最大幅2.6cm、厚み0.6cmを測る。

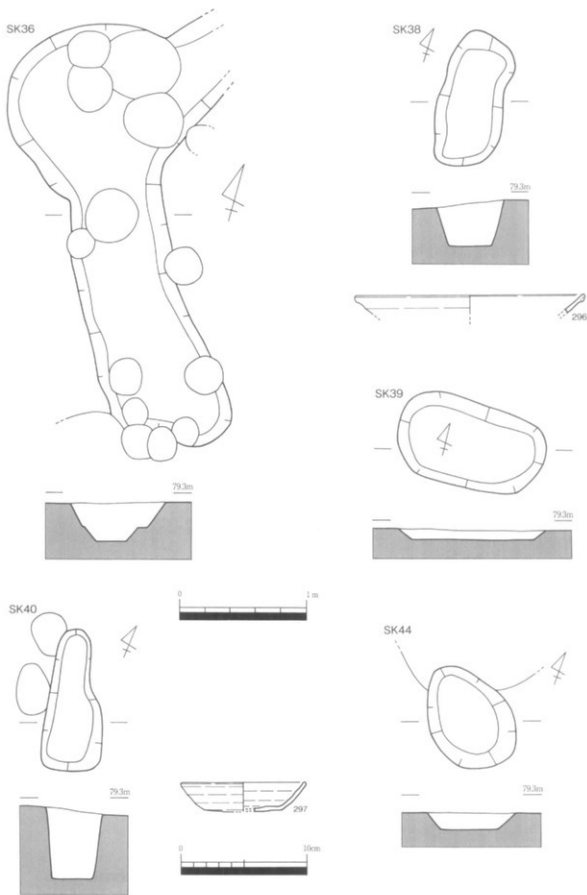
SK37



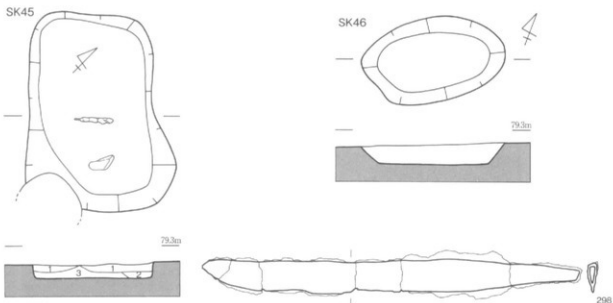
- | | | |
|---------------------|---------------------|----------------|
| 1. 灰色シルト (Mn少し含む) | 7. 灰色シルト (地上ブロック混入) | 13. 暗灰色シルトブロック |
| 2. 暗灰色シルト (Mn少し含む) | 8. 明灰色粘質土 | 14. 淡灰色シルトブロック |
| 3. 灰色シルト (炭化物少し含む) | 9. 淡色シルト (Mn少し含む) | 15. 灰色シルト |
| 4. 暗灰色シルト (炭化物多く含む) | 10. 淡褐色シルトブロック | 16. 淡灰色粘質土ブロック |
| 5. 暗灰色粘砂 (炭化物多く含む) | 11. 淡褐色粘質土 | 17. 淡灰色シルト |
| 6. 灰色シルト | 12. 濃褐色粘質土 | |



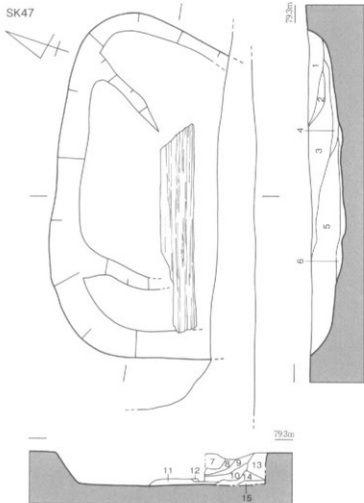
第69図 SK37平・断面図、出土遺物実測図



第70図 SK36・38～40・44平・断面図、出土遺物実測図



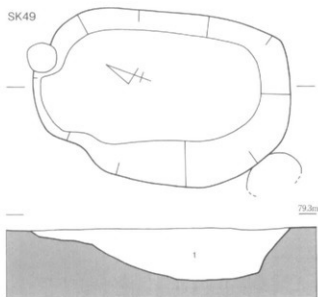
1. 淡灰色シルト
2. 淡黄色粘質土
3. 緑灰色シルト



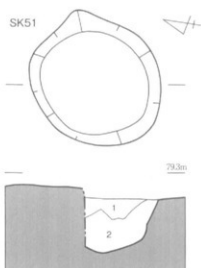
1. 淡灰褐色シルト (Fe多く含む)
2. 明黄色粘質土
3. 灰褐色シルト
4. 緑灰色シルト
5. 灰色シルト
6. 明黄色粘質土 (Fe多く含む)
7. 淡灰褐色シルト (Fe多く含む)
8. 緑灰色シルト
9. 緑灰色シルト (Fe多く含む)
10. 灰褐色シルト (Fe少し含む)
11. 緑灰色シルト
12. 緑灰色シルト (木質異質)
13. 淡黄色シルト
14. 淡褐色シルト (Fe少し含む)
15. 緑灰色シルト



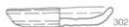
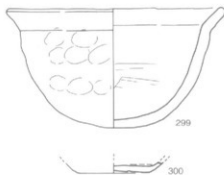
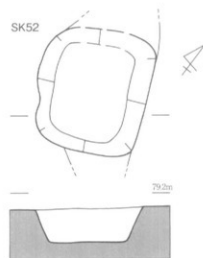
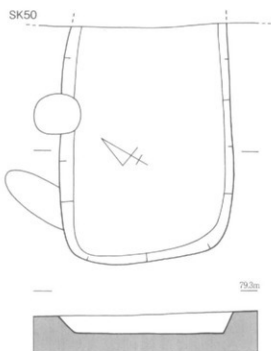
第71図 SK45~47平・断面図、出土遺物実測図



1. 雑灰色シルト (炭化物多く含む)



1. 黄褐色粘質土
2. 雑灰色シルト (炭化物多く含む)



第72図 SK49～52平・断面図、出土遺物実測図

SK46 (第71図)

SK46はI区中央で検出された土坑で、長辺1.14m、短辺0.66m、深さ0.16mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK47 (第71図)

SK47はI区中央で検出された土坑で、長辺2.7m、検出短辺1.26m、深さ0.26mを測る隅丸長方形の土坑で、南辺をSD13に切られている。床面には板材を敷き詰めた痕跡が認められた。埋土は西から東への流入土が顕著で、貯蔵施設として使用された後、自然埋没したものと考えられる。

SK49 (第72図)

SK49はI区中央で検出された土坑で、長辺2.04m、短辺1.34m、深さ0.4mの楕円形を呈し断面は片側が深くなる船底状である。

SK50 (第72図)

SK50はI区中央で検出された土坑で、検出長辺1.86m、短辺1.38m、深さ0.16mの四角形を呈し断面は浅い皿状である。

SK51 (第72図)

SK51はI区中央で検出された土坑で、径1.0m、深さ0.42mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK52 (第72図)

SK52はI区中央で検出された土坑で、長辺0.98m、短辺0.88m、深さ0.26mの方形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は299～302の4点である。299は土師質土鍋で、半球状の体部に、短く屈曲する口縁部を持つ。300はヘラ切りの底面を持つ土師器杯である。301はヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000 II-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。302も土師質小皿である。ヘラ切りの底面から丸みを持って短く立ち上がる。佐藤2000 II-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

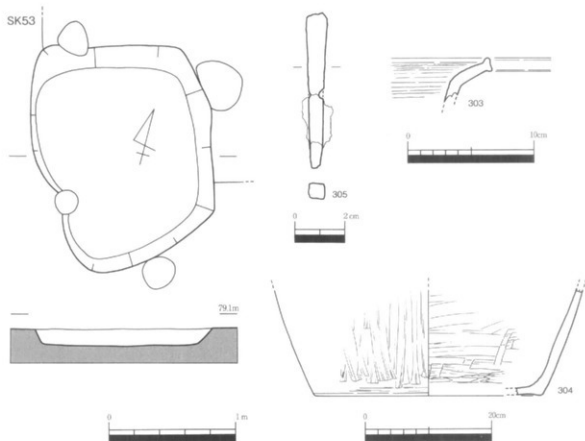
SK53 (第73図)

SK53はI区中央で検出された土坑で、長辺1.8m、短辺1.44m、深さ0.14mのいびつな方形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は303～305の3点である。303は土師質甕の口縁部片で、外反する口縁部の端面を強く横ナデし、上下に拡張した状況になっている。内面はハケ調整を施している。片桐II-①で11世紀前半。304は備前焼甕底部片と考えられ、ヘラ削りが見られる底面から直線的に外上方の延びる体部を持つ。305は鉄釘の先端部で、断面は四角である。頭部は欠損していると考えられる。

SK41 (第74図)

SK41はI区東で検出された土坑で、長辺1.64m、短辺1.3m、深さ0.28mの隅丸方形を呈し断面は浅い皿状である。



第73図 SK53平・断面図、出土遺物実測図

SK42 (第74図)

SK42はⅠ区東で検出された土坑で、長辺1.52m、短辺0.98m、深さ0.06mの隅丸方形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は3061点で、板目痕を残す底面から短く立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ-3~5で13世紀第2四半期~14世紀前半に位置付けることができる。

SK43 (第74図)

SK43はⅠ区東で検出された土坑で、長辺0.86m、短辺0.76m、深さ0.18mの隅丸三角形を呈し断面は逆台形である。

SK54 (第74図)

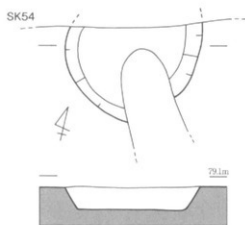
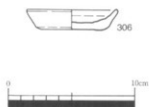
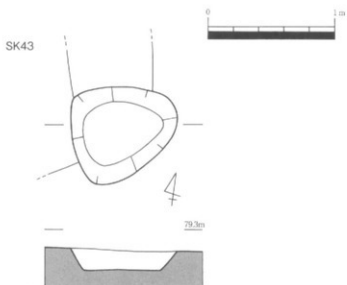
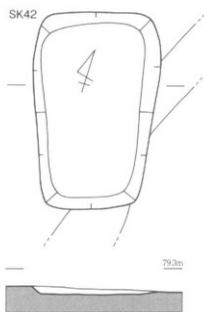
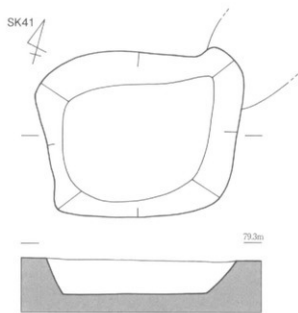
SK54はⅠ区東で検出された土坑で、北側が調査区外に伸びているが、現状では径1.06m、深さ0.16mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK56 (第75図)

SK56はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺1.96m、短辺1.64m、深さ0.1mの不定形を呈し断面は浅い皿状である。

SK58 (第75図)

SK58はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺0.88m、短辺0.58m、深さ0.1mの三角形



第74図 SK41～43・54平・断面図、出土遺物実測図

を呈し断面は浅い皿状である。北側は調査区外に伸びる。

SK59 (第75図)

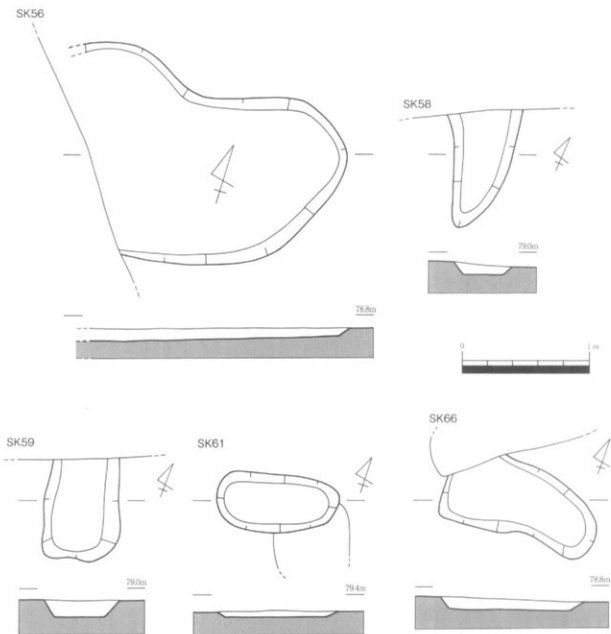
SK59はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.12mの四角形を呈し断面は浅い皿状である。北側は調査区外に伸びる。

SK61 (第75図)

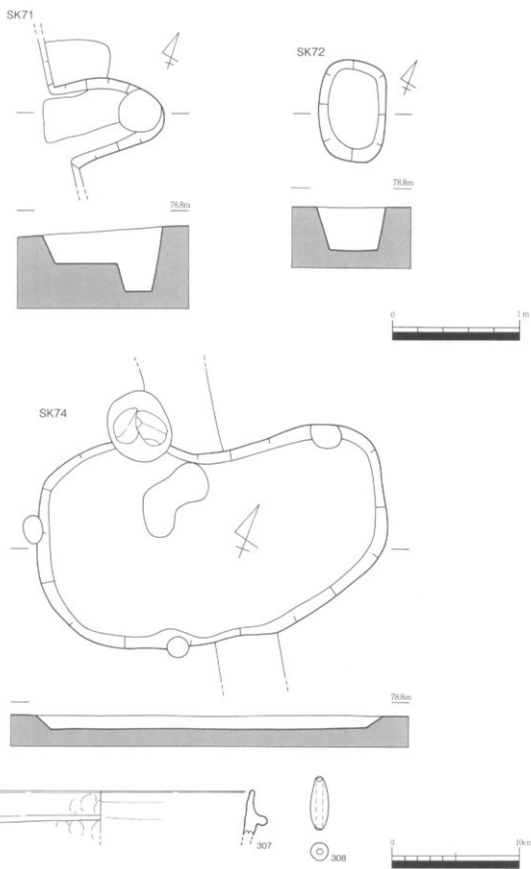
SK61はⅡ区南で検出された土坑で、長辺0.96m、短辺0.46m、深さ0.05mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK66 (第75図)

SK66はⅡ区南で検出された土坑で、長辺1.26m、短辺0.62m、深さ0.1mの不定形を呈し断面は浅い皿状である。

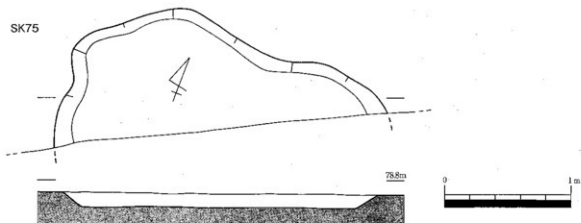


第75図 SK56・58・59・61・66平・断面図

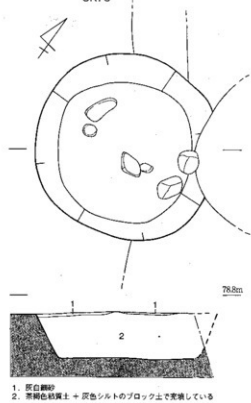


第76図 SK71・72・74平・断面図、出土遺物実測図

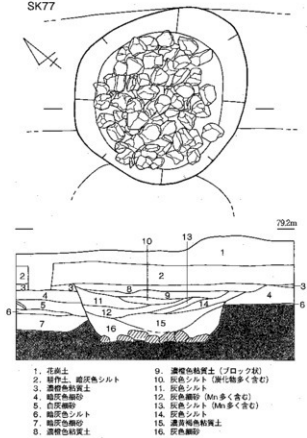
SK75



SK76



SK77



第77図 SK75～77平・断面図、出土遺物実測図

SK71 (第76図)

SK71はⅥ区で検出された土坑で、検出長辺0.8m、短辺0.66m、深さ0.24～0.48mの不定形を呈し断面は二段掘りである。

SK72 (第76図)

SK72はⅥ区で検出された土坑で、長辺0.8m、短辺0.52m、深さ0.32mの隅丸方形を呈し断面は逆台形である。

SK74 (第76図)

SK74はⅥ区で検出された土坑で、長辺2.7m、短辺1.6m、深さ0.1mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は307と308の2点である。307は土師質羽釜で、外傾する体部に短い鈎を持つ。時期不明。308は紡錘形の土鍾である。

SK75 (第77図)

SK75はⅥ区で検出された土坑で、南辺が調査区外に伸びるため、長辺2.6m、検出短辺1.0m、深さ0.12mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK76 (第77図)

SK76はⅥ区で検出された土坑で、径1.5m、深さ0.36mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK77 (第77図)

SK77はⅥ区で検出された土坑で、径1.4m、深さ0.46mの円形を呈し断面は逆台形である。Pit底には拳大の円礫が敷き詰められている。埋土は周辺からの土砂の流入を物語るものであり、自然埋没の状況であると考えられる。

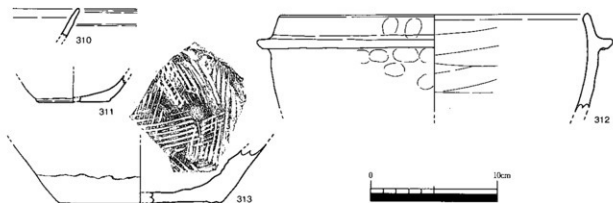
309は土師質焙烙である。浅い皿状の体部に肥厚した口縁端部を持つ。内底部分に板ナデが見られるほか、指押さえが顕著である。近世の所産であると考えられる。

5 包含層

包含層出土の資料は、その地区の遺構の年代とほぼ同様の年代を与えることができる。このことは、本遺跡の遺構群が、小規模な開折谷を挟んだ小丘陵を単位として構成されているため、それぞれの遺構群が南北方向に伸びることが確認される。このことから、南側に広がる同時期の遺跡に伴う資料が、後世包含層資料として堆積したものと考えられる。

① I区西包含層 (第78図)

310は青磁椀口縁部片で、外面に沈線が1条見られる。13～14世紀カ。311は土師器杯底部で、ヘラ切り底である。312は土師質羽釜で、半球状の体部から水平で短い鈎がある。片桐皿-①～⑦で14世紀～16世紀前半。313は備前焼? 播鉢で、内側底面の卸し目は「×」、側面にも卸し目が見られる。



第78図 I区西包含層出土遺物実測図

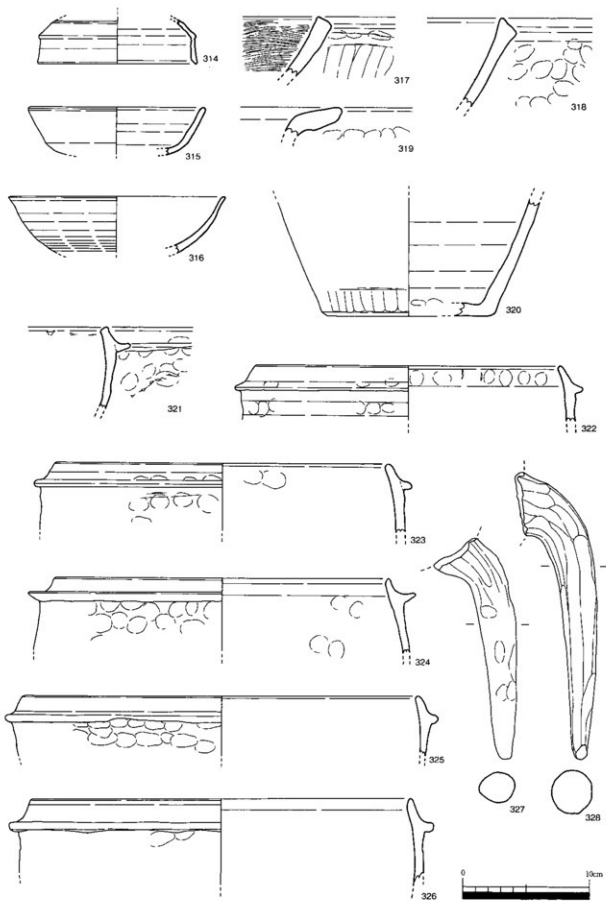
② I区中包含層 (第79・80図)

中性集落跡がまとまって検出された調査区である。

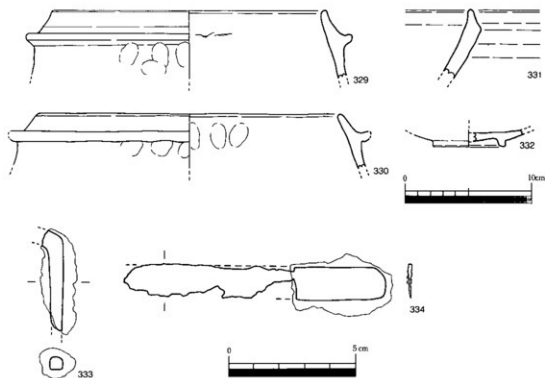
314は須恵器杯蓋で、TK47に比定され、5世紀後半。315は須恵器杯で、口縁部は直線的に伸び、端部丸い。佐藤1993 I-2で7世紀後半。316は須恵器杯で、体部は碗形で部分的に緑釉が見られる。317は須恵質こね鉢の口縁部片で、時期は不明である。318は須恵質こね鉢口縁部片で、片桐Ⅲ-⑥～⑦に比定され、15世紀後半～16世紀前半である。319は、土師質土鍋口縁部片で、時期は不明である。320は須恵器壺底部で、直線的に立ち上がる体部から佐藤1993Ⅲ-1～4、9世紀後半～10世紀後半と考えられる。321は土師質羽釜口縁部片で、鐔は水平で細くなる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。322は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短くやや下がりが気味に付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。323は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短く水平である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。324は土師質羽釜口縁部片で、鐔はやや上向きに付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。325は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短い。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。326は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短く水平に付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。327・328は、土師質土鍋もしくは羽釜の脚である。329は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短い。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。330は土師質羽釜口縁部片で、鐔はやや上向きに付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。331は土師質こね鉢口縁部で、片口端部を上方に拡張する。片桐Ⅲ-⑤～⑥で15世紀。332は陶器碗もしくは皿で、内外面に施釉が見られる。333は鉄釘片で、先端部・頭部が欠損している。頭部側で「L」字に屈曲させている。334は鉄刀子と考えられる資料であるが、錆と剥落により原形をとどめていない。

③ I区東包含層 (第81図)

335は土師質小皿で、底部ヘラ切り、口縁部は短く立ち上がる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。336は白磁碗である。337は土師質羽釜口縁部片で、鐔は短く断面三角形である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。



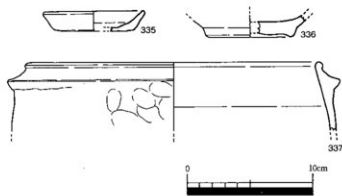
第79图 I区中包含层出土物实测图(1)



第80図 I区中包含層出土遺物実測図(2)

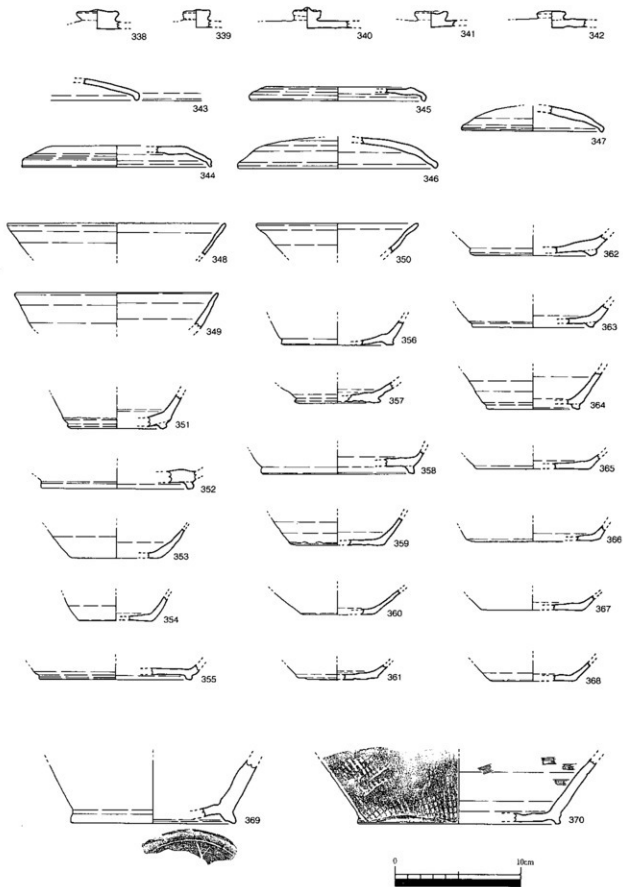
④ II区西包含層(第82~85図)

338は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。339は須恵器杯蓋摘みで、ボタン状を呈している。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。340は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。341は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。342は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。343は須恵器杯蓋で、端部を下方に拡張している。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。344・345は須恵器杯蓋で、天井部は平坦、端部を下方に拡張している。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。346・347は須

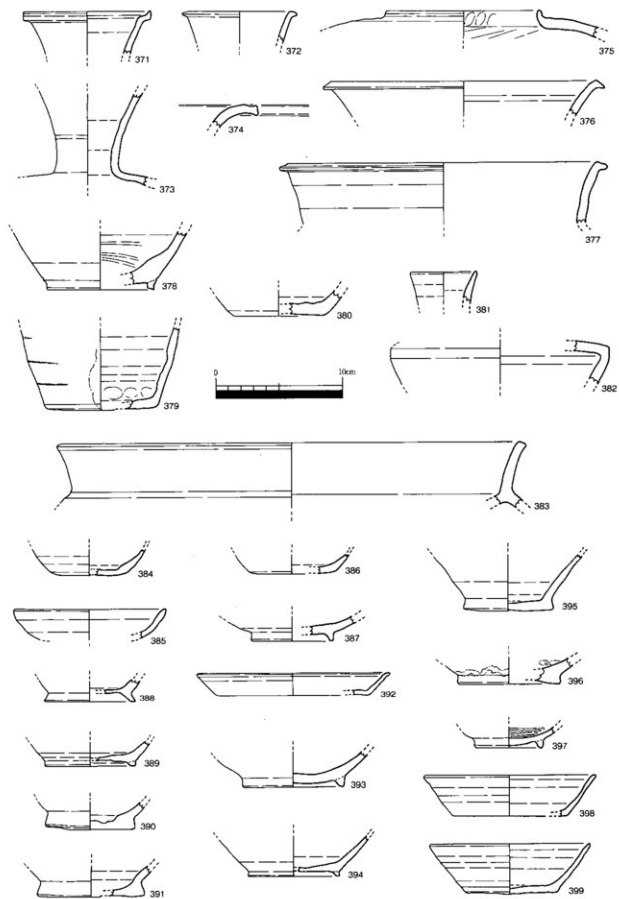


第81図 I区東包含層出土遺物実測図

恵器杯蓋で、天井部からなだらかに下降し端部は丸く終わる。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。348は須恵器杯で、体部は直線的に伸び端部は丸く終わる。7世紀後半~9世紀後半頃。349は須恵器杯で、体部は直線的に伸び、少し外反して端部は細く終わる。7世紀



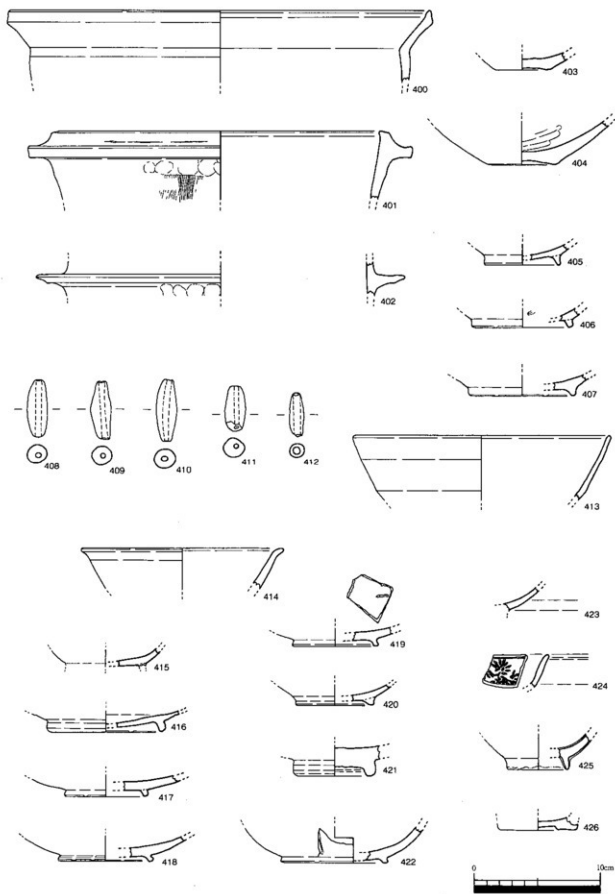
第82图 II区西包含层出土物实测图(1)



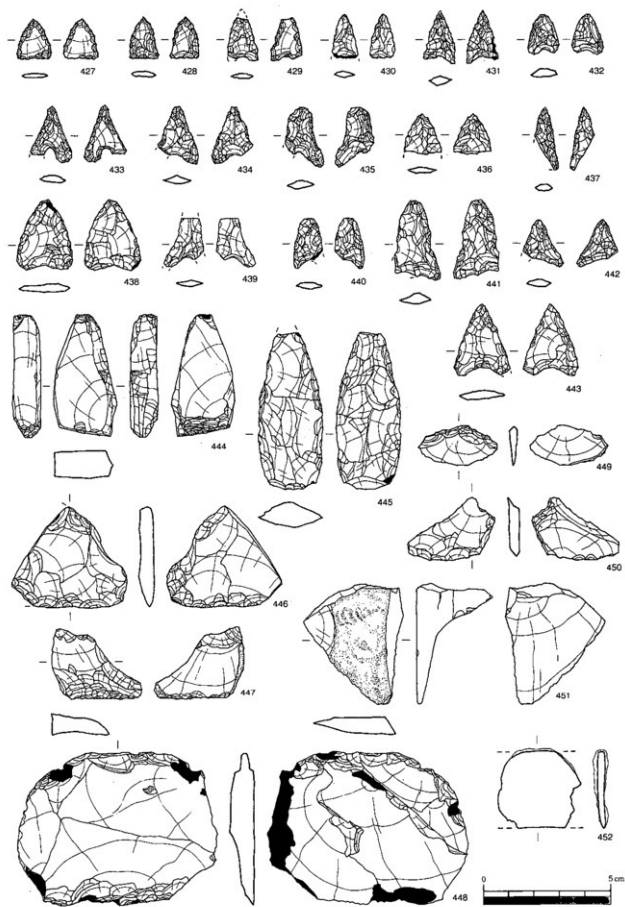
第83图 II区西包含层出土物实测图(2)

後半～9世紀後半頃。350は須恵器杯で、体部は直線的に伸び端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。351は須恵器杯底部片で、高台は丸く、外側に踏ん張る。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。352は須恵器杯底部片で、高台は四角く垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。353・354は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から内湾気味に上方に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。355は須恵器杯底部片で、高台は四角く垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。356は須恵器杯底部片で、高台は四角く、若干外に踏ん張る。かかと上がりである。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。357は須恵器杯底部片で、ヘラ切りの円板高台である。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。358は須恵器杯底部片で、高台は四角く、若干外に踏ん張る。体部は内湾気味に立ち上がる。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。359は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。360は須恵器杯底部片で、体部は直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。361は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。362は須恵器杯底部片で、高台は逆台形を呈し垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。363は須恵器杯底部片で、高台は逆台形を呈し垂直に降下する。高台は低い。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。364は須恵器杯底部片で、高台は四角く、垂直に降下する。かかと上がりである。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。365は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。366は須恵器杯底部片で、体部は平坦な底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。367・368は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。369は須恵器壺底部片で、高台は四角く、外側に踏ん張る。かかと上がりである。底面にヘラ記号「×」？が見られる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。370は須恵器壺底部片で、高台は四角く、外側に踏ん張る。外面には格子状叩きが見られる。9世紀代カ。371は須恵器壺口縁部片で、体部から直線的に立ち上がった後、水平に短く伸び、端部は上方に拡張する。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。372は須恵器壺口縁部片で、口縁端部外面側を拡張する。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。373は須恵器壺頸部片で、頸部中位より下に形骸化した沈線が見られる。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。374は須恵器壺口縁部片で、口縁端部は四角く作る。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。375は須恵器短頸壺口縁部片で、垂直に短く伸び、口縁部を形成する。時期は不明。376は須恵器壺口縁部片で、外反気味に立ち上がり、外面側端部を拡張する。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。377は須恵器壺口縁部片で、体部からやや外反気味に立ち上がり、外面側端部を拡張する。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。378は須恵器壺底部片で、四角く垂直に降下する高台を持つ。体部は内湾気味に立ち上がる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。379・380は須恵器壺底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。佐藤1993Ⅲ-1～4で9世紀後半～10世紀後半。381は須恵器平瓶

口縁部片で、短く外反気味に立ち上がる。9世紀頃カ。382は須恵器平瓶体部片で、底部から直線的に立ち上がった後、直角に近く屈曲する体部を持つ。9世紀頃カ。383は土師質の土器で、器種は不明である。384は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。385は土師器杯で、体部は内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げられる。386は土師器杯で、内湾気味に立ち上がる体部を持つ。佐藤2000 II-3~4で13世紀第2~4四半期。387は土師器碗で、三角形の高台が垂直に降下する。388は土師器碗で、四角形の高い高台が外側に踏ん張る。体部が直線的に伸びる様相が見られる。389は土師器碗で、四角形の高台が少し外側に踏ん張る。390・391は土師器円盤状高台杯である。片桐IIで11~13世紀。392は土師器皿で、口縁部は底部から直線的に立ち上がる。平城VI~VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。393は土師器碗で、三角形の高台が少し外側に踏ん張る。394は土師器碗で、四角形の高台が少し外側に踏ん張る。395は土師器円盤状高台杯である。396も同様な器形を持つ。片桐IIで11~13世紀。397は須恵器杯で、三角形の高台が垂直に降下する。佐藤1993 III-1~3で9世紀後半~10世紀中頃。398は須恵器杯で、外面から判断して生焼け状態の資料であると考えている。佐藤1993 III-1で9世紀後半。399は須恵器杯で、体部はヘラ切りの底部からほぼ直線的に立ち上がる。佐藤1993 III-1で9世紀後半。400は土師質甕で、体部は半球状、外反して短く伸びる口縁部を持つ。端部は上端を拡張している。片桐I-②~④で10世紀。401は土師質羽釜で、直線的に開く口縁部を持ち、四角く水平に伸びる鋳を持つ。体部外面はハケ調整である。片桐I-②で10世紀前半。402は土師質羽釜で、鋳部分のみの出土である。鋳は水平に伸び先端が細く終わる。片桐I-①~②で9世紀後半~10世紀前半。403・404はやや上げ底の底部で、色調・胎土・形態から縄文時代晩期の深鉢底部と考えられる。405は黒色土器碗の底部で、垂直に下りる三角形の高台を持つ。12~13世紀頃カ。406は黒色土器碗の底部で、垂直に下りる四角形の高台を持つ。12~13世紀頃カ。407は黒色土器碗の底部で、垂直に下りる三角形の高台を持つが、405に比べて高台が低い。12~13世紀頃カ。408~412は紡錘形の土錘である。413は黒色土器碗の口縁部で、内湾気味に開く口縁部を持つ。12~13世紀頃カ。414は緑釉碗の口縁部で、直線的に開いた後、端部を外傾させて終わる。415は緑釉碗の底部である。416は緑釉碗の底部で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。417は緑釉碗の底部で、垂直に下りる低い高台を持つ。418~420は緑釉碗の底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。421は緑釉碗の底部で、垂直に下りる厚くしっかりした高台を持つ。422は緑釉碗の底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。体部は内湾気味に外上方に伸びる。423は緑釉碗の体部片である。424は肥前染付皿の口縁部で、型絵を用いていることから、明治時代以降のものと考えられる。425は青磁碗の底部で、三角形の高い高台を持つ。13~14世紀カ。426は白磁碗の底部で、四角く幅広の削り出し高台を持つ。新しいカ。427~443は石鏝である。形態的に正三角形や二等辺三角形、平基式や凹基式など多様なものを含む。比較的小形の石鏝が多く、この点に注目すれば縄文時代の範囲内で考えうる資料である。444は彫器と考えられる資料で、片側側面に細い



第84图 II区西包含层出土文物实测图(3)

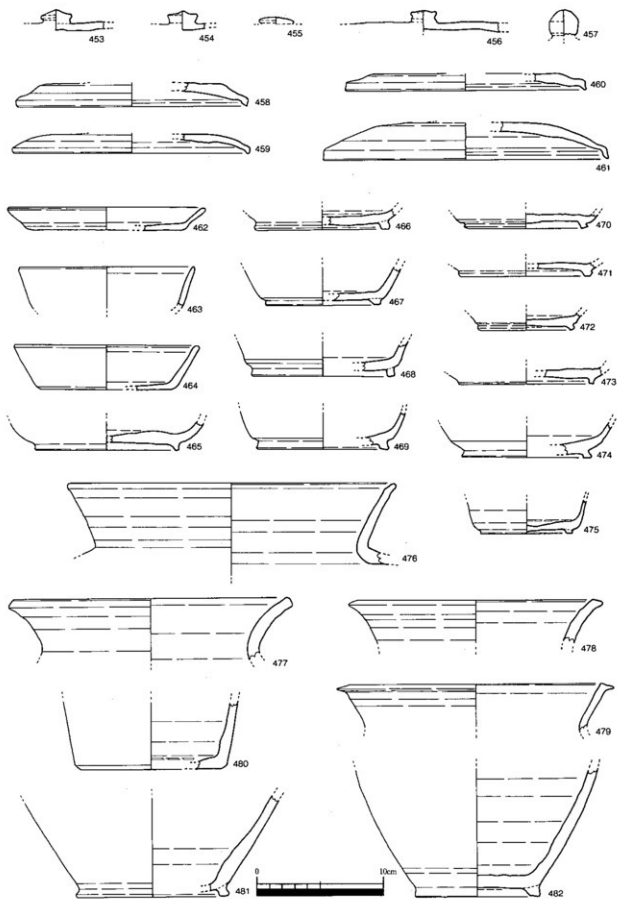


第85图 II区西包含层出土遗物实测图(4)

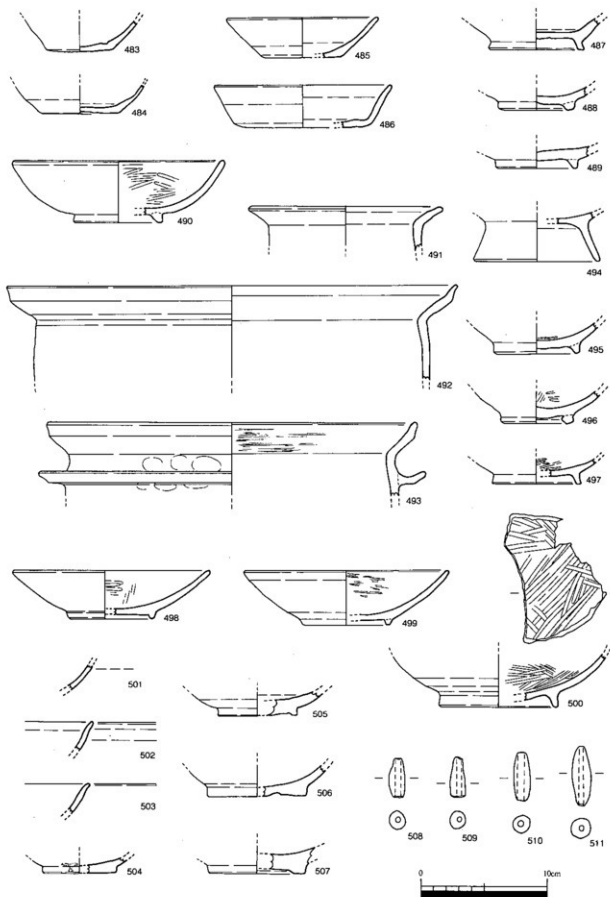
剥離痕が認められる。445は尖頭器で、先端部を欠損している。両側面に加工が見られるが、全体的には荒い調整である。446は打製石包丁片で、加工を施した刃部と両端に見られる挟りが確認される。447はスクレイパー片で、両面縁辺に調整が施されている。448はスクレイパーで、縁辺に調整が施される。449はサヌカイト剥片である。450は二次調整が加えられた剥片である。451は剥片である。452は薄い鉄板状の破片で、全体の形は不明である。

⑤ II区東包含層(第86～88図)

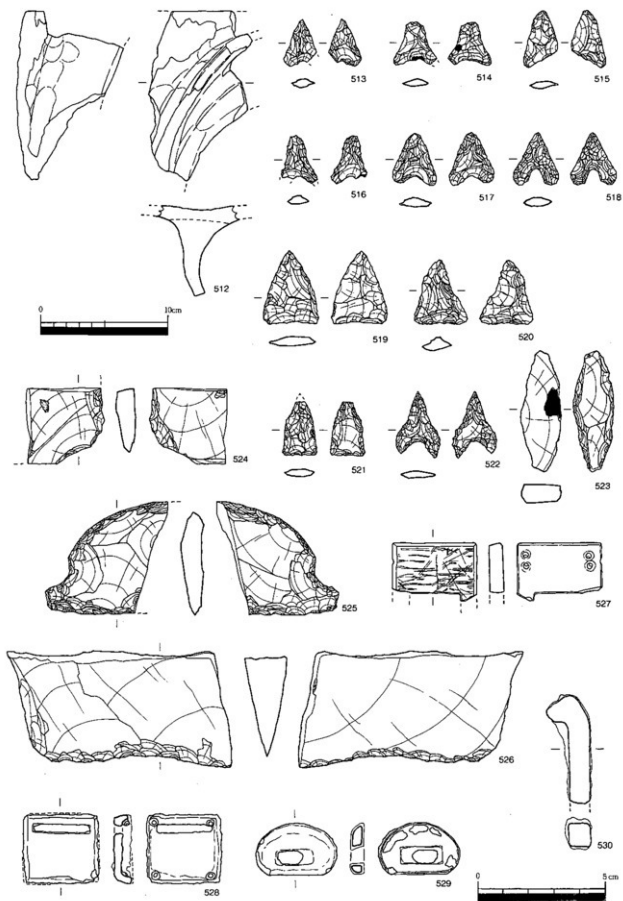
453・454は須恵器杯蓋の宝珠摘みである。佐藤1993 I-1～II-5で7世紀中頃～9世紀中頃。455は須恵器杯蓋の扁平摘みである。佐藤1993 I-1～II-5で7世紀中頃～9世紀中頃。456は須恵器杯蓋のボタン状摘みである。佐藤1993 I-1～II-5で7世紀中頃～9世紀中頃。457は須恵器杯蓋の丸みを持つ宝珠摘みである。佐藤1993 I-1～II-5で7世紀中頃～9世紀中頃。458・460は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方に屈曲して伸び、端部は下方に拡張して鋭く終わる。佐藤1993 II-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。459は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方になだらかに下り、端部はあまり拡張せずに終わる。佐藤1993 II-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。461は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方になだらかに下り、端部は下方に拡張して終わる。佐藤1993 II-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。462は須恵器皿で、底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。佐藤1993 II-5で9世紀中頃。463は須恵器杯で、底部から外反気味に伸びる口縁部を持つ。佐藤1993 II-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。464は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000 II-3～5で13世紀。465は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。466・468・469・470・474は須恵器杯で、外側に踏ん張る四角く低い高台を持つ。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。467は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。471・473は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。472は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993 III-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。475は須恵器杯で、佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。476は須恵器壺の口縁部で、体部から直線的に外上方に伸び、端部内側に段を持つ。佐藤1993 II-2～III-4で8世紀中頃～10世紀後半。477・478は須恵器壺の口縁部で、体部から外反して伸びる。端部は面を持つ。478は端部がやや外側に拡張されている。佐藤1993 II-2～III-4で8世紀中頃～10世紀後半。479は須恵器壺の口縁部で、体部から直線的に伸び、端部を外側に拡張している。佐藤1993 II-2～III-4で8世紀中頃～10世紀後半。480は須恵器壺底部で、平坦な底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993 III-1～4で9世紀後半～10世紀後半。481は須恵器壺底部で、直線的に開く体部を持ち、底部との境に外側に踏ん張る高台が見られる。佐藤1993 II-2で8世紀中頃。482は須恵器壺底部で、内湾気味に開く体部を持ち、底部との境に垂直に下がる高台が見られる。佐藤1993 II-2で8世紀中頃。483は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く体



第86图 II区东包含层出土物实测图(1)

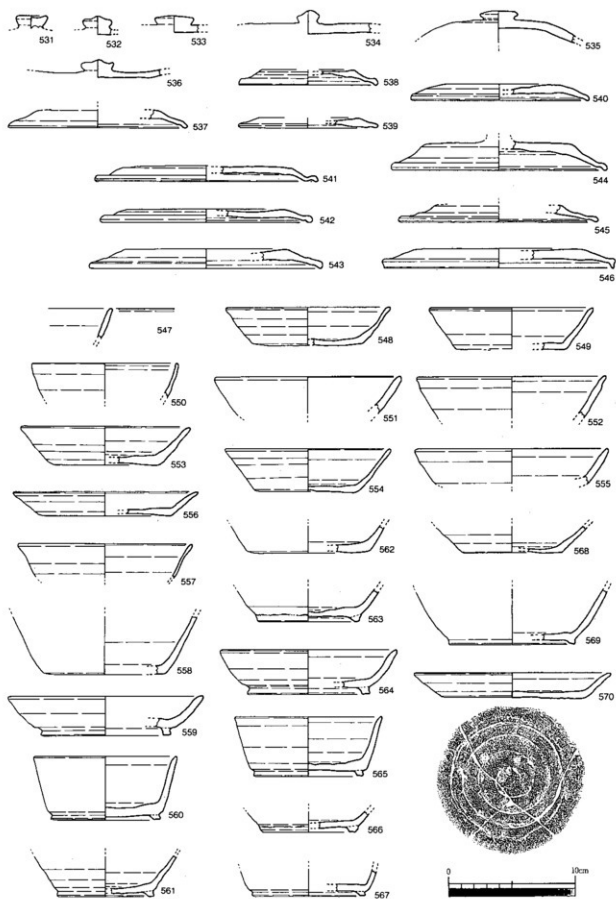


第87图 II区東包含層出土遺物実測図(2)

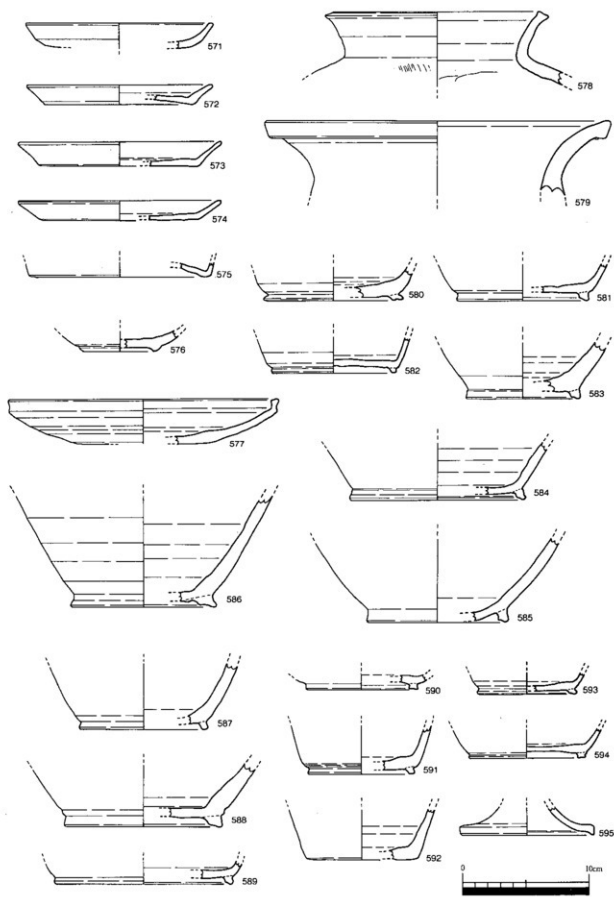


第88图 II区束包含层出土物实测图(3)

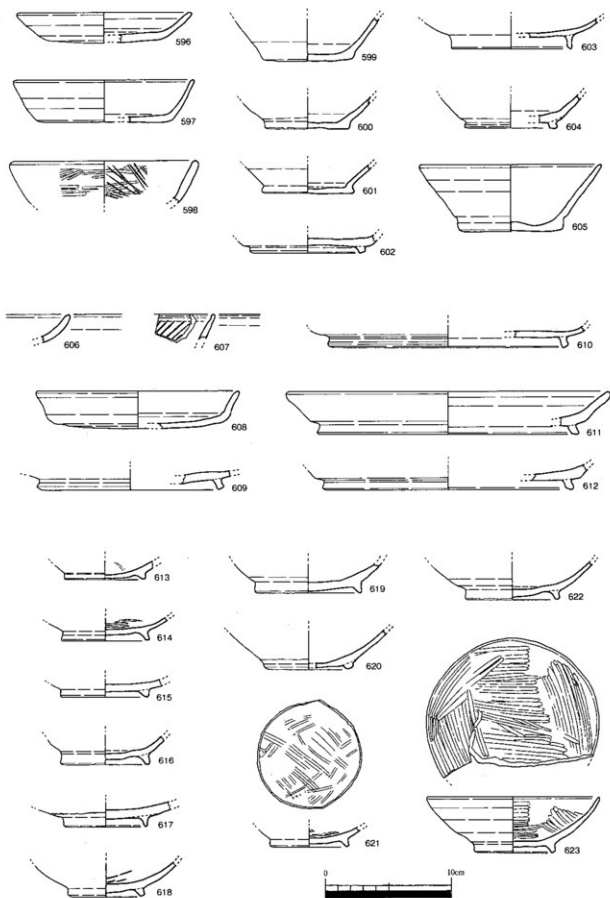
部を持つ。484は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に開く体部を持つ。485は土師器杯で、底部から直線的に開き、端部が丸く終わる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3~5で13世紀。486は土師器杯で、ヘラ切りの底部から外反気味に開く体部を持ち、口縁部は丸く終わる。佐藤2000Ⅱ-3~4で13世紀第2~4四半期。487は土師器碗で、細く外側に踏ん張る高台を持つ。488は土師器碗で、低く垂直に下りる高台を持つ。489は土師器碗で、低く垂直に下りる高台を持つ。490は土師器碗で、低く外側に踏ん張る高台を持ち、体部は内湾気味に開く。端部は丸く終わり、内面にはヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑧~⑨で13世紀。491は土師質甕で、垂直の体部から屈曲して直線的に短く伸びる口縁部を持つ。片桐Ⅱ-④で12世紀前半。492は土師質甕で、やや丸みを持った体部から屈曲して直線的に短く伸びる口縁部を持つ。口縁端部は下側を強く横ナデすることで先端部を細く終わらせる。片桐Ⅰ-②~④で10世紀。493は土師質羽釜で、形態は492同様である。鈔は口頸部との境からやや下がって水平に伸び、やや受け口状になって終わる。片桐Ⅰ-①~②で9世紀後半~10世紀前半。494は土師器碗A2で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。片桐Ⅱ-⑤~⑥で12世紀。495は黒色土器碗で、低く垂直に下りる高台を持つ。12~13世紀頃カ。496は黒色土器碗で、低く垂直に下りる高台を持つ。高台は他に比べて厚い。12~13世紀頃カ。497は黒色土器碗で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。12~13世紀頃カ。498・499は黒色土器碗で、浅い内湾気味の体部に垂直に下りる高台を持つ。体部内面には口縁に平行するヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑧で13世紀中頃。500は黒色土器碗で、外側に踏ん張るシャープな高台を持つ。内面にはヘラミガキが見られるが、残存状況からヘラミガキのパターンは不明である。12~13世紀頃カ。501は緑釉碗の体部片である。502は緑釉碗?の口縁部片である。口縁端部に切込みが認められる。503は緑釉碗の口縁部片である。504は緑釉皿?の底部で、削り出し高台である。505・506は緑釉碗の底部で、削り出し高台である。底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。この内、506では体部と底部の境及び底面の一部の釉が淡緑色である。507は白磁碗の底部で、削り出し高台である。508~511は紡錘型の土錘である。512は土師質甕の焚口部分の破片である。513~522は石鏃で、小形品が多く、多様な形態を含むことから縄文時代から弥生時代の時間幅をもつ資料であると考えられる。523は尖頭器と考えているが、片面のみの加工であることから石鏃の可能性もある。524はサヌカイトの剥片である。525は、刃部が明瞭で両端にある抉りが見られることから、打製石包丁の一部と考えられる。526は、三角柱の一縁辺に両側から調整が施されており、スクレイパーと考えられる。527は石製の巡方である。下部が欠損している。方形の透かしがあり、裏面には2コーナーに各2穴の穿孔が見られるが、2穴はつながっていない。未製品の可能性もあるが、他の取り付け方法も想定されるのではないかと考えている。両面及び他の側面も丁寧な磨きが行われている。528は銅製の巡方である。裏面四隅に銕が見られる。2.8cm×3.0cm×0.8cmを測る。529は銅製の丸柄である。2.0cm×3.2cm×0.6cmを測る。530は鉄釘である。頭部は「L」字に屈曲しており、先端部ともに欠損していると考えられる。



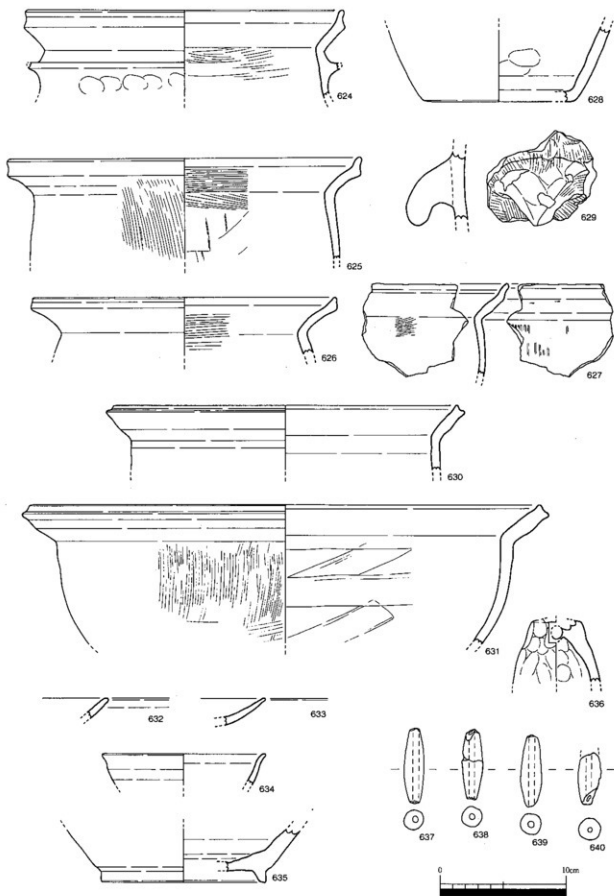
第89图 II区南包含层出土文物实测图(1)



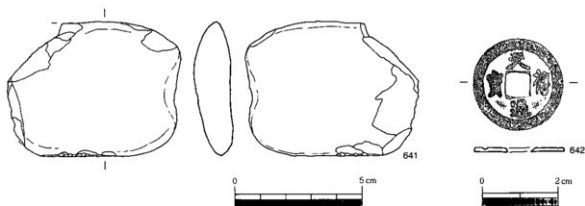
第90图 II区南包含层出土物实测图(2)



第91图 II区南包含层出土器物实测图(3)



第92图 II区南包含层出土物实测图(4)



第93図 II区南包含層出土遺物実測図(5)

⑥ I区南包含層(第89~93図)

531は須恵器杯蓋ボタン状の摘みである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。532は須恵器杯蓋宝珠摘みである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。533は須恵器杯蓋扁平摘みである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。534は須恵器杯蓋宝珠摘みである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。535は須恵器壺蓋と考えられる。天井部に扁平な摘みが見られ、狭い平坦部から屈曲して下がる体部を持つ。天井部が狭く器高が高いと想定されるため、杯蓋ではなく壺蓋としておく。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。536は須恵器杯蓋の摘みである。佐藤1993 I-1~II-5で7世紀中頃~9世紀中頃。537・539・540・542・543は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、端部を丸く終わらせる。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。538・544~546は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、端部を下方に拡張して終わる。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。541は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、少し水平方向に伸びた後、端部を下方に拡張して終わる。佐藤1993 II-2~5で8世紀中頃~9世紀中頃。547は須恵器杯口縁部片である。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く終わる。7世紀後半~9世紀後半頃。548は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がり、端部を少し外反させる。佐藤1993 II-2で8世紀中頃。553・554は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部を少し外反させる。佐藤1993 III-1で9世紀後半。549は須恵器杯で、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を少し外反させる。佐藤1993 III-1で9世紀後半。555は須恵器皿で、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を少し外反させる。佐藤1993 II-2で8世紀中頃。550~552は須恵器杯で、内湾して立ち上がる口縁部を持つ。552は、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、端部を細く仕上げている。7世紀後半~9世紀後半頃556は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から直線的に短く立ち上がる口縁部を持つ。口径・底径が大きく、口縁部の器高が低いことから皿と判断した。佐藤1993 II-5で9世紀中頃。557は須恵器杯で、内湾気味に立ち上がり、端部下で

外反する口縁部を持つ。他の杯と比べて器壁が薄い。7世紀後半～9世紀後半頃。558は須恵器杯と考えている。口縁端部は出土していないが、器壁が薄く、器高があまり高くないと想定されることから、大形の杯と判断した。7世紀後半～9世紀後半頃。559は須恵器杯で、底面から内湾気味に短く立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。口縁部と底部との境より底部側に垂直に下がる四角い高台を持つ。高台がなければ、皿と考えるような形態である。佐藤1993Ⅱ-3～4で8世紀後半～9世紀前半。560は須恵器杯である。内湾気味に高く伸びる口縁部を持ち、端部は細く終わる。高台は底部と体部の境より内側にあり、外側に踏ん張り、器高は低い。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。561は須恵器杯で、底部から直線的に開く体部を持つ。体部と底部の境に垂直に下がる高台が見られる。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。562は須恵器杯で、底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。7世紀後半～9世紀後半頃。563は須恵器杯で、底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、底部との境に垂直に下がる三角形の高台が見られる。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。564は須恵器杯で、底部から内湾して立ち上がり、端部で外反する口縁部を持つ。底部との境から外側に踏ん張る高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-3～4で8世紀後半～9世紀前半。565は須恵器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部との境から内側に低く四角い高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。566は須恵器杯で、シャープさに欠く高台を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。567は須恵器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部との境に垂直に下がる低い高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。568は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ。7世紀後半～9世紀後半頃。569は須恵器杯で、底部から内湾して伸びる口縁部を持つ。底部との境に低い高台が見られる。他に比べて大振りな杯である。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。570は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。571は須恵器皿で、ヘラ切りの底部からなだらかに内湾して立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。572～574は須恵器皿で、一部の機種はヘラ切りの底部から外反気味に短く屈曲して立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。575は須恵器壺底部で、底部がやや上げ底になっている。時期は不明。576は須恵器杯で、底部との境に断面三角形の高台を持つ。577は須恵器高杯の杯部と考えられる。杯蓋と同様の形態を持つが、口径が大きく、口縁端部の作りもヨコナデにより変化しており、ここでは高杯として取り扱う。佐藤1993Ⅱ-4で9世紀前半頃。578は須恵器壺の口縁部である。球形の体部から「く」の字に外反して端部を両側に拡張する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。579も同様の須恵器壺口縁部である。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。580は須恵器杯底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。581・582は須恵器杯底部で、ほぼ垂直に下がる高台を持つ。高台は体部との境から内側に付く。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。583～588は

須恵器壺底部である。これらの資料は、体部との境に高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。589・590は須恵器杯である。高台は垂直に下がり、体部は内湾して立ち上がる。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。591は深めの須恵器杯で、高台は外側に踏ん張り、体部は直線的に開く。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。592は須恵器壺底部と考えられる資料で、平底の底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～4で9世紀後半～10世紀後半。593・594は須恵器杯で、高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。595は須恵器高杯脚部で、「ハ」の字に広がり、端部を下方に拡張して終わる。時期は不明である。596は土師器杯である。ヘラ切りの底部からなだらかに口縁部に至り、端部は丸く終わる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。597は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。598は土師器杯で、直線的に伸びる口縁部を持つ。器壁は厚く、内外面にはヘラミガキが確認できる。599・600・601は土師器円盤状高台杯で、ヘラ切りの底部から直線的に伸びる口縁部を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。602は土師器碗で、体部との境から内側に高台を持つ。603は土師器碗で、体部との境に細く長い高台を持つ。604は土師器碗で、体部との境に高台を持つ。605は土師器円盤状高台杯で、ヘラ切りの突出した円板状高台から直線的に開く口縁部を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。606は土師器皿の口縁部であろう。赤色の化粧土が見られる。平城Ⅶ～Ⅷ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。607は土師器皿の口縁部で、内面にヘラミガキによる櫛描文が見られる。平城Ⅶ～Ⅷ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。608は土師器皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。平城Ⅶ～Ⅷ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。609・610は土師器皿の底部で、外に踏ん張る高台を持つ。赤色の化粧土が見られる。平城Ⅶ～Ⅷ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。611・612は土師器皿で、底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。体部との境から内側に外に踏ん張る高台を持つ。612には赤色の化粧土が見られる。平城Ⅶ～Ⅷ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。613～615・617・618は黒色土器碗の底部で、内面にはヘラミガキが観察される。12～13世紀頃カ。616・619は土師器碗の底部である。620は黒色土器碗で、底部から直線的に開く体部を持つ。底部との境に蒲針状断面の高台が見られる。内面にはヘラミガキが認められる。621は黒色土器碗の底部で、内面には格子状のヘラミガキが見られる。12～13世紀頃カ。622は黒色土器碗の底部で、内面にはヘラミガキが見られる。12～13世紀頃カ。623は黒色土器碗で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。高台は外に踏ん張り、内面にはヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑦～⑧で13世紀前半～中頃。624は土師質羽釜の口縁部で、体部は「く」の字に屈曲した後、摘み上げ状態で直立する。鐙は水平に伸びるが先端が欠損している。片桐Ⅰ-①～②で9世紀後半～10世紀前半。625は土師質甕の口縁部で、ほぼ直立する体部から「く」の字に外反し、端部が上方に拡張して終わる。内外面ともハケ目調整が顕著である。片桐Ⅰ-②～④で10世紀。626は土師質甕の口縁部で、砲弾型と思われ

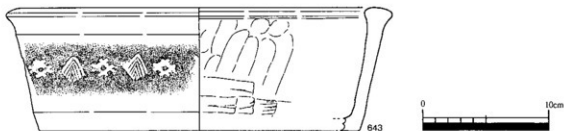
る体部から「く」の字に外反し、端部を上方に少し拡張して終わる。内面には横方向のハケ目が見られる。片桐Ⅰ-④で10世紀後半。627は土師質甕の口縁部である。時期不明。628は土師質火鉢の底部と考えられる資料である。平坦な底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。629は甕の取っ手と考えられる。630は土師質甕の口縁部で、直立する体部から「く」の字に伸びる口縁部を持つ。片桐Ⅱ-⑦~⑧で13世紀。631は土師質土鍋で、半球状の体部から「く」の字に伸びる口縁部を持つ。体部外面はハケ目である。片桐Ⅱ-⑦~⑧で13世紀。632は緑釉土器の口縁部片である。碗と考えられる。633は緑釉土器の口縁部片である。傾きから皿と考えられる。634は緑釉土器の碗である。体部は内湾気味に立ち上がった後、端部で外反する。635は近世陶器の可能性ある鉢の底部と考えられる。高台は底部との境にほぼ直立している。636は土師質イイダコ壺で、釣手及び口縁部が欠損している。637~640は紡錘形の土鍾である。641は扁平な石で、側面の一つには挟りが見られることから石鍾の可能性を考えている。642は銅銭で「天□通宝」と読める。□部分は不明で、銭種を確定することができない。

この調査区の包含層から出土した資料については、「概ね9~12世紀の須恵器・土師器・黒色土器碗各種と共に、銅製巡方・丸鞆各1個、緑釉陶器・灰釉陶器、瓦、鞠羽口・鉄滓等がある。瓦は50片前後が出土している。瓦当文部分を欠いているので、詳細な時期比定が困難であるが、凸面には格子叩きか縄文叩きを見、凹面には布目痕をとどめる。偶発的な混入とは考えたい出土量であり、今次調査で検出した建物で瓦葺き構造を想定することは困難であるが、周辺にそうした建物が存在した可能性がある。また鞠羽口・鉄滓は、付近に鍛冶工房の存在を想定させる。区画東端付近でまとまった炭・焼土ブロックを検出しておりこの想定を支える。」と概報に記載されているが、出土している資料に年代幅があることから、本調査区で検出された遺構との関連については不明である。

⑦ II区 (第94図)

II区取り上げ遺物で、地区は不明である。

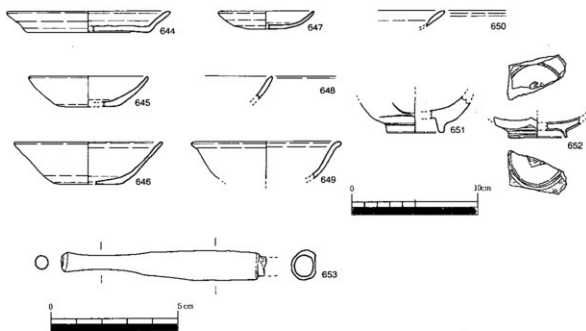
643は土師質鉢である。底部から直線的に立ち上がり口縁端部を肥厚させている。外面には井桁と山形のスタンプを交互に配置している。近世以降の土器と考えられる。



第94図 II区包含層出土遺物実測図

⑧ Ⅲ区西包含層 (第95図)

644は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から短く外反する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-3で8世紀後半。645は土師器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4~5で13世紀第3四半期~14世紀前半。646は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に広がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3~5で13世紀。647は備前焼小皿である。近世カ。648は施釉陶器の口縁部で、浅い碗と考えられる。649は緑釉陶器碗で、内湾気味に立ち上がり、端部で外反する口縁部を持つ。650は青磁小皿の口縁部で、見込み部分との境に凹線が見られる。13~14世紀カ。651は陶胎染付の碗で、外面に文様を描く。652は肥前系染付の碗で、内外面に文様を描く。653はキセルの吸い口である。



第95図 Ⅲ区西包含層出土遺物実測図

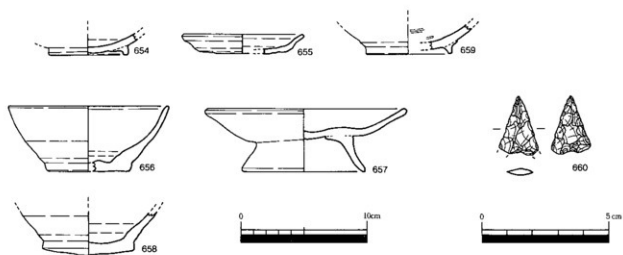
⑨ Ⅵ区包含層 (第96図)

654は須恵器杯底部で、底部との境に高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1~5で8世紀~9世紀中頃。655は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外反する口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3~5で13世紀第2四半期~14世紀前半。656・658は土師器円盤状高台杯で、円板高台から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。片桐Ⅱで11~13世紀。657は土師器碗A2で、「ハ」の字に開く高い高台を持つ。片桐Ⅱ-⑤~⑥で12世紀。659は黒色土器碗の底部である。12~13世紀頃カ。660は石鐵で、二等辺三角形の小形鐵である。

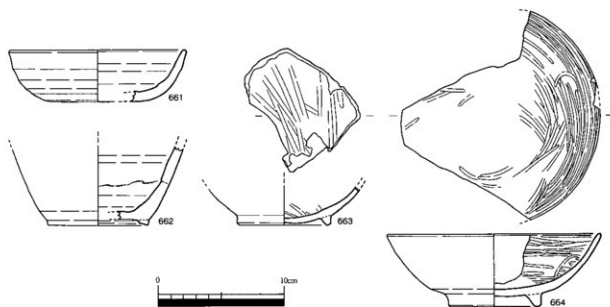
⑩ 包含層 (第97図)

地区は不明である。

661は須恵器杯で、底部から緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅰ-2で7世紀後半。662は須恵器壺底部で、低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。663は黒色



第96図 VI区包含層出土遺物実測図



第97図 包含層出土遺物実測図

土器椀で、内面にはヘラミガキが見られる。12～13世紀頃カ。664は黒色土器椀で、内面には口縁部に平行する方向のヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑦～⑧で13世紀前半～中頃。

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷

「第3章第3節遺構・遺物」では、検出された遺構を掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など種類ごとに分けて説明した。これらのデータから、買田岡下遺跡の時期別変遷を明らかにする。なお、出土遺物のない遺構については、検出方位、位置、遺構の先後関係を考慮して当該時期と推定したものもある。また、出土遺物も当該遺構に伴うと判断できないものもあるが、説明上は当該遺構と伴に説明を加えている。

第1期 縄文時代頃

この時期の遺構は検出されておらず、Ⅱ区西から底部片が出土しているほか、Ⅱ区東・西の包含層から当該期の石鏃が出土しているのみである。地形的には、調査区の南側に当該期の遺跡が広がる可能性がある。

第2期 弥生時代末～古墳時代前期（第98図）

この時期の遺構は、SD37、SD40～42の溝状遺構のみで、住居跡は確認されていない。土器が多量に投棄されていたSD37は、何らかの祭祀が行われたであろうことが推測でき、当該期に廃絶する。SD40～42は、そのまま機能を維持した状態で次の古墳時代中期まで継続使用される。

第3期 古墳時代中頃（第99図）

当該期の遺構は、先の時期から継続的に機能したと考えられるSD40～42のみである。ただし、包含層を含めて古墳時代後期の資料が出土していないことから、継続使用された理由については不明である。

第4期 平安時代前半（第100図）

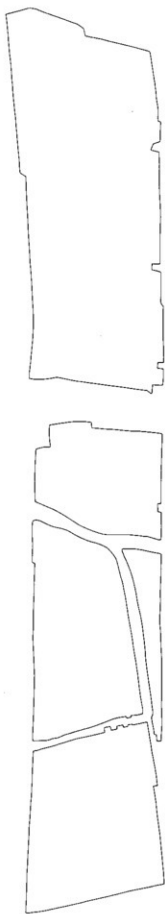
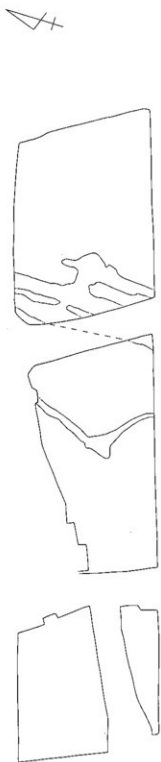
Ⅰ区西SD02、Ⅱ区西・東・南のSD55～57・72・68やSB20～25、Ⅲ区西SD74～77などがこの時期に該当する。当該期の集落はⅡ区に限られており、地形的に限定された範囲に屋敷などが営まれたことが分かる。また、Ⅰ区西の小溝群は、概報でも指摘されているように、畑地に伴う溝状遺構の可能性が高く、Ⅰ区全体が生産域であった可能性がある。Ⅰ区の大半は、次の時期の集落形成により小溝群が削平された可能性を考えておく。Ⅲ区東・Ⅳ区のSD78は、その性格が不明である。

第5期 室町時代前半（第101図）

今回の調査範囲内では、当該期の遺構が最も多く検出されている。西端のⅥ区では溝状遺構、Ⅰ区西では土坑、Ⅰ区中では東西・北の3方向を溝状遺構で区画された集落跡及び土坑、Ⅱ区南、Ⅲ区西・東、Ⅳ区の溝状遺構がある。中心はⅠ区中の集落跡で、この地区の東西に見られる溝状遺構は生産に伴うものと考えられる。

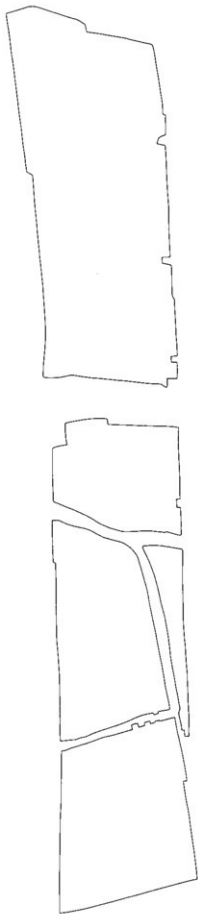
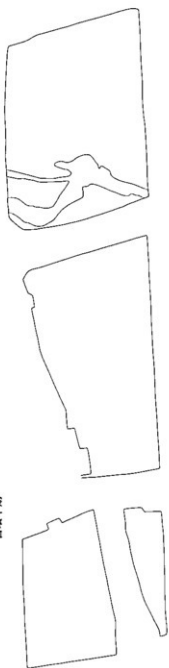
Ⅰ区中の掘立柱建物跡は、SB01～17までの17棟を復元したが、前述したように、当該

學生



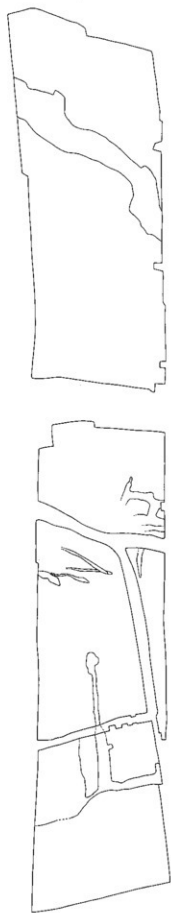
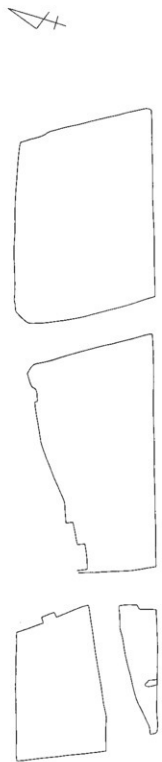
第98圖 透視圖 (1)

圖中數字



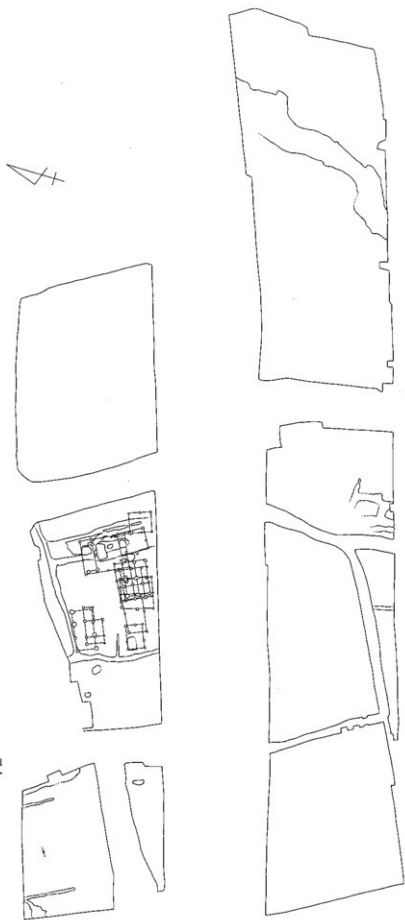
第99圖 遺構變遷圖(2)

古代



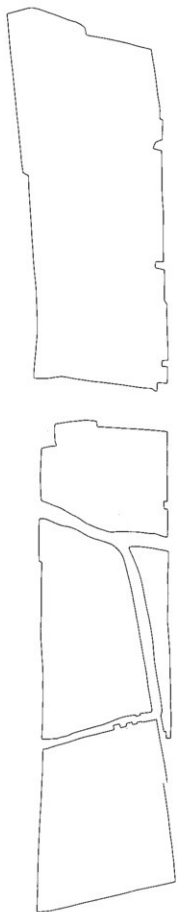
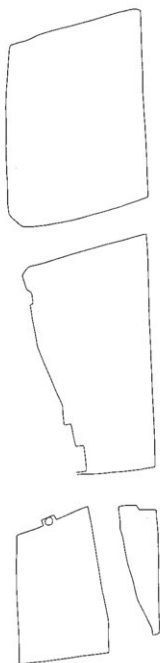
第100図 遺構変遷図(3)

中世



第101図 遺構変遷図(4)

近世



第102図 遺構変遷図(5)

期の柱穴が多数検出されていることから、なお増加する可能性がある。また、いくつかの大形土坑が掘立柱建物跡の内側に重なることから、概報でも屋内の貯蔵穴の可能性が指摘されているが、同規模の土坑で掘立柱建物跡に重複しないものもあり、積極的に裏付ける根拠が見当たらない。

また、掘立柱建物跡の重複や方位の問題もあり、複数の小期に区分される可能性があるが、柱穴出土の資料の評価が定まらず、あえて区分することをしていない。これは、出土遺物が、掘立柱建物跡の建設時に入った（入れられた）ものか、廃絶時もしくはその後に入ったものかの判断を明確にできないことによる。

第6期 江戸時代（第102図）

当該期の遺構はVI区SB30・31のみで、集落の一部ではなく、単発的な遺構であると考えられる。

以上のように、買田岡下遺跡は第4期、第5期を中心とする集落遺跡の一部が主体を占め、集落の本体は隣接する調査区南側に広がることが予想される。また、第1期・第2期・第3期の遺構も同様に南側に広がる可能性がある。

第2節 SD37出土土器について

SD37から出土した土器は、廃棄状態から一括資料と認定しており、概報作成段階で、「SD37上層から良好な古式土師器の一括資料を得た。確認した器種と推定個体数は次の通りとなる。二重口縁壺3、広口壺3、甕15、高杯8、小形鉢8、有孔鉢1、小形器台1、小形壺5。」とされている。（各器種の個体数は本報告で変更）

また位置付けについては、「当地方では二重口縁壺は下川津VI式期から一般化する。その段階では口縁立ち上がり部の反りの強い形態であるが、本資料ではその部分がややだれた後出的な形態に変化している。広口壺では口縁部がラッパ状に開く形態と、頸部中位で強く折れて口縁部が短く水平に開く形態とがある。口縁部に文様帯をもつ例はない。甕は3種ある。やや反り気味に短く開く「く」字状口縁を持ち、体部に叩き目を残し、内面へら削りが上端に及ばない伝統的形態、短く開く「く」字口縁の端部を弱く摘みあげ、体部外面は緻密な斜ハケで仕上げ、内面下半へら削り、上半部に顕著な指押さえを残した形態、およびやや内湾気味に立ち上がる口縁部で端部を小さく肥厚させた形態がある。後2者は各々東阿波型壺、布留甕の模倣形態と見られる。量的には東阿波型壺模倣形態が多い。吉備系の二重口縁甕は見られない。高杯の杯部はやや深目で中位の屈曲は鋭いが上半部はあまり開かない。脚部はやや中膨らみの筒状の軸部から強く折れて短く開く裾部をもつ。脚部に透かし孔はない。また外面ハケ調整が多いがへら磨きも認める。小形鉢はいずれも浅目の碗形態で丸底。非常に粗雑化しており、多くの個体で外面に絞り目状の細かい亀裂を認める。小形器台は脚部が長く調整はやや粗雑、杯部は貫通孔がある。小形壺は張りの弱い体部に短い口縁部を付す形態。全体に分厚く調整も比較的粗雑である。

上記した諸点および、小形丸底土器や小形精製鉢を欠くこと、高杯が増加して小形鉢に

匹敵する量に達していること等が本資料の特徴である。こうした点から本資料は布留式古段階に並行すると考える。本地域の土器編年に照らせば、下川津Ⅵ式とⅦ式間の空白期の一部を埋める内容である。既存の資料では一定の地域差を考慮に入れつつも豊中町延命遺跡SD16資料に最も近く、これよりもやや後出するとみられる。」とされている。

ここで先行様式の概要を提示し、買田岡下遺跡SD37の位置付けについて少し整理しておく。

下川津遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、大久保によって下川津Ⅰ式～Ⅶ式に分ける案が提示されている。(大久保1990) その内、今回対象となる下川津Ⅵ式・Ⅶ式についてその概要を引用する。

下川津Ⅵ式は、「(前略)Ⅴ式段階に盛興した壺口縁部文様帯は全く残らない。高杯も前代までの系統とは異なる。直接的か間接的かは別として畿内地方の影響を想定しうる形態が出現する。(中略)

壺 広口壺では単純にラッパ状に開く口縁部と立上り部が外反する二重口縁とが認められる。また最大径の低いやや扁平な球状を呈する体部に内湾気味の短い口縁部を持つ小形壺もある。

甕 薄く直線的に開く口縁部形態は先行する時期に見られなかった要素である。この期に至って初めて内面体部上端までヘラ削りを施した個体が出現する。上端まで達しない伝統的なヘラ削りは専ら縦方向にのみ施されていたが、上端部で横に削るため口縁部下端内面の稜線が際立っている。ただし伝統的なヘラ削りに留まり、口縁部の屈曲もそれらに比べればやや緩やかな個体も残存している。

また胎土は全く異なり、体部の球形化をほぼ達成しているが、口縁部形状・調整技法の点でB類甕もしくはその影響を受けた阿波東部における当該期の甕に類似した一群の甕がこの時期に認められる。

鉢 浅いボウル状を呈し外面に顕著に指押さえをとどめるやや粗雑な形態が多い。前代までの深めの形態は姿を消す。

高杯 それまでの伝統的な形態とは全く異質の「土師器」的な形態のものに代わる。ただし脚裾部はまだかなり大きく、僅かながら内湾傾向を保つ点で古い様相を残す。また口縁部を弱く折り曲げる形態はこの期特有の要素である。」

下川津Ⅶ式は、「ごく一部の器種が判明しているだけで一時期を設定するには尚早であるが、典型的には高杯において明確にⅥ式とは区別できる資料である。

壺 球形の体部に内湾気味に僅かに開く口縁部を持った小形壺がある。

甕 資料が少ないため断定はし難いが、口縁部を緩く折り返して外反気味に開く伝統的な形態は認められない。

高杯 杯部の屈曲はかなりだれており脚裾は軸から強く折れて水平に短く開く。また軸部内面にヘラ削りを加える個体も認められる。」とされている。

次に、延命遺跡SD16出土土器は、報告書では「SD16はSD15が(中略)二つに分れ

た北側のもので、蛇行はしているもののほぼ西方に流路を取っている。(中略) 埋土は基本的にSD15と同じであるが(中略) 下層である砂層がごく少量になると思われる。遺物は、この流路が広がった部分の上層灰黒色粘質土で多数出土したが、ほとんどが小片ばかりで実測可能なものはごく少量であった。」また、「SD15の上層の時期は鉢が多く出土しており、やや古手の高杯も出土しているが、壺が胴長で底部丸底化していることから布留古段階に当たるものと思われる。」とされている。

買田岡下遺跡SD37の土器は、先に大久保が記述しているように、二重口縁壺などに下川津Ⅵ式に比べて後出する要素が見られること、壺などについては類似する様相も見られること、高杯はⅥ式に近いことなどから、Ⅵ式とⅦ式の間に入る一群であることは問題ないと理解している。ただし、前述したように、Ⅶ式については資料が不足しており、Ⅵ式同等の資料とはいえないことから、可能性として、買田岡下遺跡SD37の土器が、Ⅵ式とⅦ式をうめる標準資料となるのか、Ⅵ式新段階の標準資料となるのかなどの判断は、今後当該期やⅦ式相当の資料の増加を待って再度検討したい。

なお、延命遺跡SD16資料については、買田岡下遺跡SD37出土の二重口縁壺に類似した資料が見当たらず、資料数も限られていることから、同時期と判断することに躊躇を覚える。この点についても今後を待ちたい。

大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」

『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、本州四国連絡橋公団

片桐孝浩 1990 「延命遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第八冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団

觀 察 表

第4表 土器観察表

図版 番号	出土 地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色澤(外面)	色澤(内面)	備考	
1	1区中	SP682	土師質土器	羽釜	204			ナテ、刷毛目、指押さえ、 摩滅	ナテ、刷毛目	口縁部1/8	75YR8/3 浅黄緑	75YR8/3 浅黄緑		
3	8	41	1区中	SP688	土師器	小皿	91	20	52	回転ナテ、ナテ	回転ナテ	75YR8/3 浅黄緑	75YR8/3 浅黄緑	
4	10		1区中	SP269	土師質土器	小皿	80	09	70	摩滅、ナテ	回転ナテ	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	
5	11		1区中	SP100	土師器	小皿	80	09	70	回転ナテ、ヘラ切り	ナテ	5YR7/6 黄	5YR7/6 黄	
6	11		1区中	SP321	土師質土器	土蓋				指ナテ	脚盤片	10YR8/3 浅黄緑	10YR8/3 浅黄緑	
7	13	41	1区中	SP208	土師器	小皿	72	09	58	回転ナテ、ヘラ切り	回転ナテ	75YR8/4 浅黄緑	75YR8/4 浅黄緑	
8	14	41	1区中	SP343	東播系須恵器	钵鉢	280			回転ナテ、指押さえ	回転ナテ	10YR6/3 灰白	10YR6/3 灰白	
13	15		1区中	SP360	土師質土器	羽釜	182			ナテ、指押さえ	刷毛目、ナテ	5YR6/4 にふい塵	75YR7/4 にふい塵	
17	17		1区中	SP644	土師器	杯	116	26	58	回転ナテ、ナテ	回転ナテ	5YR7/4 にふい塵	75YR7/4 にふい塵	
18	17		1区中	SP644	土師質土器	土鍋	98	37	56	回転ナテ	回転ナテ	3/8	75YR5/2 灰褐	75YR7/4 にふい塵
19	17		1区中	SP644	土師質土器	土鍋	439			ナテ、指押さえ後ナテ	ナテ	口縁部破片	75YR7/4 にふい塵	
20	17		1区中	SP644	土師質土器	土鍋	467			指押さえ	ナテ	口縁部破片	75YR4/1 灰白	
21	17	41	1区中	SP644	土師質土器	脚付羽釜	266			指押さえ、指ナテ、筋子 タタキ目、ナテ	ナテ、刷毛目、指押さえ	3/8	75YR8/4 浅黄緑	75YR7/6 黄
24	20		1区中	SP305	土師器	杯	103	28	68	回転ナテ、ヘラ切り	回転ナテ	底部1/8	25YR7/8 黄	25YR7/8 黄
25	20		1区中	SP305	土師器	杯	120	23	86	ナテ、ヘラ切り	ナテ	口縁部破片	25YR7/8 黄	25YR7/8 黄
26	20		1区中	SP305	土師器	小皿	69	10	54	回転ナテ、ヘラ切り	回転ナテ	3/8	10YR8/6 黄緑	10YR8/6 黄緑
27	20		1区中	SP305	土師質土器	羽釜	160			ナテ、刷毛目、摩滅	体部1/8	75YR8/4 浅黄緑	75YR8/4 浅黄緑	
28	22		1区中	SP662	土師器	杯	106			回転ナテ	体部1/8	10YR5/1 灰白	10YR5/1 灰白	
30	23		1区中	SP165	土師器	杯	130			回転ナテ	回転ナテ	25Y7/8 黄	25Y7/8 黄	
39	25		1区西	SP830、831	須恵器	蓋				ナテ	つまみ部 8/8	N7/ 灰白	N5/ 灰	
31	25		1区西	SP848	土師質土器	土鍋				ナテ	口縁部破片	10YR7/1 灰白	10YR6/1 灰白	
32	26		1区南	SP880	須恵器	皿	150	19	112	回転ナテ、回転ヘラケテ リ、回転ヘラ切り	回転ナテ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
33	28		1区南	SP903	土師器	杯	154			回転ナテ	口縁部1/8	75YR8/1 灰白	75YR8/1 灰白	
34	29		1区南	SP1518	須恵器	杯	129			回転ナテ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	
35	29		1区南	SP1518	須恵器	皿	162	22	130	回転ナテ後ナテ	回転ナテ後ナテ	1/8	75Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白
36	29		1区南	SP1531	須恵器	皿				回転ナテ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	

植付 番号	圃区 番号	圃区 名称	圃名	種類	容器	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
37	29	Ⅰ区南	SP1531	須忠器	皿		90		回転ナゾ、ヘラケズリ	回転ナゾ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
38	29	Ⅰ区南	SP1521	須忠器	壺 (底部)		116		回転ナゾ	回転ナゾ	底部1/8	N4/灰	25YR8/1灰白	
39	30	Ⅰ区	SK73	陶器	椀		47		焼物、ナゾ	焼物	底部8/8	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	
40	30	Ⅰ区	SP1120	土師質土器	土鍋				焼物、ナゾ	焼物	口縁部破片	25Y7/1黄灰	5B7/1明青灰	
41	30	Ⅰ区	SP1276	肥前系磁器	皿		135	31	焼物、ヘラケズリ	焼物	口縁部破片	5B7/1明青灰	5B7/1明青灰	
43	33	Ⅰ区中	SP145	土師器	小皿		62	10	回転ナゾ、ヘラ切り	回転ナゾ	底部4/8	25YR7/6黄	25YR7/6黄	
46	33	Ⅰ区中	SP184	土師器	杯		126		回転ナゾ	回転ナゾ、ヘラケズリ	底部1/8	5YR8/4淡黄	75YR8/4淡黄	
47	33	Ⅰ区中	SP210	土師器	杯		131		ナゾ	ナゾ	口縁部1/8	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙	
48	33	Ⅰ区中	SP292	土師質土器	羽差		239		ナゾ、指押さえ、ナゾ	ヘラケズリ、ナゾ、瓶ナゾ	口縁部1/8	75YR8/3淡黄	75YR8/4淡黄	
49	33	Ⅰ区中	SP308	土師質土器	鉢		326		回転ナゾ、ナゾ後指押さえ	回転ナゾ	口縁部破片	5YR8/2灰白	5YR7/3にふい	
50	33	Ⅰ区中	SP336	土師器	小皿		65	11	回転ナゾ、ヘラ切り	回転ナゾ	2/8	5YR8/2灰白	5YR7/2明細灰	
51	33	Ⅰ区中	SP352	土師質土器	羽差				ナゾ、指押さえ	ナゾ、新毛目	口縁部破片	75YR8/4淡黄	75YR8/4淡黄	
54	33	Ⅰ区中	SP380	土師器	小皿		72	12	回転ナゾ、ヘラ切り	回転ナゾ	底部1/8	5YR7/4にふい	5YR7/4にふい	
55	33	Ⅰ区中	SP403	土師質土器	土鍋		430		指押さえ後ナゾ	ナゾ	口縁部破片	10YR4/2灰黄緑	10YR4/2灰黄緑	
56	33	Ⅰ区中	SP411	土師質土器	羽差				ナゾ、指押さえ	ナゾ	口縁部破片	10YR4/2灰黄緑	75YR7/3にふい	
57	33	Ⅰ区中	SP462	土師器	椀		150		回転ナゾ、破滅	回転ナゾ、破滅	1/8	5YR7/4にふい	5YR7/4にふい	
58	33	Ⅰ区中	SP469	土師器	小皿		70	11	ナゾ、ヘラ切り	ナゾ	口縁部1/8	5YR7/6黄	5YR7/6黄	
60	33	Ⅰ区中	SP536	土師器	杯		108		回転ナゾ	回転ナゾ	口縁部1/8	5YR7/6黄	5YR7/6黄	
62	33	Ⅰ区中	SP639	土師質土器	羽差		245		ナゾ、指押さえ	朝毛目	口縁部1/8	75YR8/3淡黄	10YR7/3にふい	
64	20	Ⅰ区中	SP664	土師質土器	土鍋		460		ナゾ、瓶ナゾ、指押さえ	ナゾ、朝毛目	口縁部1/8	75YR4/3褐	10YR5/3にふい	
65	34	Ⅰ区中	SP670	土師質土器	鉢		350		回転ナゾ、回転ヘラケズリ、指押さえ後ナゾ	ナゾ	口縁部破片	75YR6/3にふい	75YR6/4にふい	
66	34	Ⅰ区	SP1046	陶器	小壺		4.3	3.6	回転ナゾ	回転ナゾ	8/8	75YR8/2灰白	75YR8/2灰白	
67	34	Ⅰ区	SP1065	土師器	椀		74		回転ナゾ	ヘラミガキ	底部3/8	10YR7/4にふい	10YR2/1黒	
68	34	Ⅰ区	SP1079	土師器	杯		160		回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	口縁部3/8	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	
69	34	Ⅰ区	SP1124	黒色土器A類	椀		82		回転ナゾ	ヘラミガキ	底部1/8	10YR3/1黒	10YR3/1黒	
70	34	Ⅰ区	SP1149	土師器	杯		140		回転ナゾ、指押さえ、ナゾ	瓶ナゾ	口縁部破片	75YR8/2灰白	75YR8/2灰白	

順文 番号	種別 番号	出土 地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色澤 (外面)	色調 (内面)	備考
71	34	Ⅴ区	SP162	土師器	杯		7.0	回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子	底部6/8	75YR8/6 浅黄橙	5YR7/4 に近い橙	
77	34	Ⅴ区	SP124	土師質土器	羽釜			指ナナ子	—	脚1本	75YR8/6 浅黄橙	—	
78	34	Ⅴ区	SP1232	土師質土器	羽釜	20.4		横ナナ子、ナナ子、格子タタキ目	横ナナ子、ナナ子	2/8	25YR6/4 に近い橙	75YR4/2 灰褐	
79	35	Ⅴ区	SP1267	土師質土器	羽釜	20.0		横ナナ子、ナナ子	ナナ子	口縁部破片	10YR7/4 に近い黄橙	75YR8/4 浅黄橙	
80	35	Ⅴ区	SP1287	土師質土器	土鍋	35.6		ナナ子、横ナナ子、指押さえ	ナナ子、刷毛目	口縁部1/8	75YR7/4 に近い橙	10YR7/4 に近い黄橙	
81	35	42	SP1343	佛前焼	甕鉢	28.0	15.0	ナナ子、磨滅、指押さえ	刷目	6/8	75YR6/4 に近い橙	75YR6/4 に近い橙	
82	35	Ⅴ区	SP1384	土師質土器	羽釜	22.8		指ナナ子、ナナ子	ナナ子	口縁部1/8	75YR6/4 に近い橙	5YR5/4 に近い赤褐	
83	35	Ⅲ区南	SP1535	須恵器	杯蓋			回転ナナ子、回転ヘラックスリ	ナナ子	つまみ部 6/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
84	35	Ⅲ区南	SP1536	須恵器	杯		5.9	回転ヘラックスリ、回転ナナ子	回転ナナ子	底部2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
85	35	Ⅲ区南	SP1536	須恵器	杯蓋	15.4	1.2	11.0 回転ナナ子	回転ナナ子	底部1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
86	35	Ⅲ区南	SP1538	須恵器	杯	13.3		9.2 回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子	2/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
87	35	42	SP1538	須恵器	高台付杯	16.3	6.6	10.0 回転ヘラックスリ、回転ナナ子、ヘラ切り	回転ヘラックスリ、回転ナナ子	底部3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
88	35	Ⅲ区南	SP1538	土師質土器	土鍋	26.6		ナナ子、刷毛目	ナナ子	口縁部1/8	75YR5/2 灰褐	75YR6/4 に近い橙	
89	35	Ⅲ区南	SP1546	須恵器	高台付杯 (底部)		8.9	回転ナナ子、回転ヘラックスリ、ナナ子	回転ナナ子	底部1/8	N7/ 灰白	N6/ 灰	
90	37	Ⅰ区南	SD28	土師質土器	羽釜			ナナ子、指押さえ	ナナ子	底部1/8	10YR7/3 に近い黄橙	10YR7/3 に近い黄橙	
96	41	Ⅰ区中部	SD28-31複合	土師器	杯	10.1	2.5	6.2 回転ナナ子	回転ナナ子	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
97	41	Ⅰ区中部	SD28-31複合	土師器	杯	10.2	1.9	6.0 ナナ子	ナナ子	3/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
98	41	Ⅰ区中部	SD28-31複合	土師器	杯	9.5	2.4	6.0 回転ナナ子、ナナ子	回転ナナ子	2/8	10YR6/3 に近い黄橙	10YR7/2 に近い黄橙	
99	41	Ⅰ区中部	SK37、SD28	土師器	杯		5.5	回転ナナ子後ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子後ナナ子	4/8	10YR8/2 灰白	10YR7/3 に近い黄橙	
100	41	Ⅰ区中部	SD48、SD28 ～31合流部、 SD29、30	土師質土器	甕鉢		12.3	指押さえ後ナナ子、ナナ子	ナナ子後部目、ナナ子	底部2/8	25Y4/1 黄灰	25Y6/1 黄灰	
101	41	Ⅰ区中部	SD28-31複合	土師器	小皿	6.1	0.8	5.0 回転ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子	1/8	10YR7/2 に近い黄橙	10YR8/2 灰白	
102	41	Ⅰ区中部	SD28-31複合	土師質土器	甕鉢	28.0		ナナ子、指押さえ	ナナ子、指押さえ	口縁部1/8	25Y7/2 灰黄	25Y7/2 灰黄	

国産 番号 番号	出土 地区	遺跡名	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色澤 (外面)	色調 (内面)	備考
103 41	I 区中	SD28	土師質土器 羽釜	232			回転ナゾ、指押さえ、格子タタキ目	回転ナゾ	口縁部 1/8	75Y5/4 にぶい焼	10YR7/3 にぶい黄青	
104 41	I 区中	SD48、SD28 31 合流部	土師質土器 羽釜	268			ナゾ、指押さえ、格子タタキ目、ヘラケズリ後ナゾ	ナゾ、板ナゾ	脚 3 本	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
105 41	I 区中	SD48、SD28 31 合流部	土師質土器 羽釜	270			ナゾ、指押さえ後ナゾ	ナゾ	口縁部 1/8	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
106 41	I 区中	SD48、SD28 31 合流部	土師質土器 羽釜	288			ナゾ、指押さえ、格子タタキ目	ナゾ	口縁部 1/8	10YR7/4 にぶい黄青	10YR7/4 にぶい黄青	
107 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 羽釜	254			回転ナゾ、ナゾ、指押さえ	指押さえ、板ナゾ	口縁部 1/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	
108 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 羽釜	196			ナゾ、指押さえ	ナゾ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄緑	
109 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 羽釜	252			ナゾ、指押さえ	ナゾ、板ナゾ	口縁部 1/8	75YR6/3 にぶい緑	75YR8/3 浅黄橙	
110 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 土鍋	440			横ナゾ	横ナゾ	3/8	75YR4/1 褐灰	75YR6/4 にぶい橙	
111 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 土鍋	425			横ナゾ、板ナゾ、胡毛目後ナゾ	横ナゾ	口縁部 1/8	75YR4/2 灰褐	75YR7/4 にぶい橙	
112 42	I 区中	SD28-31複合 部	土師質土器 土鍋	452			ナゾ、指押さえ	回転ナゾ	口縁部 1/8	10YR4/2 灰黄緑	10YR4/2 灰黄緑	
113 45	I 区中	SD37	土師質土器 広口径	178	379?	90?	横ナゾ、胡毛目、タタキ目後胡毛目	横ナゾ、指押さえ、ヘラケズリ	6/8	25Y7/2 灰黄	25Y7/2 灰黄	
114 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	185			ナゾ、胡毛目	板ナゾ、指ナゾ、ナゾ、漆滅	口縁部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
115 45	I 区中	SD37	弥生土器 蓋	187			ナゾ (一部ヘラミガキが残る)	ナゾ、漆滅	口縁部 6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
116 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	190			横ナゾ後ナゾ	指押さえ後ナゾ	口縁部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
117 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径				回転ナゾ	漆滅	口縁部破片	75YR7/6 橙	75YR7/6 橙	
118 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	155			ナゾ	ナゾ、板ナゾ	頭部 1/8	10YR6/2 灰黄緑	10YR6/2 灰黄緑	
119 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	186			回転ナゾ	ナゾ、指押さえ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
120 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	196			ナゾ	ナゾ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
121 45	I 区中	SD37	弥生土器 広口径	176			ナゾ、ヘラミガキ	ナゾ、板ナゾ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
122 45	I 区中	SD37	弥生土器 小形丸底器		20		横ナゾ、胡毛目	指ナゾ	体部 6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
123 45	I 区中	SD37	土師器 小形丸底器				ナゾ、胡毛目、指押さえ	ナゾ、胡毛目	6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	

論文掲載 番号	国版 番号	出土 地区	遺構名	遺物	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考
124	46	1区中	SD37	弥生土器	甕	11.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	口縁部1/8	10YR8/4 浅黄褐色	75YR7/4 に近い黄褐色	
125	46	1区中	SD37	弥生土器	甕	12.5	17.3		ナデ、刷毛目、板ナデ	ナデ、指押さえ、ヘラケズリ	6/8	25Y8/3 黄褐色	25Y7/4 黄褐色	
126	46	1区中	SD37	土師瓦工器	甕	14.2			ナデ、刷毛目	ナデ、指押さえ	1/8	25Y6/1 黄褐色	25Y7/4 黄褐色	
127	46	1区中	SD37	土師瓦工器	甕	13.2			ナデ、刷毛目	ナデ、指押さえ	口縁部4/8	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	
128	46	1区中	SD37	弥生土器	甕	14.0			ナデ、磨滅	ナデ、指押さえ	口縁部2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
129	46	4区中	SD37	弥生土器	高杯	14.1			ナデ、刷毛目	ナデ、板ナデ後刷毛目	杯部5/8	10YR7/3 に近い黄褐色	10YR7/3 に近い黄褐色	
130	46	1区中	SD37	弥生土器	高杯	15.0			ナデ	ナデ、ヘラミガキ	口縁部2/8	10YR7/3 に近い黄褐色	10YR7/3 に近い黄褐色	
131	46	1区中	SD37	弥生土器	高杯	14.0			横ナデ、刷毛目	横ナデ、板ナデ	杯部6/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
132	46	4区中	SD37	弥生土器	高杯	15.2			ナデ、ナデ後刷毛目	ナデ、ナデ後ヘラミガキ	杯部6/8	10YR8/2 灰白	10YR7/2 に近い黄褐色	
133	46	1区中	SD37	弥生土器	高杯	13.4			磨滅	ヘラミガキ、ナデ	杯部3/8	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	
134	46	1区中	SD37	弥生土器	器台		9.0		板ナデ、ナデ	ナデ、刷毛目	口縁部2/8	75YR7/4 に近い黄褐色	75YR7/4 に近い黄褐色	
135	46	4区中	SD37	弥生土器	高杯		11.2		指ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、板ナデ、ナデ	脚部8/8	10YR8/4 浅黄褐色	25YR7/4 浅黄褐色	
136	46	1区中	SD37	弥生土器	高杯				磨滅	ナデ	脚部5/8	10YR7/4 に近い黄褐色	10YR7/4 に近い黄褐色	
137	46	4区中	SD37	土師器	小型鉢	7.9	3.1		指押さえ	指押さえ	6/8	10YR8/2 灰白	75YR7/4 に近い黄褐色	
138	46	4区中	SD37	弥生土器	鉢	8.8			板ナデ	板ナデ	5/8	25Y8/2 灰白	10YR8/2 灰黄褐色	
139	46	1区中	SD37	土師瓦工器	鉢	12.4	4.7	3.6	ナデ	板ナデ後ナデ	6/8	25Y7/2 灰黄褐色	25Y7/2 灰黄褐色	
140	46	4区中	SD37	弥生土器	鉢	10.0	3.8	6.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	7/8	25Y8/3 黄褐色	25Y8/3 黄褐色	
141	46	4区中	SD37	弥生土器	鉢	12.3			磨滅、指押さえ、ナデ	板ナデ、指押さえ	6/8	10YR7/2 に近い黄褐色	10YR7/2 に近い黄褐色	
142	46	4区中	SD37	土師器	鉢	13.9			磨滅、板ナデ	磨滅、板ナデ	7/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/2 に近い黄褐色	
143	47	4区中	SD37	弥生土器	小型甕		2.3		磨滅、指押さえ、ナデ	指ナデ	6/8	25Y8/3 黄褐色	25Y8/3 黄褐色	
144	47	4区中	SD37	弥生土器	小型甕		7.6		ナデ、刷毛目後指押さえ	指押さえ、板ナデ	7/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
145	47	1区中	SD37	弥生土器	小型甕	11.0			磨滅、ナデ、刷毛目	ナデ、指ナデ、板ナデ、指押さえ	2/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
146	47	1区中	SD37	弥生土器	小型甕	12.5			磨滅	磨滅	口縁部2/8	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	
147	47	1区中	SD37	弥生土器	甕	15.6	20.2		ナデ	板ナデ、ナデ、ヘラケズリ	2/8	10YR7/3 に近い黄褐色	10YR7/2 に近い黄褐色	
148	47	4区中	SD37	弥生土器	甕	14.4			横ナデ、板ナデ	横ナデ、指ナデ、ヘラケズリ	3/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
149	47	1区中	SD37	弥生土器	甕	13.4			ナデ、指押さえ、タタキ目	ナデ、指押さえ	口縁部1/8	75YR5/4 に近い黄褐色	75YR7/4 に近い黄褐色	

観音堂 番号	国庫 番号	出土 地区	遺構名	種類	路程	口径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
150	47	I区中 SD37	弥生土器	甕	138		ナテ	ナテ	ナテ、指押さえ	口縁部 3/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR7/3 におい黄褐色	
151	47	I区中 SD37	弥生土器	甕	104		朝顔、ナテ	朝顔、ナテ	朝顔、ヘラケズリ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
152	47	I区中 SD37	弥生土器	甕	204		ナテ、指押さえ、摩滅	ナテ、指押さえ	ナテ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR7/4 におい橙	10YR8/2 灰白	
153	47	I区中 SD37	弥生土器	甕	173		タタキ目後ナテ	タタキ目後ナテ	ナテ、ヘラケズリ後ナテ	口縁部 2/8	5YR6/4 におい橙	10YR7/3 におい黄褐色	
154	47	I区中 SD37	弥生土器	甕			ナテ、板ナテ、タタキ目、指押さえ	ナテ、板ナテ、タタキ目、指押さえ	指押さえ、指ナテ	胴部 1/8	10YR7/3 におい黄褐色	75YR6/4 におい橙	
155	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	128	5.9	ナテ	ナテ	ナテ	2/8	10YR8/3 浅黄褐色	75YR6/3 浅黄褐色	
156	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	97	6.3	3.2	指押さえ後ナテ、ナテ	ナテ	2/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	
157	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	135	6.0		指押さえ後ナテ、摩滅	ナテ	5/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR7/3 におい黄褐色	
158	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	178	9.3	6.3	指押さえ、摩滅	ナテ (一部タタキ目あり)、摩滅	6/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR7/3 におい黄褐色	
159	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢		3.4	ナテ	ナテ	指押さえ後ナテ	底部 2/8	5YR6/3 におい橙	75YR6/6 橙	
160	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	128		ナテ、板ナテ	ナテ	ナテ	口縁部 1/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR7/3 におい黄褐色	
161	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	15.9		ナテ、ヘラケズリ	ナテ、ヘラケズリ	ナテ	口縁部 1/8	75YR7/4 におい橙	10YR7/3 におい黄褐色	
162	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	29.8		摩滅	摩滅	摩滅	口縁部破片	75YR7/4 におい橙	75YR7/4 におい橙	
163	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	26.6		ナテ	ナテ	ナテ、指押さえ	口縁部破片	75YR6/4 におい橙	75YR6/4 におい橙	
164	48	I区中 SD37	弥生土器	鉢	32.8		ナテ	ナテ	ナテ、指押さえ	口縁部 1/8	75YR6/4 におい橙	75YR6/4 におい橙	
165	48	I区中 SD37	弥生土器	底部		5.8	摩滅	摩滅	摩滅	底部 8/8	5YR4/3 におい赤褐色	10YR4/1 褐色	
166	49	I区中 包含層	青磁	柄		5.8	焼蝕	焼蝕	焼蝕	底部 2/8	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	
167	49	I区中 包含層	須恵器	甕 (底部)		11.0	格子タタキ目後ナテ、ヘラケズリ、ナテ	格子タタキ目後ナテ、ヘラケズリ、ナテ	皿底ナテ、指押さえ、ナテ	底部 1/8	N6/灰	N6/灰	
168	49	I区中 包含層	土師質土器	甕	32.2		皿底ナテ、ナテ	皿底ナテ	皿底ナテ	口縁部 1/8	10YR2/2 黒褐色	75YR7/4 におい橙	
169	49	I区中 包含層	土師質土器	羽釜			指ナテ	指ナテ	指ナテ	胴 5/8	10YR5/2 灰黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	
170	49	I区中 SD48	土師質土器	羽釜	27.5		ナテ、指押さえ	ナテ、指押さえ	指ナテ、刷毛目	口縁部 1/8	10YR7/3 におい黄褐色	10YR7/3 におい黄褐色	
171	51	I区東 SD41	弥生土器	甕	10.9		指押さえ、ナテ、刷毛目	指押さえ、ナテ、刷毛目	ナテ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR5/4 におい赤褐色	5YR5/4 におい赤褐色	
172	51	I区東 SD40、41	弥生土器	甕 (底部)		4.0	摩滅	摩滅	摩滅	底部 5/8	10YR5/3 におい黄褐色	75YR5/5 におい黄褐色	
173	51	I区東 SD40、41	弥生土器	小型丸底型	9.2		指押さえ後ナテ	指押さえ後ナテ	指押さえ後ナテ (砂粒あり)	口縁部 3/8	10YR7/2 におい黄褐色	10YR7/2 におい黄褐色	
174	51	I区東 SD41	土師器	鉢	12.3		板ナテ、ナテ	板ナテ、ナテ	刷毛目	5/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
175	51	I区東 SD41	土師器	鉢	12.8		ナテ、ヘラケズリ	ナテ、ヘラケズリ	ナテ、ヘラケズリ	4/8	10YR6/3 におい黄褐色	10YR6/3 におい黄褐色	
176	51	I区東 SD40、41	須恵器	杯	8.8		皿底ナテ、指押さえ	皿底ナテ、指押さえ	皿底ナテ	3/8	N6/灰	N6/灰	

館文 番号	棟号 番号	棟名	出土地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
177	51	45	I区東	SD41	須恵器	杯	100	5.0		回転ナナ	7/8	N6/灰	N6/灰	
178	51		I区東	SD41	須恵器	杯	96			回転ナナ	1/8	N7/灰白	N7/灰白	
179	51		I区東	SD41	須恵器	杯	104			回転ナナ	口縁部2/8	N6/灰	N6/灰	
180	52		II区南	SD55	土師器	碗	54			回転ナナ	底部2/8	25Y7/2灰黄	25Y7/2灰黄	
181	52		II区西	SD55	須恵器	杯	64			回転ナナ	底部1/8	N8/灰白	N8/灰白	
182			II区西	SD55	土師器	碗	92			摩滅	口縁部1/8	5YR7/3にふい骨	5YR7/3にふい骨	
183	52		II区西	SD55	土師瓦土器	土鍋	360			?	口縁部破片	5YR6/6 磨	10YR7/3にふい骨	
184	54		II区東	SD69	須恵器	杯	80			ナナ	底部2/8	5YR8/1灰白	5YR8/1灰白	
185	56	45	II区南	SD67	土師器	杯	132	3.4	66	回転ナナ	5/8	75Y8/3 浅黄	75Y6/6 磨	
186	56		II区南	SD68	土師器	杯	130	3.0	82	回転ナナ	2/8	25Y6/2灰黄	25Y7/3 浅黄	
187	56		II区南	SD68	須恵器	碗	135			回転ナナ	口縁部1/8	5Y5/1 灰	5Y7/1 灰白	
188	56		II区南	SD68	須恵器	杯	86			回転ナナ	底部2/8	N6/灰	N6/灰	
189	56		II区南	SD68	土師瓦土器	碗	300			刷毛目、横ナナ、縦ナナ	1/8	5YR5/6 明赤	5YR5/6 明赤	
190	57		II区西	SD74	須恵器	杯	60			回転ナナ	底部2/8	N6/灰	N6/灰	
191	57		II区西	SD74	須恵器	杯 (高台部分)	96			回転ナナ	底部2/8	25Y7/1 灰白	25Y7/1 灰白	
192	57		II区西	SD74	黒色土器	碗	76			回転ナナ	底部1/8	75YR8/3 浅黄	5YR4/1 灰	
193	57		II区西	SD74	土師器	碗	66			摩滅	底部4/8	10YR8/3 浅黄	75YR8/3 浅黄	
194	57		II区西	SD74	黒色土器	杯	76			ナナ	底部3/8	10YR8/2 灰白	25Y5/1 黄灰	
195	57		II区西	SD74	土師器	杯	133	2.7	70	ナナ	底部3/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
196	57		II区西	SD74	須恵器	杯	94			回転ナナ	口縁部1/8	N6/灰	N6/灰	
197	57	45	II区西	SD74	土師器	杯	112	3.4	62	回転ナナ	5/8	5YR6/6 磨	10YR7/2にふい骨	
198	57		II区西	SD74	土師器	杯	65			回転ナナ	底部7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
199	57		II区西	SD74	土師器	杯	27			回転ナナ	底部2/8	75YR7/6 磨	75YR7/6 磨	
200	57		II区西	SD74	土師器	杯	120	3.5	60	回転ナナ	3/8	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	
201	57		II区西	SD74	土師瓦土器	瓦釜				指押さえ	体部破片	75YR7/4にふい骨	75YR7/4にふい骨	
202	58		II区西	SD74	黒色土器	碗	65			回転ナナ	底部1/8	10YR8/3 浅黄	25Y4/1 黄灰	
203	58		II区西	SD74	須恵器	碗	90			回転ナナ	底部2/8	5YR7/1 灰白	5YR7/1 灰白	

橋台番号	橋脚番号	出土地区	遺構名	橋脚	基礎	口径	高さ	底径	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考
204	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	小型器台	124	30	58	ナブ	ナブ	5/8	25YR7/4 におい煙	10YR8/3 浅黄煙	
205	58	Ⅲ区西 SD76	須恵器	須恵器	杯	132	3.5	67	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	7/8	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	
206	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	杯	109	2.8	70	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
207	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	杯			7.5	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	7/8	10YR8/3 浅黄煙	10YR7/2 におい黄煙	
208	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	円盤状高台 杯			6.9	磨滅	回転ナブ	底部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄煙	
209	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	円盤状高台 杯			7.3	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	底部 8/8	10YR8/3 浅黄煙	25YR8/2 灰白	
210	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	円盤状高台 杯			7.0	ナブ	ナブ	底部 2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
211	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	円盤状高台 杯	84			ナブ、回転ヘラケズリ	ナブ	底部 1/8	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	
212	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	円盤状高台 杯			7.8	ナブ	ナブ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄煙	10YR8/3 浅黄煙	
213	58	Ⅲ区西 SD74	黒色土器A類	黒色土器A類	碗	130	5.4	71	磨滅	ヘラミガキ	2/8	5YR7/4 におい煙	N3/ 褐灰	
214	58	Ⅲ区西 SD74	土師器	土師器	碗			7.0	回転ナブ、回転ヘラ切り 後ナブ	回転ナブ	底部 6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
215	58	Ⅲ区西 SD76	須恵器	須恵器	壺	100			回転ナブ、回転ナブ後指 押さえ、ナブ	回転ナブ、新獲	3/8	N4/ 灰	N5/ 灰	
218	59	Ⅲ区東 SD78	須恵器	須恵器	壺	150			回転ナブ	回転ナブ	口縁部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
219	59	Ⅲ区東 SD78	須恵器	須恵器	壺(底部)			9.2	回転ヘラケズリ、回転ナ ブ	回転ナブ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
220	59	Ⅲ区 SD78	須恵器	須恵器	壺(底部)			7.7	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
221	59	Ⅲ区東 SD78	須恵器	須恵器	壺(底部)			7.5	回転ナブ	回転ナブ	底部 2/8	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	
222	59	Ⅲ区 SD78	須恵器	須恵器	壺(底部)			8.9	回転ナブ、ナブ	回転ナブ	底部 1/8	25Y6/1 黄灰	N7/ 灰	
223	59	Ⅲ区東 SD78	須恵器	須恵器	杯			11.1	回転ヘラケズリ、回転ナ ブ	回転ナブ	底部 1/8	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰	
224	59	Ⅲ区 SD79	土師器	土師器	碗			5.5	ナブ	ヘラミガキ、磨滅	底部 5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
225	59	Ⅲ区 SD78	土師器	土師器	碗			6.0	磨滅	磨滅	底部 4/8	5YR5/3 におい赤黒	7.5YR8/4 浅黄煙	
226	59	Ⅲ区東 SD78	須恵器	須恵器	壺(底部)			12.0	回転ナブ	磨滅	底部 1/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
227	59	Ⅲ区東 SD78	黒色土器A類	黒色土器A類	碗			6.4	回転ナブ、ヘラ切り	ヘラミガキ、磨滅	底部 7/8	25Y8/2 灰白	N2/ 暗灰	
228	59	Ⅲ区東 SD78	黒色土器	黒色土器	碗			7.0	ヘラケズリ	ヘラミガキ	底部 3/4	10YR8/3 浅黄煙	5Y3/1 オリーゾ黒	
229	59	Ⅲ区東 SD78	土師器	土師器	碗			6.2	ナブ、ヘラケズリ、ナブ	ナブ	底部 3/8	10YR8/4 浅黄煙	10YR8/2 灰白	
230	59	Ⅲ区東 SD78	土師器	土師器	円盤状高台 杯			7.8	回転ナブ、ヘラ切り	回転ナブ	底部 1/8	25Y7/1 灰白	25Y8/2 灰白	

本文種目 番号	種目 番号	出土 地区	遺構名	種類	形状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考
231	59	Ⅳ区	SD78	土師器	円盤状高台 杯		7.6		ナテ	ナテ	底部1/8	10YR8/4 褐黄緑	7.5YR6/6 橙	
232	59	Ⅲ区東	SD78	土師器	円盤状高台 杯		7.3		回転ナテ、回転へう切り	回転ナテ	底部8/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
233	59	Ⅳ区	SD78	須恵器	皿	13.0	21.97		回転ナテ、へう切り、火 磨	回転ナテ、火磨	8/3	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
234	59	Ⅲ区東	SD78	土師器	杯	13.0	30.80		摩滅	摩滅	1/8	10YR6/3 に近い黄橙	10YR6/3 に近い黄橙	
235	59	Ⅲ区東	SD78	土師器	杯		8.9		摩滅	摩滅	底部1/8	10YR6/3 に近い黄橙	10YR6/3 に近い黄橙	
236	59	Ⅲ区東	SD78	須恵器	皿		11.0		回転ナテ、回転へう切 り、へう切り	回転ナテ	口径部1/4	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
237	59	Ⅳ区	SD78	須恵器	杯		6.8		回転ナテ、火磨	回転ナテ	底部1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
238	59	Ⅲ区東	SD78	緑釉	杯蓋	13.0			回転ナテ、捺輪	回転ナテ、捺輪	破片	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	
239	59	Ⅲ区東	SD78	土師器	杯		6.1		拍押さえ、ナテ	ナテ	底部2/8	7.5YR6/4 に近い黄	10YR7/4 に近い黄	
240	59	Ⅳ区	SD78	須恵器	壺(底部)		9.0		回転ナテ、ナテ	回転ナテ、拍押さえ	底部1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
246	60	Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	丸瓦	最大 長さ 15.0	最大 幅 9.6	最大 厚 2.3	(凸面) 張ナテ	(凹面) 布目痕	4/8	(凸面) 5Y7/1 灰白	(凹面) N3/ 暗灰	
247	60	Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	平瓦	最大 長さ 4.4	最大 幅 2.0	最大 厚 1.9	(凸面) 縄タキ目	(凹面) 布目痕	破片	(凸面) N6/ 灰	(凸面) N6/ 灰	
248	60	Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	平瓦	最大 長さ 6.2	最大 幅 5.9	最大 厚 1.6	(凸面) 縄タキ目、板 ナテ	(凹面) 布目痕	破片	(凸面) N5/ 灰	(凹面) N5/ 灰	
249	60	Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	丸瓦	最大 長さ 5.4	最大 幅 6.2	最大 厚 1.6	(凸面) 板ナテ	(凹面) 布目痕	破片	(凸面) N4/ 灰	(凹面) N4/ 灰	
257	63	Ⅴ区	SD79	土師器	杯	13.4			回転ナテ	回転ナテ	口径部1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
258	63	48	Ⅴ区	土師器	杯	12.0	3.8	7.1	回転ナテ、回転へう切り	回転ナテ	5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
259	63	Ⅴ区	SD83	土師器	杯	13.4	2.9	7.9	回転ナテ	回転ナテ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
260	63	Ⅴ区	SD83	土師器	杯	13.8	2.6	8.7	回転ナテ、回転へう切り	回転ナテ	5/8	10YR7/3 に近い黄橙	10YR7/3 に近い黄橙	
261	63	Ⅴ区	SD79	土師器	杯	11.0	1.9	6.8	回転へうタズリ、へう切 り	回転へうタズリ、ナテ	口径部2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
262	63	Ⅴ区	SD79	土師器	杯	10.8	2.6	2.0	回転ナテ、へう切り	回転ナテ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
263	63	Ⅴ区	SD80	土師質土器	小皿	8.5	1.2	6.0	回転ナテ、回転へう切り	回転ナテ	2/8	7.5YR7/4 に近い黄	7.5YR7/4 に近い黄	
264	63	Ⅴ区	SD79	土師器	杯		6.0		回転ナテ、ナテ	回転ナテ	4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	

標文 番号	図区 番号	出土 地区	遺物名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考	
265	63	Ⅴ区	SD79	土師器	杯		60		回転へラズリ、へラ切 り	ナテ、ナテ後板ナテ	底部5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		
266	63	Ⅴ区	SD83	土師器	碗(底部)		6.8		回転ナテ	回転ナテ	底部2/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色		
269	65	Ⅰ区西	SK01	土師器	碗(底部)		6.8		ナテ	ナテ	底部2/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白		
270	65	Ⅰ区西	SK03	黒色土師A類	碗		7.8		ナテ	ナテ	底部1/8	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色		
271	65	Ⅰ区西	SK08	須恵器	壺(底部)		12.9		ナテ	回転ナテ	底部1/8	5Y6/1 灰	N5/1 灰		
272	65	Ⅰ区西	SK07	須恵器	壺(底部)		14.2		ナテ、磨滅	指押さえ、ナテ	底部1/8	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白		
273	66	Ⅰ区中	SK07	土師器	小皿	6.1	1.1	5.4	回転ナテ、回転へラ切り	回転ナテ	2/8	7.5YR8/3 浅黄褐色	5YR7/6 褐色		
274	66	Ⅰ区中	SK12	土師器	杯		5.3		ナテ、回転へラケズリ、 へラ切り	ナテ	底部6/8	10YR7/1 灰白	10YR8/2 灰白		
275	67	Ⅰ区中	SK13	土師器	杯	12.0	2.5	8.0	回転ナテ、回転へラケズ リ、回転へラ切り	回転ナテ	1/8	7.5YR7/3 にふい煙	7.5YR7/3 にふい煙		
276	67	Ⅰ区中	SK22	土師質土器	羽釜	22.6			ナテ	板ナテ	口縁部破片	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色		
277	67	Ⅰ区中	SK22	土師質土器	土鍋	39.7			ナテ、指ナテ、格子タタ キ目	ナテ、板ナテ	1/8	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色		
278	67	Ⅰ区中	SK25	土師器	杯	10.4	1.8	6.4	回転ナテ、ナテ	回転ナテ	1/8	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白		
279	67	Ⅰ区中	SK25	土師質土器	小皿	6.4	0.9	5.4	回転ナテ、糸切り	回転ナテ	1/8	5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色		
282	68	Ⅰ区中	SK34	土師器	杯	10.3	2.2	6.3	回転ナテ、へラ切り	回転ナテ、指押さえ	2/8	7.5YR7/4 にふい煙	7.5YR7/4 にふい煙		
283	68	Ⅰ区中	SK34	土師器	杯	10.2			回転ナテ、回転へラ切り	回転ナテ	2/8	5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色		
286	68	Ⅰ区中	SK35	土師器	小皿	6.4	2.5	5.2	回転ナテ、回転へラ切り	回転ナテ	4/8	5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色		
287	68	Ⅰ区中	SK35	土師器	小皿	6.6	1.5	5.2	回転ナテ、回転へラ切り	回転ナテ	5/8	7.5YR7/4 にふい煙	5YR7/8 褐色		
288	69	Ⅰ区中	SK37	土師質土器	小皿	5.4	1.0	4.4	回転ナテ、へラ切り	回転ナテ	3/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白		
289	69	48	Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	9.7	2.2	6.0	回転ナテ、回転へラ切り	回転ナテ、ナテ	5/8	10YR8/3 浅黄褐色	2.5Y8/2 灰白	
290	69	Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	10.5	3.3	7.5	回転ナテ、へラ切り後ナ テ	回転ナテ	1/8	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄褐色		
291	69	48	Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	10.2	2.7	5.1	回転ナテ、板目破 片	回転ナテ	6/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/2 灰白	
292	69	Ⅰ区中	SK37	土師質土器	土鍋		5.5		回転ナテ、ナテ	回転ナテ	底部6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		
293	69	Ⅰ区中	SK37	土師質土器	羽釜				横ナテ、ナテ	横ナテ、板ナテ	口縁部破片	7.5YR7/4 にふい煙	7.5YR7/4 にふい煙		
294	69	Ⅰ区中	SK37	土師質土器	羽釜	24.6			ナテ、指押さえ、板ナテ	ナテ	口縁部1/8	7.5YR7/4 にふい煙	7.5YR7/4 にふい煙		
296	69	48	Ⅰ区中	SK37	青磁				焼物、回転へラケズリ	焼物	底部3/8	7.5Y6/1 灰	10Y6/2 オリーブ灰		
296	70	49	Ⅰ区中	SK38	白磁	18.1			焼物	焼物	口縁部破片	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白		
297	70	49	Ⅰ区中	SK40	土師器	杯	9.8	6.2	回転ナテ	回転ナテ	4/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白		

館文 番号	棟別 番号	出 土 場 所	遺 構 名	種 類	器 種	口 径 高 底 径 (cm)	底 径 (cm)	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	残 存 非	色 調 (外 面)	色 調 (内 面)	備 考
299	72	50	I区中SK52 No 2	土師質土器	土鍋	16.8	9.5	ナテ、指押さえ	ナテ	7/8	25YR6/8 橙	7.5YR7/3 に近い赤	
300	72	50	I区中SK52	土師器	杯			5.7 回転ナテ、回転ヘラ切り	回転ナテ	6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
301	72	50	I区中SK52	土師質土器	小皿	8.6	1.4	7.2 ナテ、ヘラ切り	ヘラケズリ、ナテ	口縁部 7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	
302	72	50	I区中SK52	土師質土器	小皿	8.2	1.5	6.8 回転ナテ、回転ヘラ切り	回転ナテ	6/8	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	
303	73		I区中SK53	土師質土器	甕			橋ナテ	橋ナテ、刷毛目	口縁部破片	10YR7/3 に近い赤	10YR7/3 に近い赤	
304	73		I区中SK53	備前焼	甕(底部)			橋ナテ、ナテ、ヘラケズリ	橋ナテ、ナテ	2/8	7.5YR5/4 に近い赤	7.5YR5/4 に近い赤	
306	74		I区東SK42	土師質土器	小皿	7.1	1.5	4.8 回転ナテ、板目直	回転ナテ、回転ナテ後ナテ	3/8	10YR7/4 に近い黄	7.5YR6/6 橙	
307	76		Ⅵ区SK74	土師質土器	羽釜	24.0		ナテ、指押さえ、橋ナテ、指押さえ	ナテ、橋ナテ	口縁部破片	10YR8/3 浅黄	10YR8/3 浅黄	
308	76	50	Ⅵ区SK74	土師器	土鍋	最大 径4.2	最大 幅1.4	ナテ	ナテ	3/8	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	
309	77	51	Ⅵ区SK77	土師質土器	焙烙	50.4		ナテ、指押さえ	ナテ、指押さえ、橋ナテ	4/8	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 に近い赤	
310	78	51	I区西包含層	青磁	柄			焙烙	縁餅	口縁部破片	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	
311	78		I区西包含層	土師器	杯			5.8 回転ナテ、回転ヘラ切り	ナテ	底部 3/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
312	78		I区西包含層	土師質土器	羽釜	24.2		指押さえ後ナテ、ナテ、指押さえ	橋ナテ	口縁部 1/8	7.5YR7/4 に近い赤	7.5YR7/3 に近い赤	
313	78		I区西包含層	備前焼?	埴鉢			12.8 ナテ、橋ナテ	橋ナテ	底部 2/8	5YR6/3 に近い赤	5YR6/6 橙	
314	79		I区中包含層	須恵器	杯	12.5		回転ナテ	回転ナテ	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
315	79		I区中包含層	須恵器	杯	13.6		回転ナテ	回転ナテ	口縁部破片	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	
316	79		I区中包含層	須恵器	杯	17.0		回転ナテ後縁輪	回転ナテ後縁輪	1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
317	79		I区中包含層	須恵器	埴鉢			ナテ、指押さえ、橋ナテ	回転ナテ	口縁部破片	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	
318	79		I区中包含層	須恵器	埴鉢			ナテ、指押さえ	ナテ	口縁部破片	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	
319	79		I区中包含層	土師質土器	土鍋			ナテ、指押さえ	ナテ	口縁部破片	7.5YR5/2 灰輪	7.5YR7/4 に近い赤	
320	79		I区中包含層	須恵器	甕(底部)	12.8		回転ナテ、橋ナテ後回転ナテ、ナテ	回転ナテ、ナテ	底部 2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
321	79		I区中包含層	土師質土器	羽釜			ナテ、指押さえ	ナテ	口縁部破片	5YR5/3 に近い赤	5YR5/3 に近い赤	
322	79		I区中包含層	土師質土器	羽釜	24.3		指押さえ後ナテ	指押さえ後ナテ、ナテ	口縁部 1/8	7.5YR8/3 浅黄	7.5YR8/3 浅黄	
323	79		I区中包含層	土師質土器	羽釜	26.0		ナテ、橋ナテ	ナテ	口縁部 1/8	5YR5/3 に近い赤	5YR5/3 に近い赤	
324	79		I区中包含層	土師質土器	羽釜	26.4		ナテ、ヘラケズリ、指押さえ	ナテ、ナテ後指押さえ	口縁部 1/8	7.5YR6/4 に近い赤	7.5YR6/6 橙	

本文 番号	図面 番号	出土 地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
325	79	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋	31.0		ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部1/8	75YR6/4にぶい遣	75YR7/3にぶい遣		
326	79	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋	29.8		ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	10YR7/3にぶい遣	10YR8/2灰白		
327	79	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋			指ナデ、指押さえ、ナデ	指ナデ、指押さえ、ナデ	胴1本	75YR6/3にぶい遣	5YR6/6遣		
328	79	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋			指ナデ	指押さえ	胴1本	10YR5/1褐灰	10YR6/3にぶい遣		
329	80	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋	21.4		ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	5YR7/6遣	75YR7/4にぶい遣		
330	80	I区中 包含層	土師質土器	羽蓋	23.8		ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	口縁部破片	10YR7/3にぶい遣	10YR8/4浅黄遣		
331	80	I区中 包含層	土師質土器	指鉢			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	5Y6/1灰	5Y5/1灰		
332	80	I区中 包含層	陶器	皿		5.8	焼地	焼地	底部1/8	10YR7/2にぶい遣	10YR7/2にぶい遣		
335	81	I区東 SX01	土師質土器	小皿	7.7	1.5	回転ナデ、ヘラ切り後板	回転ナデ	3/8	10YR6/2灰黄褐	10YR6/1褐灰		
336	81	I区東 包含層	白磁	椀		6.4	回転ヘラケズリ、回転ナデ	焼地	底部2/8	5Y8/1灰	5Y8/1灰		
337	81	I区東 SX01	土師質土器	羽蓋	22.7		ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	10YR7/6明黄褐	75YR7/6遣		
338	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			回転ナデ	ナデ	つまみ部6/8	75Y8/1灰白	75Y8/1灰白		
339	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			ナデ	ナデ	つまみ部7/8	N6/灰	N6/灰		
340	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			回転ナデ	回転ナデ	つまみ部8/8	N6/灰	N6/灰		
341	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			ナデ	ナデ	つまみ部6/8	N5/灰	N5/灰		
342	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			ナデ、回転ナデ	回転ナデ	つまみ部5/8	N6/灰	N6/灰		
343	82	II区西 包含層	須恵器	蓋			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N4/灰	N7/灰白		
344	82	II区西 包含層	須恵器	蓋	15.0	1.6	回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部1/8	N6/灰	N6/灰		
345	82	II区西 包含層	須恵器	蓋	13.8		回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	1/8	N6/灰	N6/灰		
346	82	II区西 包含層	須恵器	蓋	15.6		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部破片	N6/灰	N6/灰		
347	82	II区西 包含層	須恵器	蓋	11.0		ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	N7/灰白	N7/灰白		
348	82	II区西 包含層	須恵器	杯			回転ナデ	回転ナデ	1/8	N5/灰	N6/灰		
349	82	II区西 包含層	須恵器	杯	16.0		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	N6/灰	N6/灰		
350	82	II区西 包含層	須恵器	杯	12.9		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白		
351	82	II区西 包含層	須恵器	杯		7.8	回転ナデ	回転ナデ	底部2/8	N6/灰	N6/灰		
352	82	II区西 包含層	須恵器	杯		12.0	回転ナデ	回転ナデ	底部1/8	N6/灰	N6/灰		
353	82	II区西 包含層	須恵器	杯		7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部1/8	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白		
354	82	II区西 包含層	須恵器	杯		5.8	回転ナデ	回転ナデ	底部2/8	N5/灰	N5/灰		

本文 番号	図録 番号	出土 地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
355	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		120	回転ナズ、ヘラケズリ、 ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	
356	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		89	回転ナズ、ヘラケズリ、 ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
357	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		68	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	底部3/8	N6/灰	N6/灰	
358	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		121	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N5/灰	N5/灰	
359	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		74	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	25Y7/1灰白	N7/灰白	
360	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		59	回転ナズ	回転ナズ	底部2/8	N7/灰白	N7/灰白	
361	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		63	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	底部2/8	25Y8/1灰白	25Y7/1灰白	
362	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		100	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	
363	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		94	回転ナズ	回転ナズ、ナズ	底部2/8	N6/灰	N6/灰	
364	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		70	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N5/灰	N5/灰	
365	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		90	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
366	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		105	回転ナズ	回転ナズ	底部1/8	N7/灰白	N7/灰白	
367	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		80	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	2/8	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	
368	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯		66	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
369	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺(底部)	131		ナズ、回転ヘラケズリ、 ヘラ切り	ナズ	底部破片	5Y5/1灰	N7/灰白	
370	82	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺(底部)		160	格子タタキ目、ヘラケズ リ、ナズ	壺ナズ、ナズ	底部破片	N5/灰	N6/灰	
371	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺		99	回転ナズ	回転ナズ	底部1/8	25YR5/2灰赤	25Y5/1赤灰	
372	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺		90	回転ナズ	差減	口縁部1/8	N6/灰	N6/灰	
373	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺			回転ナズ	回転ナズ	頸部5/8	5Y5/1灰	5Y5/1灰	
374	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺			回転ナズ	回転ナズ	口縁部破片	N7/灰白	N7/灰白	
375	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	短頸壺		210	ナズ	ナズ	底部破片	25Y7/2灰黄	25Y7/2灰黄	
375	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺	119		ナズ	指押さえ、壺ナズ	口縁部破片	N6/灰	N6/灰	
376	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺		210	ナズ	ナズ	脚部破片	25Y7/2灰黄	25Y7/2灰黄	
377	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺	242		回転ナズ	回転ナズ	口縁部1/8	N5/灰	N6/灰	
378	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺(底部)		84	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部2/8	N6/灰	N6/灰	
379	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺		86	ナズ、ヘラケズリ	回転ナズ、指押さえ	底部2/8	N5/灰	N6/灰	
380	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺(底部)		70	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	底部3/8	N5/灰	N5/灰	
381	83	Ⅱ区西	包含層	須恵器	平瓶	52		回転ナズ	回転ナズ	口縁部2/8	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	

国分 番号	出土 場所	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 (外側)	調整 (内側)	残存率	色調 (外側)	色調 (内側)	備考
382	Ⅱ区西 包含層	須恵器	平瓶	ナデ			ナデ	回転ナデ	片断	N7/灰白	N5/灰	
383	Ⅱ区西 包含層	土師質土器	甕?	摩滅			摩滅	摩滅	口縁部破片	75YR8/4 浅黄褐色	75YR8/4 浅黄褐色	
384	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	回転ナデ、ヘラ切り後ナ デ	6.0		摩滅	回転ナデ	底部 3/8	5YR7/4 に近い 黄褐色	5YR7/4 に近い 黄褐色	
385	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	摩滅	11.9		摩滅	摩滅	口縁部破片	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	
386	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	6.8 ナデ	6.8		ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
387	Ⅱ区西 包含層	土師器	柄	5.5 ナデ、ヘラケズリ	6.5		ナデ	ナデ	口縁部 2/8	25YR8/3 淡黄	25YR8/3 淡黄	
388	Ⅱ区西 包含層	土師器	柄	7.1 回転ナデ	7.1		回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	
389	Ⅱ区西 包含層	土師器	柄	7.0 回転ナデ、ヘラ切り	7.0		回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	5YR5/4 に近い赤褐色	25YR8/2 灰白	
390	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	7.1 ナデ	7.1		ナデ	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰黄褐色	
391	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	8.4 ナデ	8.4		ナデ	ナデ	底部 2/8	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	
392	Ⅱ区西 包含層	土師器	皿	15.2 1.8 12.0 回転ナデ	15.2		回転ナデ	回転ナデ	2/8	25YR8/2 灰白	25YR8/2 灰白	
393	Ⅱ区西 包含層	土師器	柄	7.9 摩滅	7.9		摩滅	摩滅	底部 4/8	10YR8/1 灰白	25Y4/1 黄灰	
394	Ⅱ区西 包含層	土師器	柄	7.2 ナデ	7.2		ナデ	回転ナデ	底部 3/8	25YR8/2 灰白	5YR6/4 に近い 黄褐色	
395	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	7.0 回転ナデ、ナデ	7.0		回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 8/8	7.5YR8/3 浅黄褐色	7.5YR8/3 浅黄褐色	
396	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	8.0 ナデ、地輪、ヘラ切り	8.0		ナデ、地輪、ヘラ切り	地輪、ナデ	底部 1/8	25YR8/1 灰白、 25GY7/1 明オリ 灰	25YR8/1 灰白、 25GY7/1 明オリ 灰	
397	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	5.0 ナデ	5.0		回転ナデ、ヘラ切り後ナ デ	ヘラミガキ	底部 3/8	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	
398	Ⅱ区西 包含層	須恵器	杯	13.3 3.2 9.0 回転ナデ	13.3		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N7/灰白	N7/灰白	
399	Ⅱ区西 包含層	須恵器	杯	12.5 3.9 7.2 回転ナデ、ヘラケズリ、 回転ヘラ切り	12.5		回転ナデ、ヘラケズリ、 回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	N7/灰白	N7/灰白	
400	Ⅱ区西 包含層	土師質土器	甕	3.2 摩滅	3.2		摩滅	摩滅	口縁部 1/8	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	
401	Ⅱ区西 包含層	土師質土器	羽釜	ナデ、指押さえ、顔毛目	25.3		ナデ、指押さえ、顔毛目	ナデ	口縁部 1/8	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰黄褐色	
402	Ⅱ区西 包含層	土師質土器	羽釜	横ナデ、指押さえ			横ナデ	横ナデ	底部 1/8	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	
403	Ⅱ区西 包含層	縄文土器	漆鉢(底部)	4.4 ナデ	4.4		ナデ	ナデ	底部 8/8	25Y7/2 灰黄	25Y3/1 黒褐色	
404	Ⅱ区西 包含層	縄文土器	漆鉢(流部)	5.5 摩滅	5.5		摩滅	横ナデ	底部 8/8	25Y7/2 灰黄	25Y6/3 に近い 黄褐色	
405	Ⅱ区西 包含層	黒色土器A類	柄	6.0 ナデ	6.0		ナデ	摩滅	底部 1/8	7.5YR8/6 浅黄褐色	25Y3/1 黒褐色	
406	Ⅱ区西 包含層	黒色土器A類	柄	7.2 ナデ	7.2		ナデ	ヘラミガキ	底部 1/8	10YR8/2 灰白	25Y3/1 黒褐色	
407	Ⅱ区西 包含層	黒色土器A類	柄	8.3 摩滅	8.3		摩滅	摩滅	底部 2/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
408	Ⅱ区西 包含層	土師器	土師	最大 長さ 4.5	最大 幅 1.6		ナデ	ナデ	8/8	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	

標文 番号	回文 番号	出土 地区	遺跡名	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
409	84	Ⅱ区西	包含層	土師器	土師	最大 長 4.5	最大 幅 1.6	最大 厚 1.6	ナデ	ナデ	8/8	25Y6/2灰黄	25Y6/2灰黄	
410	84	Ⅱ区西	包含層	土師器	土師	最大 長 4.8	最大 幅 1.7	最大 厚 1.6	ナデ	ナデ	7/8	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	
411	84	Ⅱ区西	包含層	土師器	土師	最大 長 3.5	最大 幅 1.7	最大 厚 1.5	ナデ	ナデ	6/8	25Y8/1灰白	25Y8/1灰白	
412	84	Ⅱ区西	包含層	土師器	土師	最大 長 3.5	最大 幅 1.2	最大 厚 1.1	ナデ	ナデ	7/8	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	
413	84	Ⅱ区西	包含層	黒土器点刻 緑釉陶器	甕	202			ナデ	ナデ	口縁部破片	25Y8/2灰白	25Y4/1黄灰	
414	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	156			筋粒	筋粒	口縁部 1/8	25GY8/1灰白	25GY8/1灰白	
415	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕				回転ナデ底縁輪	回転ナデ底縁輪	体部 1/8	10Y8/2灰白	10Y8/2灰白	
416	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	8.9			筋輪、回転ナデ	筋輪、ヘラ切り	底部 1/8	5Y7/1灰白、 10Y6/2オリーブ灰	5Y7/1灰白、 10Y6/2オリーブ灰	
417	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	6.6			回転ナデ底縁輪	回転ナデ底縁輪	底部 1/8	25GY8/1灰白	25GY8/1灰白	
418	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	7.5			回転ナデ底縁輪	回転ナデ底縁輪	底部 2/8	10Y8/1灰白	10Y8/1灰白	
419	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	6.8			筋輪	筋輪	底部 1/8	25GY8/1灰白	25GY8/1灰白	
420	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	6.2			回転ナデ底縁輪	回転ナデ底縁輪	底部 1/8	25GY7/1明オリーブ灰	25GY7/1明オリーブ灰	
421	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	5.9			筋輪、削り出し高台	筋輪	底部 4/8	5GY7/1明オリーブ灰、 5YR7/3にふい	5GY7/1明オリーブ灰	
422	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕	7.7			筋輪	筋輪	底部 1/8	10Y7/2灰白	10Y7/2灰白	
423	84	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	甕				筋輪	筋輪	体部破片	10Y7/2灰白	10Y7/2灰白	
424	84	Ⅱ区西	包含層	陶胎染付	皿				筋輪	筋輪	口縁部破片	5GY8/1灰白	5GY8/1灰白	
425	84	Ⅱ区西	包含層	青磁	甕	4.8			筋輪	筋輪	底部 1/8	10GY6/1緑灰	10GY6/1緑灰	
426	84	Ⅱ区西	包含層	白磁	甕	6.1			回転ナデ	筋輪	底部 1/8	5Y8/1灰白	10Y8/1灰白	
427	84	Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺				回転ナデ、回転ヘラケラズリ	ナデ	4/8	N6/灰	N6/灰	
428	84	Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部&8	N5/灰	N5/灰	
429	84	Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺				ナデ	ナデ	つまみ部&8	N7/灰白	N7/灰白	
430	84	Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺				回転ナデ、ヘラ切り	ナデ	つまみ部&8	N5/灰	N5/灰	

様式番号	図面番号	出土地区	遺構名	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
457	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺	182			回転ナズ	回転ナズ	つまみ部8/8	N7/灰白		
458	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯蓋		15	186	回転ヘラケズリ、回転ナズ	回転ナズ	口縁部破片	10YR6/1 褐灰	N4/灰	
459	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯蓋				回転ナズ	ナズ、回転ナズ	2/8	N5/灰	N5/灰	
460	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯蓋	190			回転ナズ	回転ナズ	1/8	N4/灰	N4/灰	
461	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯蓋		223		回転ナズ	回転ナズ	1/8	75Y6/1 灰	75Y6/1 灰	
462	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	皿	153	18	128	回転ナズ	回転ナズ	1/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
463	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	136			回転ナズ	回転ナズ	1/8	N7/灰白	N7/灰白	
464	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	145	34	110	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	口縁部 2/8	N7/灰白	N7/灰白	
465	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	114			回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	1/8	25Y7/1 灰白	25Y7/1 灰白	
466	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	106			回転ヘラケズリ、回転ナズ	回転ナズ、ナズ	底部 3/8	N6/灰	N6/灰	
467	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	90			回転ナズ、ヘラケズリ	回転ナズ、ナズ	4/8	N4/灰	N4/灰	
468	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	112			回転ナズ	回転ナズ、ナズ	1/8	N6/灰	N6/灰	
469	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	104			回転ナズ、ヘラケズリ	回転ナズ、ナズ	底部 1/8	N6/灰	25Y8/1 灰白	
470	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	97			回転ナズ、ヘラ切り	回転ヘラケズリ	底部破片	N6/灰	N7/灰白	
471	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	102			回転ナズ	ナズ	2/8	N7/灰白	N7/灰白	
472	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	76			回転ナズ	回転ナズ	底部 1/8	N6/灰	N6/灰	
473	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	106			回転ナズ、底面爪痕?	ナズ	底部 2/8	N5/灰	N5/灰	
474	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	100			回転ナズ	回転ナズ	底部 1/8	N4/灰	N4/灰	
475	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	杯	73			回転ナズ、ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナズ	底部 2/8	N7/灰白	N7/灰白	
476	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺	256			回転ナズ、タタキ目	回転ナズ、樽ナズ	底部 2/8	N4/灰	N5/灰	
477	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺	215			自然釉	自然釉	口縁部 1/8	N5/灰	N7/灰白	
478	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺	200			回転ナズ	回転ナズ	口縁部 1/8	25GY5/1 オリーブ灰	25GY5/1 オリーブ灰	
479	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺	218			施釉、回転ナズ	施釉	口縁部 1/8	N7/灰白	N7/灰白	
480	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺 (底部)		112		回転ナズ、ナズ	回転ナズ	口縁部 1/8	N6/灰	75Y5/2 灰オリーブ	
481	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺 (底部)		120		ナズ、回転ナズ	回転ナズ	1/8	N5/灰	N7/灰白	
482	86	Ⅱ区東 包含層	須恵器	壺 (底部)		100		ナズ、回転ナズ	回転ナズ、ナズ	底部 2/8	N7/灰白	N7/灰白	
483	87	Ⅱ区東 包含層	土師器	杯	53			回転ナズ、ヘラ切り後回転ナズ	回転ナズ	底部 4/8	5YR8/3 赤褐色	5YR8/3 赤褐色	

編年 番号	団別 番号	出土 地区	遺構名	種類	器型	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
484	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	杯	11.9	3.1	6.3	回転ナズ、ハラ切り	回転ナズ	底部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
485	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	杯	13.8	3.3	9.2	ナズ	ナズ	4/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
486	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	杯				回転ナズ、ハラ切り	回転ナズ	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
487	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	碗			7.5	回転ナズ、ナズ	回転ナズ	底部 5/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
488	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	碗			5.9	回転ナズ、ハラ切り	回転ナズ	底部 3/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	
489	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	碗			6.4	回転ナズ	ナズ	底部 2/8	10YR7/4 灰白	2.5Y6/1 黄灰	
490	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	碗	16.4	4.8	7.0	ナズ	ハラミガキ	1/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	
491	87	Ⅱ区東	包合層	土師質土器	蓋	14.8			ナズ、磨滅	ナズ	口縁部 1/8	5YR6/6 黄	10YR3/1 黒褐	
492	87	Ⅱ区東	包合層	土師質土器	蓋	35.6			橋ナズ、ナズ	橋ナズ、ナズ	口縁部 破片	7.5YR6/4 におい橙	10YR7/3 におい橙	
493	87	Ⅱ区東	包合層	土師質土器	羽蓋	29.0			回転ナズ、指押さえ	朝毛目、ナズ	口縁部 1/8	10YR8/3 におい黄橙	10YR7/3 におい黄橙	
494	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	碗			10.0	橋ナズ	ナズ、橋ナズ	底部 7/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
495	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗	6.8			回転ナズ、ハラ切り	ハラミガキ	6/8	2.5Y8/2 灰白	7.5Y3/1 オリーブ黒	
496	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗	4.8			ナズ	ハラミガキ	底部 7/8	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y2/1 黒	
497	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗	7.0			回転ナズ	ハラミガキ	底部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR2/1 黒	
498	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗	16.3	3.8	7.4	ナズ	ハラミガキ	3/8	2.5Y7/2 灰黄	5Y3/1 オリーブ黒	
499	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗	16.0	4.2	6.8	ナズ	ハラミガキ	底部 2/8	10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	
500	87	Ⅱ区東	包合層	黒色土器A類	碗			9.4	回転ナズ、ナズ	ハラミガキ	底部 2/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR2/1 黒	
501	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	碗				焼軸	焼軸	体部 破片	7.5Y6/3 オリーブ黄	7.5Y5/3 灰オリーブ	
502	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	碗?				焼軸	焼軸	口縁部 破片	7.5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y5/3 灰オリーブ	
503	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	碗				焼軸	焼軸	口縁部 破片	7.5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y5/3 灰オリーブ	
504	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	皿?	5.8			ナズ、焼軸	ナズ、焼軸	底部 1/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	
505	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	碗	6.2			焼軸	焼軸	底部 1/8	2.5GY6/1 オリーブ 灰	2.5GY6/4 オリーブ 灰	
506	87	Ⅱ区東	包合層	緑釉陶器	碗	7.6			焼軸	焼軸	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
507	87	Ⅱ区東	包合層	白磁	碗	7.4			焼軸、ナズ	焼軸	底部 1/8	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	
508	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	土埴	最大 径 3.1	最大 径 1.3	最大 厚 1.4	ナズ	ナズ	7/8	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
509	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	土埴				ナズ	ナズ	7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
510	87	Ⅱ区東	包合層	土師器	土埴	最大 径 3.8	最大 径 1.3	最大 厚 1.4	磨滅	ナズ	8/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	

標文 番号	埋戻 番号	区画 番号	出土 地区	遺構名	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	色調 (内面)	備考	
511	87	50	Ⅱ区南 包含層	土師器	土俵	最大径 47	最大径 1.5	ナデ	ナデ	8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		
512	88		Ⅱ区東 包含層	土師質土器	甕	最大径 47	最大径 1.5	ナデ	ナデ	体部破片	7.5YR6/6 黄	5YR6/6 黄		
531	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			ナデ	ナデ	つまみ部8/8	NS/灰	NS/灰		
532	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			回転ナデ	回転ナデ	つまみ部7/8	NS/灰	NS/灰		
533	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			回転ナデ	回転ナデ	つまみ部8/8	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰		
534	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			回転ナデ	回転ナデ	3/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白		
535	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白		
536	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	140		回転ナデ	回転ナデ後ナデ	つまみ部8/8	N3/明灰	N4/灰		
537	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	110	1.2	回転ナデ	回転ナデ	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		
538	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	107		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	N4/灰	N4/灰		
539	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕			回転ナデ	回転ナデ	1/8	NS/灰	NS/灰		
540	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	138		回転ナデ	回転ナデ、ナデ	口縁部1/8	2.5GY3/1 明オリ 灰	7.5GY4/1 暗緑灰		
541	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	176	1.2	ヘラ切り、回転ヘラケズ り、回転ナデ	回転ナデ後ナデ	口縁部1/8	5Y4/1 灰	5Y5/1 灰		
542	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	164	1.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部1/8	NS/灰	NS/灰		
543	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	181		回転ナデ切り、回転ナデ	回転ナデ	1/8	N6/3 灰白	N6/灰		
544	89	55	Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	168		回転ヘラ切り後ナデ、回 転ナデ	回転ナデ、ナデ	3/8	N6/灰	N6/灰		
545	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	154		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N6/灰	N6/灰		
546	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	甕	182	1.5	131 り	回転ナデ、回転ヘラケズ	回転ナデ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
547	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	NS/灰	NS/灰		
548	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	130	3.0	87 後ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り	2/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄		
549	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	128		回転ナデ	回転ナデ	1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白		
550	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	114		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	N3/灰	N3/灰		
551	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	144		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	10Y6/1 灰	10Y7/1 灰白		
552	89		Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	148		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	10Y6/1 灰	10Y7/1 灰白		
553	89	55	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	131	3.0	82	回転ナデ、回転ヘラ切り	4/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白		
554	89	55	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	130	3.3	84	回転ナデ、ヘラ切り	5/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白		

標文番号	国産番号	出土地区	遺構名	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考
555	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	15.0			回転ナズ	回転ナズ	口縁部2/8	N4/灰		
556	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	14.6	19	10.4	回転ナズ、ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	口縁部1/8	N7/灰白	N4/灰白	
557	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	13.7			回転ナズ	回転ナズ	口縁部破片	10YR5/2 灰黄褐	N5/灰	
558	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	9.8			回転ナズ	回転ナズ	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
559	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	15.3	3.1	10.2	回転ナズ	回転ナズ	1/8	N5/灰	N7/灰白	
560	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	13.3	4.9	8.6	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	2/8	25Y7/4 黄灰	N5/灰	
561	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	7.5			回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	2/8	25Y7/4 黄灰	N4/灰	
562	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	9.7			回転ナズ、ナズ	回転ナズ	底部1/8	7.5YR5/3 に近い黄	N4/灰	
563	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	8.0			回転ナズ、回転ヘラケケス り、回転ヘラ切り	回転ナズ、ナズ	3/8	N4/灰	N4/灰	
564	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	13.8	3.6	9.6	回転ナズ	回転ナズ、ナズ	3/8	5Y6/1 灰	N6/灰	
565	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	11.5	4.7	8.4	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ	3/8	7.5Y5/1 灰	2.5Y6/2 灰黄	
566	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	7.3			回転ナズ、ナズ	回転ナズ後ナズ	底部3/8	N4/灰	N4/灰	
567	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	8.7			回転ナズ	回転ナズ	底部3/8	N4/灰	N4/灰	
568	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	7.9			回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N7/灰白	N7/灰白	
569	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	9.8			回転ナズ、ナズ	回転ナズ、ナズ	底部1/8	N5/灰	N5/灰	
570	89	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	15.4	2.1	10.9	回転ナズ、ヘラケケス り、回転ヘラ切り後ナズ	回転ナズ	7/8	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	
571	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	14.6			回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ	口縁部1/8	N8/灰白	5Y8/1 灰白	
572	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	14.6	1.5	11.8	回転ナズ、ヘラ切り	回転ナズ、回転ナズ後ナズ	2/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
573	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	16.1	1.9	12.6	回転ナズ、回転ヘラ切り	回転ナズ、ナズ	3/8	N6/灰	N6/灰	
574	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	15.7			回転ナズ、ナズ	回転ナズ、ナズ	口縁部1/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
575	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	盤(Or皿)	14.4			焼物、ヘラ切り	回転ナズ	底部1/8	N3/黄灰	N4/灰	
576	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯	5.8			ナズ	ナズ	底部3/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
577	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	高杯	21.1			回転ナズ、回転ヘラケケス り	回転ナズ	2/8	7.5Y5/1 灰	10YR5/1 黄灰	
578	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	16.3			回転ナズ、タケ目	回転ナズ	口縁部1/8	N4/灰	N4/灰	
579	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	皿	26.9			回転ナズ	回転ナズ	口縁部破片	N8/灰白	N8/灰白	
580	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯(底部)	9.7			回転ナズ	回転ナズ	3/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
581	90	Ⅱ区南 包含層	須恵器	杯(底部)	5.3			回転ナズ、ナズ	回転ナズ	3/8	N4/灰	10Y6/1 灰	

標文番号	区画番号	出土 場所	器種名	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外)	色調 (内)	備考
582	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	杯 (底部)	97			回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子	4/8	N6/灰	N6/灰	
583	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	88			ヘラケズリ後ナナ子、ナナ子、 回転ヘラ切り	回転ナナ子	底部2/8	N4/灰	N4/灰	
584	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	134			回転ナナ子	回転ナナ子	底部2/8	N5/灰	N6/灰	
585	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	111			回転ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子後ナナ子	底部2/8	N4/灰	N4/灰	
586	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	114			回転ナナ子、ヘラケズリ、 ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子	2/8	N5/灰	N5/灰	
587	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	100			回転ナナ子	回転ナナ子	底部1/8	N7/灰白	N7/灰白	
588	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺 (底部)	123			回転ナナ子、自然釉	回転ナナ子、自然釉	底部1/8	N5/灰	N7/灰白	
589	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	杯	138			回転ナナ子	回転ナナ子	底部1/8	N6/灰	N6/灰	
590	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	杯	85			回転ナナ子	回転ナナ子	底部1/8	N5/灰	N6/灰	
591	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺	84			回転ナナ子	回転ナナ子	底部3/8	10Y4/1灰	25Y6/2灰黄	
592	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	壺	88			回転ナナ子、自然釉	回転ナナ子	底部2/8	25Y8/1灰白	N8/灰白	
593	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	杯 (底部)	77			回転ナナ子、自然釉、回転 ヘラ切り	回転ナナ子、自然釉	3/8	75Y7/1灰白	10Y6/1灰	
594	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	杯 (底部)	90			回転ナナ子、ナナ子	回転ナナ子	底部4/8	N5/灰	N5/灰	
595	90	Ⅱ区南 包含層	須臾器	高坏				回転ナナ子	回転ナナ子	底部2/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
596	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	135	23	86	回転ナナ子、回転ヘラ切り 後ナナ子	回転ナナ子	3/8	25YR6/4 におい橙	75YR7/3 におい橙	
597	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	140	33	107	回転ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子	3/8	25YR7/4 淡赤橙	10YR7/2 におい黄橙	
598	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	144			ナナ子、ヘラミガキ ナナ子、回転ヘラ切り後ナ ナ子	回転ナナ子 ナナ子、ヘラミガキ後磨削 文	口縁部破片	5YR6/6 橙	5YR5/4 におい赤濁 赤	
599	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	70			回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子	底部5/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 におい黄橙	
600	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	66			回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子	底部8/8	75YR7/4 におい橙	75YR7/6 橙	
601	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	72			回転ナナ子、回転ヘラ切り	回転ナナ子、ナナ子	3/8	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	
602	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	91			回転ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子	3/8	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	
603	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	94			ナナ子、回転ナナ子	ナナ子	3/8	75YR6/4 におい橙	5YR5/6 明赤濁	
604	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	72			回転ナナ子、ヘラ切り	回転ナナ子	底部1/8	75YR8/4 浅黄橙	75YR8/3 浅黄橙	
605	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	杯	143	51	82	回転ナナ子、ヘラケズリ、 ヘラ切り	回転ナナ子	底部5/8	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	
606	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	皿				回転ナナ子	回転ナナ子	口縁部破片	75YR7/6 橙	10YR7/4 におい黄橙	赤色化粧土
607	91	Ⅱ区南 包含層	土師器	皿				回転ナナ子	回転ナナ子、磨削文	口縁部破片	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	内外面片

編文 番号	図版 番号	出土 地区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 (外面)	調整 (内面)	残存率	色調 (外面)	備考
608	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿	16.0	29	140 回転ナナ、ヘラ切り	回転ナナ	2/8	25YR7/6 橙	
609	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿		140	140 回転ナナ、ヘラナズリ	ナナ	底部1/8	10YR8/3にふい黄橙	赤色化粧土
610	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿		180	180 回転ナナ	ヘラミガキ	底部1/8	5YR7/6 橙	赤色化粧土
611	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿	25.0	33	204 摩滅、回転ナナ	摩滅	1/8	75YR7/4にふい橙	赤色顔料 付着
612	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿		198	198 回転ナナ	初観	底部1/8	75YR7/4にふい橙	赤色化粧土
613	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		64	64 回転ナナ、ヘラ切り	ヘラミガキ	底部8/8	25Y8/2 黄黄	75Y3/1オリーブ黒
614	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		68	68 回転ナナ、ヘラ切り	ヘラミガキ	底部8/8	25Y6/1 黄黄	5Y3/1オリーブ黒
615	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		66	66 回転ナナ、回転ヘラ切り	ヘラミガキ	底部7/8	10YR7/3にふい黄橙	10YR8/1黒焼
616	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	碗		68	68 回転ナナ、ナナ	摩滅	底部8/8	10YR7/3にふい黄橙	5Y3/1オリーブ黒
617	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		63	63 回転ナナ、ヘラ切り	ヘラミガキ	6/8	75YR8/6 浅黄橙	5Y3/1オリーブ黒
618	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		60	60 ナナ	ヘラミガキ後ナナ	底部2/8	10YR8/2 灰白	25Y2/1 黒
619	91	Ⅱ区南	包含層	土師器	碗		84	84 ナナ	ナナ	底部3/8	5YR7/4にふい橙	5Y3/1オリーブ黒
620	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		62	62 回転ナナ、ヘラ切り	ヘラミガキ	3/8	25Y6/2 灰黄	5Y3/1オリーブ黒
621	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		62	62 ナナ	ヘラミガキ	底部7/8	10YR8/3 浅黄橙	5Y2/1 黒
622	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗		70	70 回転ナナ、ナナ	ヘラミガキ	4/8	10YR7/2にふい黄橙	10YR2/1 黒
623	91	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	碗	13.6	4.3	63 ヘラナズリ、回転ナナ	ヘラミガキ、ナナ	5/8	25Y7/1 灰白	5Y3/1オリーブ黒
624	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	羽蓋	24.8		ナナ、指押さえ	ナナ、刷毛目	口縁部1/8	10YR7/1 灰白	10YR8/1 刷灰
625	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	壺	27.6		横ナナ、刷毛目	横ナナ、刷毛目、板ナナ	口縁部1/8	10YR7/3にふい黄橙	10YR7/3にふい黄橙
626	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	壺	24.0		横ナナ	横ナナ、刷毛目	口縁部1/8	10YR7/3にふい黄橙	10YR7/3にふい黄橙
627	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	壺			ナナ、ヘラナズリ	刷毛目、板ナナ、ナナ	口縁部破片	75YR8/3にふい橙	10YR8/4にふい橙
628	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	火鉢		11.9	横ナナ	ナナ、横ナナ	体部破片	10YR7/1 灰白	10YR8/2 灰黄橙
629	92	Ⅱ区南	包含層	土師器	壺?			刷毛目、ナナ	ナナ、指押さえ	肥手部8/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 浅黄橙
630	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	壺	27.0		ナナ	ナナ	口縁部1/8	10YR5/3にふい黄橙	10YR5/3にふい黄橙
631	92	Ⅱ区南	包含層	土師質土器	土師	40.2		ナナ、刷毛目	ナナ、板ナナ	口縁部1/8	75YR8/3 浅黄橙	10YR7/3にふい黄橙
632	92	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	柄			柄輪	柄輪	口縁部破片	75Y6/3 オリーブ黄	10Y6/2 オリーブ黄
633	92	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	皿			回転ナナ、地輪	回転ナナ、地輪	口縁部破片	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰
634	92	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	柄	13.0		柄輪	柄輪	口縁部破片	75Y3/4 刷毛ナナ	75Y3/4 刷毛ナナ
635	92	Ⅱ区南	包含層	附着	鉢	12.8		ナナ、回転ヘラ切り	回転ナナ、刷毛目	底部1/8	25Y3/1 刷毛ナナ	N4/ 灰

種文番号	国別番号	出土地区	遺跡名	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整(外面)	調整(内面)	残存率	色調(外面)	色調(内面)	備考
636	92	Ⅱ区南 包含層	土師器	姉蓋				ナテ	指押さえ	2/8	5YR4/6 赤褐		
637	92	Ⅱ区南 包含層	土師器	土鐘				ナテ	ナテ	8/8	5YR6/6 黄	75Y3/1 オリーブ黒	
638	92	Ⅱ区南 包含層	土師器	土鐘				ナテ	ナテ	8/8	25Y5/1 黄灰	25Y5/1 黄灰	
639	92	Ⅱ区南 包含層	土師器	土鐘				ナテ	ナテ	8/8	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	
640	92	Ⅱ区南 包含層	土師器	土鐘				ナテ	ナテ	5/8	10YR7/3 に近い黄褐色	10YR7/3 に近い黄褐色	
643	94	Ⅱ区 包含層	土師質土器	鉢	270	97	252	ナテ	板ナテ、ナテ	1/8	25Y8/4 淡黄	25Y8/4 淡黄	
644	95	Ⅱ区西 包含層	須恵器	皿	128	16	94	回転ナテ、回転ヘラ切り	回転ナテ	1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
645	95	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	94	23	50	磨減	磨減	2/8	75YR8/3 浅黄褐色	75YR8/3 浅黄褐色	
646	95	Ⅱ区西 包含層	土師器	杯	116	33	56	回転ナテ、ヘラ切り	回転ナテ	2/8	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/2 灰白	
647	95	Ⅱ区西 包含層	埴輪焼	小皿	74	13	50	回転ナテ、ヘラ切り	回転ナテ	1/8	25YR5/4 に近い赤褐色	25YR5/4 に近い赤褐色	
648	95	Ⅱ区西 包含層	埴器	柄杓				焼物	焼物		口縁部破片	75Y7/2 灰白	
649	95	Ⅱ区西 包含層	緑釉陶器	柄杓				焼物	焼物		口縁部 1/8	10Y7/2 灰白	
650	95	Ⅱ区西 包含層	埴器	小皿	114			焼物	焼物		5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	
651	95	Ⅱ区西 包含層	厚胎灰付	碗			43	焼物	焼物		底部 1/8	10Y6/1 灰	
652	95	Ⅱ区西 包含層	厚胎灰付	碗			46	焼物	焼物		底部 3/8	25CY8/1 灰白	25CY8/1 灰白
654	96	Ⅱ区 包含層	須恵器	杯			62	回転ナテ、ヘラ切り	ナテ		底部 8/8	10Y6/1 灰	25Y8/3 淡黄
655	96	Ⅱ区 包含層	土師器	小皿	74	15	49	回転ナテ、回転ヘラ切り	回転ナテ	2/8	10YR7/3 に近い黄褐色	10YR7/3 に近い黄褐色	
656	96	Ⅱ区 包含層	土師器	円蓋状流台	126	51	66	回転ナテ、板ナテ	回転ナテ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
657	96	Ⅱ区 包含層	土師器	杯	154	49	94	回転ナテ	回転ナテ	4/8	25Y8/2 淡黄	25Y8/3 淡黄	
658	96	Ⅱ区 包含層	土師器	円蓋状高台			71	回転ナテ、回転ヘラ切り 板ナテ	回転ナテ	底部 8/8	25Y7/3 淡黄	25Y7/3 淡黄	
659	96	Ⅱ区 包含層	黒色土器A類	碗			67	磨減	回転ナテ	2/8	75YR7/4 に近い黄褐色	10YR2/1 黒	
661	97	-	包含層	須恵器	杯	138			回転ナテ	2/8	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	
662	97	-	包含層	須恵器	蓋(底部)		79	回転ナテ、回転ヘラクス リ、回転ヘラ切り	回転ナテ	3/8	N4/ 灰	N5/ 灰	
663	97	-	包含層	黒色土器A類	碗		75	ヘラ切り、回転ナテ	ヘラミガキ	底部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
664	97	-	包含層	黒色土器A類	碗	168	57	70	回転ナテ、回転ヘラクス リ	3/8	10YR8/1 灰白	10YR2/1 黒	

第5表 石器観察表

標文番号	揮回番号	図版番号	出土地区	遺構名	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
16	16	41	I区中	SP333	砥石	58	4.1	1.0	41.02	流紋岩
22	18		I区中	SP409	スクレイパー	95	35	0.9	30.64	サヌカイト
216	58		III区西	SD74	不明	65	5.5	3.75	51.96	輝石
241	59	47	III区東	SD78	石磯	23	1.8	0.4	0.91	サヌカイト
250	61		IV区	SD78	石斧	10.9	4.5	2.3	188.46	結晶片岩
251	61	47	IV区	SD78	石磯	3.7	2.0	0.4	2.07	サヌカイト
252	61		IV区	SD78	剥片	4.9	2.1	0.9	8.75	サヌカイト
253	61		IV区	SD78	スクレイパー	7.6	3.5	0.9	18.17	サヌカイト
254	61		IV区	SD78	剥片	8.5	4.9	1.3	39.13	サヌカイト
255	61		IV区	SD78	剥片	9.0	4.6	1.1	51.38	
267	63		VI区	SD83	剥片	4.0	2.7	0.8	5.97	サヌカイト
268	63		VI区	SD83	砥石	5.85	5.5	3.9	161.97	サヌカイト
427	85	53	II区西		石磯	1.5	1.3	0.2	0.45	サヌカイト
428	85	53	II区西		石磯	1.6	1.1	0.2	0.44	サヌカイト
429	85	53	II区西		石磯	1.7	1.2	0.2	0.45	サヌカイト
430	85	47	II区西		石磯	1.7	1.0	0.3	0.39	サヌカイト
431	85	47	II区西		石磯	2.0	1.2	0.4	0.51	サヌカイト
432	85	53	II区西		石磯	1.6	1.3	0.4	0.65	サヌカイト
433	85	47	II区西		石磯	2.2	1.6	0.3	0.75	サヌカイト
434	85	47	II区西		石磯	2.2	1.6	0.4	0.63	サヌカイト
435	85	53	II区西		石磯	2.3	1.5	0.4	0.76	サヌカイト
436	85	53	II区西		石磯	1.6	1.4	0.2	0.45	サヌカイト
437	85	53	II区西		石磯	2.4	0.9	0.3	0.36	サヌカイト
438	85	53	II区西		石磯	2.8	2.2	0.4	2.13	サヌカイト
439	85	47	II区西		石磯	1.9	1.6	0.3	0.63	サヌカイト
440	85	53	II区西		石磯	2.0	1.1	0.3	0.58	サヌカイト
441	85	47	II区西		石磯	3.1	1.8	0.5	1.94	サヌカイト
442	85	53	II区西		石磯	1.9	1.6	0.3	0.47	サヌカイト
443	85	47	II区西		石磯	2.8	2.2	0.4	1.59	サヌカイト

報文番号	押回番号	図版番号	出土地区	遺構名	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
444	85		Ⅱ区西		彫器	4.8	2.5	1.1	17.23	サヌカイト
445	85	41	Ⅱ区西		矢頭器	6.1	2.6	1.0	16.57	サヌカイト
446	85		Ⅱ区西		石砲丁	4.0	4.5	0.6	11.02	サヌカイト
447	85		Ⅱ区西		スクレイパー	2.9	3.6	0.8	5.55	サヌカイト
448	85		Ⅱ区西		スクレイパー	7.9	6.0	1.0	59.75	サヌカイト
449	85		Ⅱ区西		剥片	3.1	1.6	0.3	1.15	サヌカイト
450	85		Ⅱ区西		二次調整剥片	3.4	2.4	0.4	3.32	サヌカイト
451	85		Ⅱ区西		剥片	4.8	4.0	0.7	19.59	サヌカイト
513	88	53	Ⅱ区東		石礫	1.8	1.3	0.4	0.51	サヌカイト
514	88	53	Ⅱ区東		石礫	1.7	1.7	0.3	0.55	サヌカイト
515	88	47	Ⅱ区東		石礫	2.3	1.3	0.3	0.75	サヌカイト
516	88	47	Ⅱ区東		石礫	1.9	1.4	0.3	0.51	サヌカイト
517	88	47	Ⅱ区東		石礫	2.0	1.7	0.4	0.86	サヌカイト
518	88	47	Ⅱ区東		石礫	2.0	1.8	0.3	0.75	サヌカイト
519	88	47	Ⅱ区東		石礫	2.8	2.2	0.4	2.07	サヌカイト
520	88	53	Ⅱ区東		石礫	2.5	2.1	0.5	2.49	サヌカイト
521	88	47	Ⅱ区東		石礫	2.1	1.4	0.3	0.90	サヌカイト
522	88	53	Ⅱ区東		石礫	2.6	1.7	0.3	0.67	サヌカイト
523	88		Ⅱ区東		矢頭器	4.7	1.6	0.7	6.10	サヌカイト
524	88		Ⅱ区東		剥片	3.1	3.0	0.8	10.45	サヌカイト
525	88		Ⅱ区東		石砲丁	4.8	4.4	0.9	18.13	サヌカイト
526	88		Ⅱ区東		スクレイパー	8.8	4.7	1.7	64.01	
527	88	41	Ⅱ区東		石帯	2.3	3.3	0.6	8.53	安山岩
641	93	41	Ⅱ区南		石銚	6.8	5.2	1.6	77.44	
660	96	53	Ⅳ区		石礫	2.3	1.5	0.3	0.66	サヌカイト

第6表 鉄器観察表

標文番号	押回番号	回版番号	出土地区	遺構名	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
2	7		I区中	SP482	釘	2.5	0.7	0.5	5.12	鉄
9	14		I区中	SP191	釘	3.9	0.8	0.5	11.81	鉄
10	14		I区中	SP191	釘	2.6	0.8	0.5	9.37	鉄
11	14		I区中	SP529	釘	4.9	1.0	0.5	19.77	鉄
12	14		I区中	SP529	釘	6.3	0.6	0.6	24.77	鉄
14	15		I区中	SP662	刀子	11.2	1.4	0.4	22.7	鉄
15	15		I区中	SP327	釘	5.4	0.6	0.5	8.74	鉄
23	18		I区中	SP646	銅銭	-	-	0.1	0.96	銅
42	33		I区中	SP144	刀	5.8	2.3	0.7	14.8	鉄
44	33		I区中	SP152	釘	5.1	0.5	0.5	15.68	鉄
45	33		I区中	SP160	銅銭	-	-	0.1	0.41	銅
52	33		I区中	SP367	釘	5.6	0.5	0.5	14.03	鉄
53	33		I区中	SP370	釘	4.8	1.0	0.5	6.68	鉄
59	33		I区中	SP522	釘	7.4	0.9	0.5	20.47	鉄
61	33		I区中	SP628	不明	3.1	2.5	0.7	27.65	鉄
63	34		I区中	SP659	釘	4.8	1.0	0.5	8.5	鉄
72	34		Ⅵ区	SP1167	釘	6.6	0.4	0.4	11.24	鉄
73	34		V区	SP1179	釘	3.8	0.4	0.3	2.44	鉄
74	34		Ⅵ区	SP1179	釘	3.0	0.4	0.4	3.66	鉄
75	34		Ⅵ区	SP1179	不明	2.7	2.3	0.4	4.12	鉄
76	34		Ⅵ区	SP1179	不明	5.4	2.9	0.6	14.41	鉄
91	39		I区中	SD28-31合流部	不明	3.1	3.1	1.5	36.35	鉄
92	39		I区中	SD28-30合流部	不明	5.3	4.3	0.3	27.92	鉄
93	39		I区中	SD28-31合流部	不明	5.7	2.0	1.7	42.22	鉄
94	39		I区中	SD29、30榫合部	釘	6.3	0.4	0.4	12.49	鉄
95	39		I区中	SD48、SD28~31合流部	釘	5.0	0.6	0.6	13.78	鉄
217	58		Ⅲ区西	SD74	釘	4.4	1.0	0.5	9.55	鉄
242	52		Ⅲ区東	SD78	不明	3.0	2.9	0.2	15.77	鉄

報文番号	挿回番号	図版番号	出土地区	遺構名	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
243	59		Ⅲ区東	SD78	不明	16	0.9	0.2	3.17	鉄
280	67		I区中	SK25	釘	6.4	0.7	0.4	9.49	鉄
281	68		I区中	SK33	釘	5.5	0.7	0.7	13.57	鉄
284	68		I区中	SK34	釘	5.3	0.5	0.5	10.38	鉄
285	68		I区中	SK34 内検出 pit676	鋤先	80	4.8	1.1	43.56	鉄
298	71	50	I区中	SK45	刀	29.8	2.8	0.8	181.79	鉄
305	73		I区中	SK53	釘	6.0	0.9	0.9	6.09	鉄
333	80		I区中	上面精査	釘	3.7	0.5	0.5	10.95	鉄
334	80		I区中	北東隅分電盤下	刀子?	10.3	0.8	0.2	33.12	鉄
452	85		Ⅱ区西	東南拡張部包含層等	不明	3.3	3.0	0.3	6.53	鉄
528	88	55	Ⅱ区東	包含層	帯金具(流方)	3.0	2.8	0.7	11.83	鉄、銅
529	88	55	Ⅱ区東	包含層	帯金具(丸髷)	3.2	2.0	0.5	5.36	鉄、銅
530	88		Ⅱ区東	包含層	釘	4.3	0.9	0.9	13.44	鉄
642	93		Ⅱ区南	包含層	銅鍍	2.4	2.4	0.1	3.36	銅
653	95		Ⅲ区西	ガリかけ	キセトル	8.1	1.2	1.0	10.59	鉄

第7表 木器類群表

報文番号	挿回番号	図版番号	出土地区	遺構名	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
244	59		Ⅲ区	SD78	木片	13.4	0.9	0.8	不明	
245	59		Ⅲ区	SD78	木片	12.0	1.1	0.7	不明	
256	61		Ⅳ区	SD78	板片	3.3	2.7	0.6	不明	

写真図版



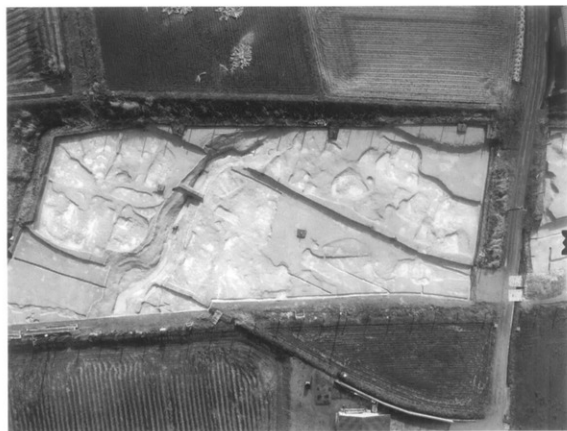
I区西・中 (真上から)



I区中 (東半)・東、II区西 (西半) (真上から)



Ⅱ区西(東半)・東・南東・南、Ⅲ区西(真上から)



Ⅲ区東・Ⅳ区(真上から)



Ⅵ区 (真上から)



Ⅱ区南 全景 (東から)



Ⅱ区南 検出遺構全景（東から）



Ⅱ区東 縄文河道調査風景（西から）



Ⅱ区西 北壁西部断面（南から）



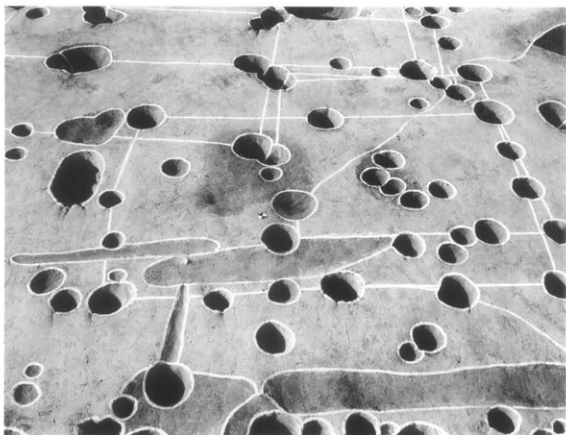
Ⅱ区西 北壁東部断面（南から）



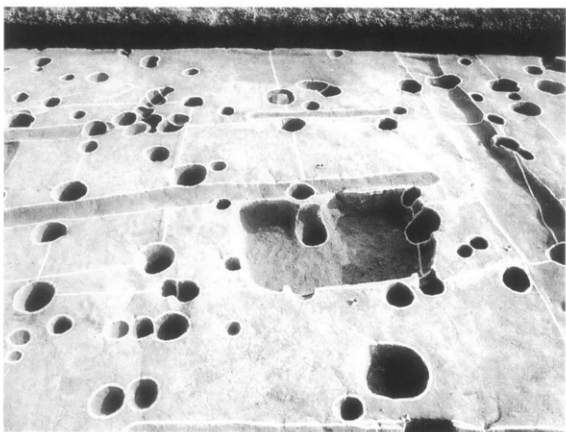
IV区全景 (西から)



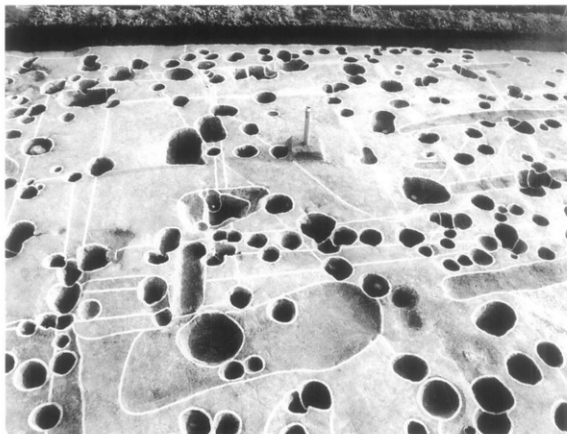
SB01・02 (南から)



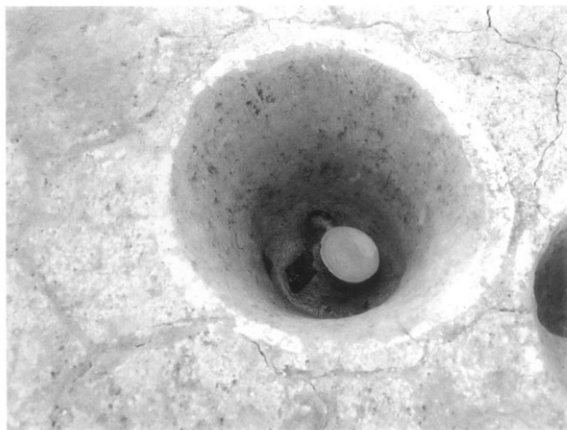
SB03・04 (南から)



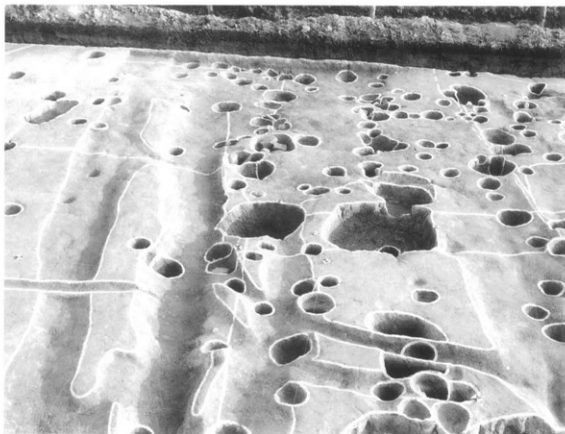
SB05・06 (北から)



SB07～09 (北から)



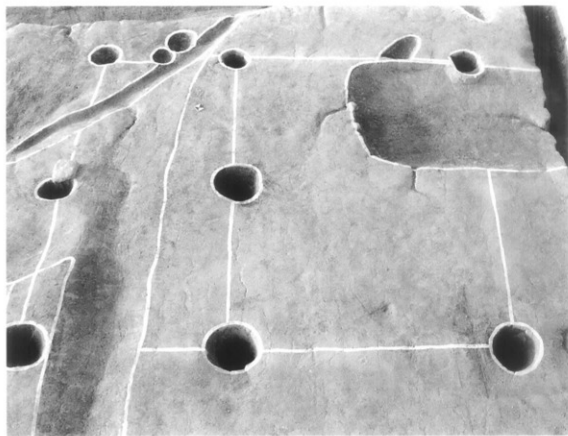
SP208 (SB07) 土器出土状況



SB10・11 (北から)



SB13・15 (北から)



SB14 (南から)



SB16・17 (北から)